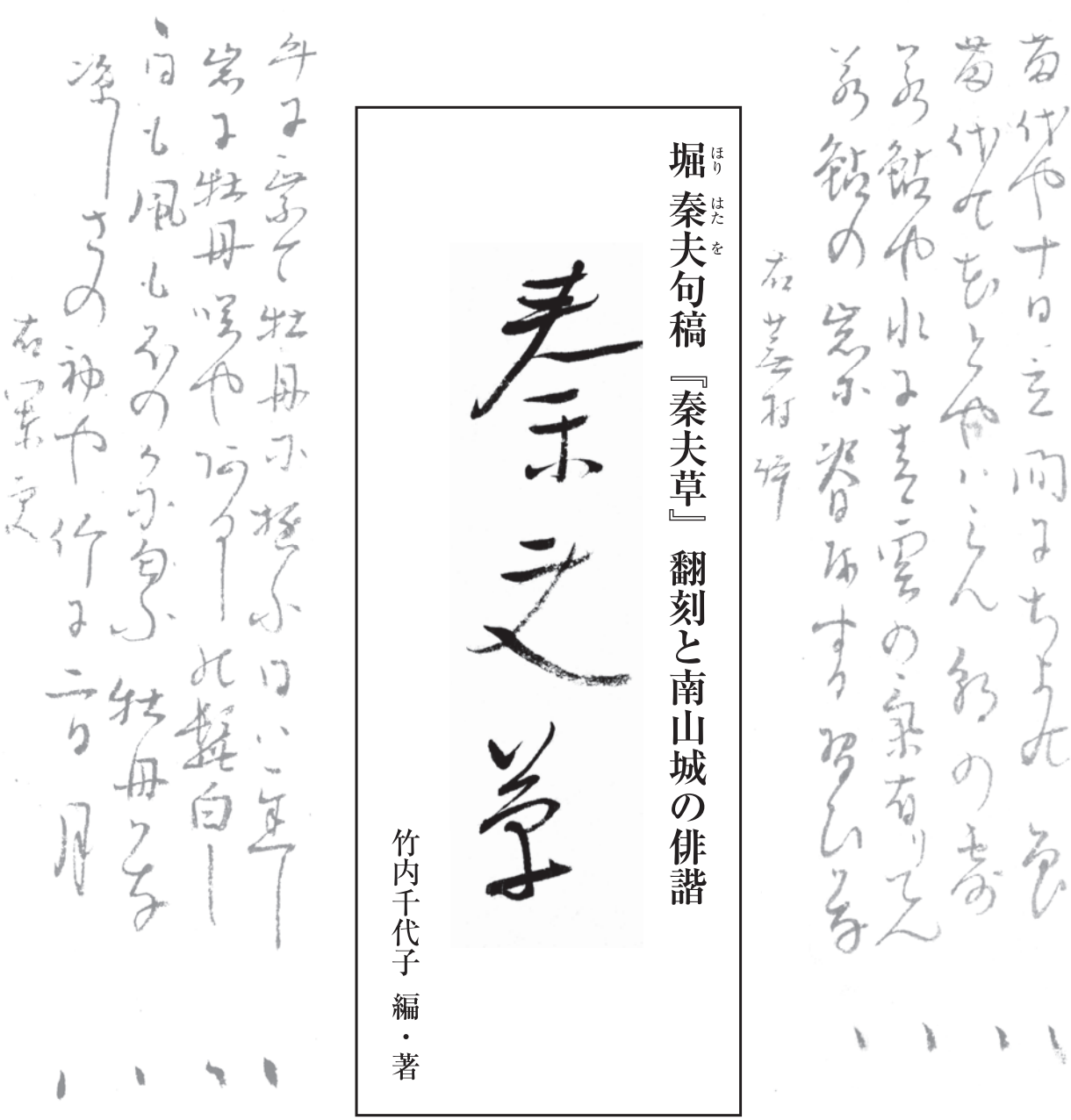


堀秦夫句稿『秦夫草』翻刻と南山城の俳諧

竹内千代子 編・著

堀（ほり）秦夫（はたを）句稿『秦夫草』翻刻と南山城の俳諧

目次

はじめに ――堀家の俳諧資料と『秦夫草』――
南山城寺田の俳諧 1
『秦夫草』翻刻 ――安永七年から寛政九年まで――
安永七年（安七・一オ～一六ウ） 17
安永八年（安八・一オ～二二オ） 19
安永九年（安九・一ウ～二一オ） 25
天明元年（天元・一ウ～一八ウ） 34
天明二年（天二・一オ～九ウ） 42
天明三年（天三・一オ～一三ウ） 49
天明四年（天四・一オ～一〇ウ） 53
天明五年（天五・一オ～四オ） 58
天明六年（天六・一ウ～七ウ） 63
天明七年（天七・一オ～六オ） 64
天明八年（天八・一ウ～一〇ウ） 67
寛政元年（寛元・一オ～六ウ） 70
寛政二年（寛二・一オ～四ウ） 74
寛政三年（寛三・一オ～七ウ） 77
寛政四年（寛四・一オ～五ウ） 78
寛政五年（寛五・一オ～三ウ） 81
寛政六年（寛六・一オ～五オ） 83
寛政七年（寛七・一ウ～三ウ） 85
寛政八年（寛八・一オ～二ウ） 87
寛政九年（寛九・一オ～四ウ） 88
『秦夫草』俳号等人名索引 89
おわりに 91
付記 94
99

はじめに

堀家は、江戸期、南山城城陽寺田の庄屋職でした。当家には、庄屋職に関係した資料とともに、俳諧資料の一群があります。これは、俳号秦夫の俳諧活動の集積です。

秦夫は、堀治佐衛門則辰。寛保三（一七四三）年生、寛政十二（一八〇〇）年閏四月二十三日没。俳諧は三浦樗良門。安永四年以降、樗良が没する安永九年までのことですが、最も影響のあった師です。初めは望月武然に交わりました。時には、与謝蕪村の評点を受け、最高点を得たこともあります。寺田地域の俳諧を取りまとめ、京都俳壇に交わった中心的な人物です。

当該の俳諧資料は、これまでに幾度か展示紹介されています。城陽市歴史民族資料館における折々の展示の常連ですが、俳諧資料の最もまとまった紹介は、平成十九年十月二十七日から十二月九日にかけて開催された京都府立山城郷土資料館開館25周年記念特別展です。凡そ八〇点に及ぶ出展は圧巻でした。当時の学芸員の伊藤太氏の精力的な活動に功績の多くはありますが、筆者も幾つかの発見に参与しました。そして、多くの学術的恩恵を得ました。その成果は、図録『南山城の俳諧―芭蕉・蕪村・樗良』（平成十九年十月刊）にまとめられています。

また、平成二十二（二〇一〇）年十一月一日から同月二十六日にかけて開催された「花供養と京都の芭蕉」の展覧会では、『秦夫草』を紹介しました。同展示は、立命館大学アート・リサーチセンターにおける『花供養』Webサイト開始・櫻井コレクションWeb公開記念、文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタルヒューマニティーズ」の一環ですが、筆者が筆頭執筆させていただきました。展示では、『秦夫草』を、これまで決定的な証拠資料のなかった花供養の行われた芭蕉堂の建立

時期を決定する証拠の一書として位置付けました。その成果は、図録『花供養と京都の芭蕉』（平成二十二年十一月刊）にまとめられています。その折、当該展示の性格から、城陽寺田地域の俳諧と京都俳壇とに関係した情報は、それ以上に発信できませんでした。この時から、この課題についての研究及び、発表が、私の新たな課題となりました。

堀家の俳諧資料には、秦夫が最高点を得た褒美として与えられた与謝蕪村の点帖、現在の研究調査網には載っていない孤本や稀刊本などがあります。しかし、より重要なのは、寺田地域の俳諧と京都俳壇とに関した細かな情報を丁寧に読み解くのに必見の資料群があるということです。『秦夫草』はその筆頭です。この度、堀家の協力を得て、『秦夫草』の翻刻と一部の図版を発表できることを幸いと致します。そして、このことは近世後期の京都俳壇の研究に寄与するものと考えられます。

堀家文書は、現当主によって手厚く保存されています。しかし、資料の物理的劣化からの保全は喫緊の課題でしょう。また、城陽市歴史民族資料館に存するマイクロ資料は、判読が困難になっているものもあり、新たにアーカイブ化が望まれるところです。広く人々に発信・提示して読んでいただきたいと思います。また、堀家からの発信が待たれます。末裔の視点から一先達の活動を見ることに意義があります。研究資料としてのみ、芭蕉や蕪村にのみ価値があるのでは無く、一人一人の営みこそが、文芸の存在意義でもありますから。俳諧は人の営みを炙り出す器です。

南山城寺田の俳諧

竹内　千代子

はじめに

近世中期の南山城（城南）の寺田の俳諧は、城南連の一つとして活動すると同時に、独自に展開していく。本稿における城南は、久世郡・綴喜郡・相楽郡のみならず、紀伊郡（伏見・淀など）・宇治郡・乙訓郡を含めて言う。それは、城南連中の動きが広域に亘っているからである。

現在、京都城陽寺田の堀家に、近世後期の俳諧資料が蔵されている。これを主に蒐集したのは、安永・天明・寛政期に寺田連を統率した堀秦夫である。この資料は、一九八五年頃に、城陽市社会教育課の調査が入り、現在は堀家文書マイクロ資料として、城陽市立歴史民俗資料館に蔵されている。また、その一部については図録『南山城の俳諧』（二〇〇七年十一月刊・京都府立山城郷土資料館）に図版と翻刻とが紹介されている。本稿では、この堀家文書俳諧資料を中心に近世中興期の寺田の俳諧を考察する。なお、論考の都合上、同図録の拙稿と重複するところがある。

城南の地は、京・大坂・奈良・伊賀・伊勢・志賀に抜ける交通の要所であり、近世以前から都市の近郊集落として栄えた。また、農耕に適した土地で、経済的にも豊かであった。近世においてもこれらの状況は同様であった。経済的に恵まれた環境からは、文芸が盛んとなり、俳諧も例外ではなかった。しかし、近世後期以降、都市を中心とした俳諧研究史から抜け落ちている。堀家文書資料は、俳諧史の空白部分を埋め、俳諧史を再検討する課題を提示する。

さて、近世中期城南の俳諧の特質は、地理的に京都に近いこともあり、京都俳壇の宗匠に師事し、特に都市系蕉門の影響が濃厚である点が指摘される。これは、同じく京都俳壇に直結している丹後連が地方系蕉門の影響が濃厚であるのと対照的である注1。ところが、城南俳壇の中心の一つである寺田連にあっては、宮津出身の玄化堂甫尺が寺田連に深く交わり、両

俳壇の交流を活発にした。その甫尺は主に京都俳壇にあって活躍し、京都と城南と丹後とを結ぶ重要な人物である。城南―京都―丹後を結ぶ視点は、俳諧史の再考に価する。

また、甫尺は兄の書肆玄化堂吉田九郎右衛門とともに三浦樗良の俳書出版に尽力し、兄没後もその志を引継いだ注2。甫尺の甥と推定される俳諧書肆菊舎太兵衛は注3、芭蕉関係の俳書や高桑闌更の『花供養』など当代の俳書も多く出版し、京都俳壇に影響力の強かった橘屋治兵衛や井筒屋庄兵衛と肩を並べるまでに伸張する。その出発点は、樗良の俳書を寺田の俳人と協力して出版したところにある。

ところで、近世中期城南俳壇の成立は、望月武然の蓮日庵に於いてであり、歳旦集『春慶引』にその一端を辿ることが出来る。その折の城南俳壇の中心は淀・伏見の連中であり、寺田の連中はやや後に参入していく。しかし、武然は安永四年で蓮日庵を文誰に譲る注4。その後の城南俳壇は、京都俳壇の与謝蕪村など都市系蕉門等と活発に交わっていく。さらには、天明六年に、闌更が洛東双林寺に芭蕉堂を構え、撰集『花供養』を年刊するが、これにも多くの入集が認められる。『花供養』は、全国の俳人からの句を集め、明治期まで連綿と続き、京都俳壇の一翼を担う存在である。

このような状況の中で、安永四年頃に、城南連から距離を置いて寺田連のみが樗良に師事するに至る注5。寺田連が樗良に師事したのは、安永四年頃から樗良が没する安永九年十一月十六日までであり、短期間であった。しかし、その傾倒には一方ならぬものがあり、師没後も敬慕する心は変わることがなかった。寺田の門人による樗良の発句集・付合集・文集や、菊舎太兵衛による樗良三部集・七部集の企画は樗良没後のものである。その一方では、他の城南連と同様に、京都の宗匠にも交わっていくのである。

本稿では、武然・蕪村・樗良との交際を軸にして考察を加えていく。

一　武然『春慶引』と城南俳壇の形成

武然は、望月宋屋の跡を継いで明和二年から安永四年までの『春慶引』を主催した。現在確認されている『春慶引』は、明和二・四・五・六・七・八・九年、安永二・三・四・五・六・七・九年である。このうち安永五年本は、堀家に蔵されており、未紹介資料であったので私に翻刻紹介をした注6。武然は、享和三年一月二十三日に没するが、安永四年中に富鈴房

（望月姓・机墨庵も含めて）を文誰に譲る。このことは、安永五年『春慶引』が、「机墨庵文誰」の主催であることが確認されて明白となった。以下に『春慶引』への城南連中の入集状況を概観する。なお、本稿と関連するものについては、俳人名などの入集状況を記し、傍線を施した。他は地域名などを適宜記した。

○ 明和二年（武然編）

・城南の連中　発句12句入集。

伏水鶴英・淀富葉ほか平川・寺田宜山・大久保。

○ 明和四年（武然編）

・「城南連」発句41句、歌仙1、連句3入集。

御牧聴雨、淀富葉ほか岩田・大住・田辺・薪・宇治・伏水鶴英・佐山・志津川。

○ 明和五年（武然編）

・他境の部―城南連中発句21句、歌仙1、連句1入集。

御牧聴雨、淀富葉ほか岩田・戸津・大住・薪・天神森・大久保・佐山・奈島・志津川・寺田三露一句、雀士一句、一方二句。

・備考　この年以後、淀城に水車の近景の挿図が入る。なお、伏見鶴英の参加が見られなくなる。

○ 明和六年（武然編）

・他境の部―城南連中発句42句、歌仙1入集。

御牧聴雨、淀富葉ほか岩田・天神森・戸津・薪・大住・大久保。

○ 明和七年（武然編）

・他境の部―城南連中発句48句、歌仙1、連句1入集。

御牧聴雨、淀富葉ほか岩田・大住・薪・天神森・大久保。寺田一方二句、一狂三物一・平川・宇治。

○ 明和八年（武然編）

・他境の部―城南連中発句67句、歌仙1入集。

御牧聴雨、淀富葉ほか上奈良・岩田・大住・薪・田辺・天神森・草内少年雲里一句（歌仙も同座）・飯岡・寺田一方

二句、秦夫三句・平川・大久保。

○明和九年（武然編）

・他境の部―城南連中発句110句、連句1、歌仙1入集。

淀南浦・御牧聴雨ほか淀・上奈良・岩田・大住・薪・天神森・草内雲里一句（歌仙も同座）・寺田一方二句（歌仙も同座）、秦夫二句（歌仙も同座）・上狛・大久保・佐古・佐山・平川・平尾・広野・伊勢田・小倉・志津川。

○安永二年（武然編）

・他境の部―城南連中発句80句、歌仙1入集。

御牧聴雨ほか岩田・大住・薪・天神森・草内雲里一句（歌仙も同座）・飯岡・平尾・寺田一方二句（歌仙も同座）、秦夫三句（歌仙も同座）・平川・広野・大久保・淀・上狛・奈島。

○安永三年（武然編）

・他境の部―城南連中　発句83句、連句1、歌仙1入集。

御牧聴雨、淀富葉ほか岩田・大住・天神森・草内雲里二句（歌仙も同座）・飯岡・平尾・寺田一方二句（歌仙も同座）、秦夫三句（歌仙も同座）・平川・広野・大久保。

○安永四年（武然編）

・他境の部―城南連中発句45、歌仙1入集。

淀富葉ほか岩田・大住・天神森・平尾・中村・寺田鶴士二句（歌仙も同座）、秦夫二句（歌仙も同座）・画林一句（歌仙も同座）・岸水二句（歌仙も同座）・平川・広野。歌仙のみに雲里・一方並んで入集。

・備考　淀城に水車の挿絵が遠景。御牧聴雨の入集が見られなくなる。

○安永五年（文誰編）

・他境の部―城南連中　発句24句入集。

淀鶴有ほか岩田・大住・天神森・山本・平尾・寺田秦夫・桃里・奈島・薪。

○安永六年（文誰編）

・他境の部―城南連中　発句19入集。

淀鶴有ほか岩田・天神森・綺田（かばた）・山本・山田・奈島。

○ 安永九年（文誰編）

・他境の部―城南連中　発句９入集。

淀鶴有ほか大住・綺田村・狛・木津・伏見。

右に一覧した中で注目されるのは、明和四年より小野にも蓮日庵が設けられて城南連の月並が始まり、「城南連」の形成が明確になることである。翌五年からは「他境」の筆頭に揚げられ、淀城と水車の図を添えることを常とするようになる。これは、京都から距離を置くが、城南連が独立し、一勢力となったことが認められたということである。また、城南連は、最初に伏見の鶴英・淀の富葉・御牧の聴雨を中心に結束していったものと推察されるが、明和五年に伏見鶴英の入集が見られなくなり、また御牧の連中も少なくなり、淀城を掲げた淀連を中心に発展していくのである。このようにして武然に師事して盛んであった城南連であるが、武然が富鈴房を文誰に譲った後はやがて遠ざかっていった。一方の武然は、富鈴房を譲ったのちも『春慶引』編纂に協力的である。

武然は富鈴房を結果的には文誰に譲ったが、それ以前に、城南の薪の俳人何得にそれを譲ろうとしていた。それは、「五月十五日付秦夫宛何得書簡」注7から知られる。

然ば、野子義も近来は上京、啓斎町内ニ僑居仕罷在候。今般、富鈴房あと文誰相承候処、家事も繁候ニ付、私ェ相譲たき旨、啓斎とも相談ニ望候。（略）剡山更何得

とある。本書簡の署名は「剡山更何得」で、安永五年春以後同六年春以前のことと推察される。そこで何得の動向を『春慶引』によって示す。

○ 明和四年 ― 薪始達　　○ 安永二年 ― 薪剡山
○ 明和五年 ― 薪始達　　○ 安永四年 ― 京都連剡山
○ 明和六年 ― 薪始達　　○ 安永五年 ― 薪剡山
○ 明和七年 ― 薪始達更剡山　　○ 安永六年 ― 剡山更可得
○ 明和八年 ― 薪剡山　　○ 安永九年 ― 京都連可得
○ 明和九年 ― 薪剡山

前に示したごとく、初号は始達、明和七年に剡山と改号、安永六年に可得に改めている。「可得」と「何得」とでは、音が同じであり、同時に使用している可能性もあるが、「剡山」を改め「可得」に至るまでの間に「何得」を用いたと考えられる。とすれば、「剡山更何得」は安永五年春以降、同六年春以前のものと考えられる。

何得は、同書簡の表書に拠れば、「吉田何得」であり、武然も吉田氏であり、両者には何らかの関係が推察されるところである。因みに、「啓斎」は武然の別号である。武然は、安永四年の『平安人物志』に、「書家　源明　字知常号方壺　新烏丸丸太町上ル町　吉田武然」とあり、「篆刻者」の項にも再出している。

何得の書簡は、富鈴房の継承にあたって、何得が寺田の秦夫・敬止、淀の富葉、大住の岡村鋤月に援助を依頼したものである。城南連中は武然の有力な地方連中の一つであり、地理的にも京都の市中に近いため白羽の矢が立ったのであろう。その裏付として、何得は安永三年に、武然の「新烏丸丸太町上ル町」（明和五年・安永四年『平安人物志』）の近くの「新烏丸二条上ル」（書簡の住所）に居を構え、安永三年『春慶引』の京都連に加わっている。また、安永五年の文誰編『春慶引』には、城南奈嶋の日々庵九可注8と「剡山」（何得）は拓本摺りの特別枠で入集をしている。しかし、何得の継承は実現しなかったのである。

さて、明和五年『春慶引』によれば、武然が明和四年に城南の小野にも蓮日庵を設け、城南の月並会は始まっている。

城南の俳諧日々盛んにして、去年の秋より小野の杜に一宇をものし、是をも蓮日庵となづけ、月次の会を催して、其日〳〵は予をも呼むかゆる事に成しより（略）

城南連中も「城南連」の呼称を用い、俳壇の形成が明らかとなる。翌年の明和五年以後の『春慶引』に、城南は他境の部に独立し、淀城と水車の画（半丁分）を最初に掲げ、淀連を中心に入集することとなる。寺田からの入集は、明和二年の宜山から認められるが、実質的な参加は明和五年の竹嶋一方からである。明和八年から秦夫が加わり、「一方・秦夫」の体制が出来上がるのである。なお、一方は間もなく没し、竹嶋雲裡に引き継がれる（本稿三の「〇雲裡」参照）。しかし、安永五年に文誰に引き継がれた『春慶引』の寺田連また城南連は、以前に比して入集句数がかなり減少し、武然門への参集の終焉期とみなされる。

なお、堀家文書には武然の点帖が二冊残されている注9。やや小振りであるが彩色を施した豪華な仕立である。入集者は淀連が中心で、その中の寺田の秦夫が最高点、当時の慣例として最高得点者の賞品となり、現在まで堀家に蔵されている。

二　蕪村と城南俳壇

次に、武然以外の京都俳壇を中心とした俳人との交際をみていく。ここでは、堀家文書により寺田連の状況を軸として考察する。

まず、与謝蕪村との交際が、点帖「題　春雨　夏木立　秋の蝶　冬籠」注10（以下、蕪村評点帖という）と、「蕪村評月並抜書」注11（以下、蕪村評月並という）とによって確認できる。

蕪村評点帖の成立は、城南連中の入集が多い蕪村の『安永四年春帖』の頃、また、帖中の城南連中と、安永四年の武然の蓮日庵月並興行の連中とが重なる安永四年のことと推測される。同帖の巻末の「月並発句合　賞花高低如左」の一丁半は、蕪村加点の集計結果とみられるが、記載されている寺田の秦夫・敬上（止）、淀の山肆・泉志、草内の「雲里」、美豆の雅笑、深草の亀水、田原の紅友・有石らは、蓮日庵月並連中でもある。そのうちの草内「雲里」は、蕪村の『安永四年春帖』に、「草内雲里」として入集している。また、武然の『春慶引』では、「草内少年雲里」として明和八年から安永三年までが確認できる。彼は、後に寺田に移るが、安永四年の『春慶引』では、寺田の竹嶋一方に並んで「雲里」とあり、この後に竹嶋家の養子となったものと推察される（本稿三の「〇雲裡」参照）。因みに、「雲里」・「雲裏」の表記は、安永四年頃までで、後は「雲裡」と表記している。さらに、寺田連の重鎮である一方が、蕪村評点帖に入選していないのは、安永四年十月十五日に没したことによると推察される。このため点帖の成立は、安永四年の後半のことと考えられる。

ところで、蕪村点帖は、最高点を得た秦夫に与えられ、堀家に伝来したものであるが、次点は淀の山肆である。山肆も、蕪村の『安永四年春帖』に入集している。また、武然の『春慶引』にも、安永三年と四年に入集している。その山肆に宛てた蕪村の書簡がある。「安永四年閏十二月十四日付山肆宛蕪村書簡」注12のそれには、

一　月並発句愚評、則飛脚へ差遣候。病中ゆへ、僻考の段も御社中へ御伝達可被下候（略）

という。この「月並発句愚評」が、堀家文書の蕪村評点帖であるとすれば、同点帖の成立は、安永四年閏十二月十四日となる。また、山肆の書簡の年次推定「安永三、四年十月二十八日付山肆宛蕪村書簡」注13に、蕪村が城南連中の句評をしたことが記されている。

まことに先日御噂の発句合愚評あふせにまかせ候。元来発句には高点出しがたきものに候へども、世話候ては興少候故、

おびたゞしく撰び出し候（略）

という「発句合愚評」は、先にあげた「安永四年閏十二月十四日付」書簡の「月並発句合愚評」ことであると考えられる。また、蕪村評点帖に高点句が少ないことから、「元来発句には高点出しがたきもの」との評語とも一致する。従って、十月二十八日付け書簡は安永三年よりも同四年と考えられ、蕪村評点帖についての書簡は、先に十月の選評の様子があり、次に閏十二月の発送があったものと推察される。

城南連が蕪村に加点を求めたものは、先の蕪村評点帖だけではない。それは、堀家文書の中に、蕪村の直筆の評があるのではないが、秦夫の書き抜いた蕪村評月並があることから知られる。この蕪村評月並は、蛙・朧月の句が並び、淀連の富葉・山肆等、伏見連の賀瑞等の名があり、「巻納　雲裏／二　山肆／三　賀瑞」の結果が記されている。入集者の一人である富葉には、年次推定「安永三年九月十六日付富葉宛蕪村書簡」注14がある。

可限（歌仙）引墨、相下候。一巻めでたく承候。（略）

という。蕪村評月並の「巻納」とは、最高点で評点の一巻を獲得したことを示すのであろうが、書中の「一巻」と符合する。巻物を獲得した「雲裏」の表記は、「雲里」から「雲裡」へと変わっていくのであるが、安永四年以前であると推測される。また、「雲里」は蕪村の『安永四年春帖』にも入集している。さらに、富葉は蕪村の『安永四年春帖』に入集しているし、武然の『春慶引』では、明和二年から安永四年まで入集している。これらのことから、同書簡も安永四年のことと考えられる。いずれにしても、城南連に蕪村が評を施した点帖と月並とは、いずれも寺田連に納まったということである。

蕪村と伏見連・淀連との交際は周知のところであるが、寺田連中がそれらに連なって出句し、蕪村の高点を得たのである。さらに寺田連は、武然門の俳諧連中から距離を保ちつつ、京都・近江の宗匠らとの交際を活発に展開していくのである。以下には、蕪村以外の寺田連との交際があった俳諧師をみておく。

○江涯 ―― 加賀の人、呉夕庵と号す。安永頃に近江八幡の竹庵に遊ぶ。堀家文書に点帖一紙注15がある。安永五年『張瓢』、安永六年『仮日記』、天明元年『浪速住』等を編纂し、秦夫・良水・雲裡・玄化・甫尺・定雅等が入集。なお、『張瓢』『仮日記』は、書肆玄化堂吉田九郎右衛門梓。

○斗酔 ―― 肥前長崎の人、幾夜庵と号す。行脚が多く、安永頃は伏見の宗匠でもあった。斗酔主催の安永五年〔春興〕には、秦夫・良水・玄化・甫尺等が入集し、寺田連の結束が強まる。本書は書肆玄化堂吉田九郎右衛門梓。安永期の句帖

「秦夫草」注16に名がみえる。

○ 嘯山 ―― 三宅氏、望月宋屋門、武然と同門。安永九年の句帖「秦夫草」に「嘯山撰画賛合」の記載がある。また、嘯山評の一紙注17には、寺田秦夫・鶴士他、平尾・椿井・大久保・上狛の連中の名が見える。

○ 冷（令）五 ―― 吉田氏、茶良亭と号す。知恩院新門前中橋に居住。安永十年の「秦夫草」に、秦夫の発句に冷五が脇を付けているものがある。「茶良」評の点帖が二冊注18あり、寺田秦夫・敬止等の名が記されている。

○ 五雲 ―― 炭太祇の不夜庵を継ぐ。五雲主催の寛政四年『春帖』の「七十四翁　五雲」より逆算して、享保四年生まれ。寛政七年以後没。寛政三・四年の『春帖』に寺田秦夫・良水・雲裡等が入集している。同春帖は、横本仕立の瀟洒な絵入り本で、都市系蕉門の色彩が濃い。他に、五雲筆秦夫宛の安永五年・天明元年の年賀状と、前句付けの評点が入っていると思われる小短冊二枚がある注19。五雲との交際は、安永五年頃から寛政四年頃まで認められ、長期にわたる。

右に通覧した俳諧師は、五雲を除いて、安永五年以降から天明元年までの間の交際である。また、次に述べる樗良も同様である。寺田の連中は、この頃に多くの俳諧宗匠と交わっていくのである。このように盛んに評点を求めていくのは、時代の風潮でもあるが、寺田連の実力が充実していったからであると推察される。そのような状況の中で、寺田連中は樗良を指導者として選び、城南俳壇から一定の距離をもって独自に発展していくことになるのである。次に、その寺田連中について述べる。

三　寺田連を支えた俳人

安永期に寺田連を形成し、これを支えた俳人について記す。

○ 堀秦夫 ―― 堀治佐衛門則辰。庄屋職。寛保三年生まれ（寛政四年に五十歳、「秦夫草」より）、寛政十二年閏四月二十三日没。戒名、則辰院照誉光偏居士。享年五十八歳。俳諧は、宝暦八年頃より始め、武然に師事。後、安永四年に樗良に入門し、寺田連を統率するに至る。俳号は、寛政六年より鷺道庵南和に改号。他に、春風亭。主な編著作は、句帖「秦夫草」、家集「蓑ノ片荷」注20、寺田連著『芳野行』注21。

○ 竹嶋一方 ―― 竹嶋伝右衛門。武然門。明和七年『春慶引』より入集。安永五年『春慶引』未入集の状況により、前年

に没したと推定。秦夫著「句集」の「竹嶋何某十月十五日に身まかり給ふに年七十余」により、安永四年十月十五日没、享年七十余歳と推定。

○竹嶋雲裡 ―― 与介（助）。字美葛。五蜂庵。梨下亭。安永四年以降の秦夫「句集」に、「竹嶋何某十月十五日に身まかり給ふに年七十余」とある近くに「竹嶋氏の養子を祝」とあり、城南草内の「雲里」が養子なったものと推定。武然の明和八年『春慶引』に「少年雲里」として出句（歌仙にも同座を含む）、以後安永四年まで出句。最初は武然門、安永四年以降は樗良門。『樗良文集』（天明六年甫尺序、菊舎太兵衛刊）の上梓にあたって、天明六年に序文を記す。文政四・五年頃、城南の奉額発句合に判をする注22。

○上田良水 ―― 上田与三右衛門。宝暦三年生まれ、天保七年八月十六日没。享年八十四歳。安永四年十月に俳号を歌橋から良水に改める注23。竹隠舎とも号す。安永四年以降は樗良門。それ以前は、江涯との交際が認められる。『樗良集附合』（『樗良集　発句・附合・文集』のうちの一冊。菊舎太兵衛刊）の上梓にあたって、文化二年冬に序文を記す。

○玄化堂 ―― 書肆吉田九郎右衛門。丹後宮津の出身。安永七年六月没。享年未詳。俳諧は樗良門、樗良の発句集出版を企画するが、志半ばで没する。玄化堂一周忌の追善集の計画が、秦夫宛甫尺（推定）書簡注24にみえるが、実現はしなかったようである。この追善六歌仙に名を連ねている俳諧師は、中興期京都俳壇を牽引する人々であり、寺田連にとっては交際の縮図ともなっている。以下の次第である。

春の巻　半化（闌更）　冷五　京連中
夏の巻　暁台　幻住庵社中
秋の巻　江涯　近江八幡社中　良水
冬の巻　樗良　秦夫　私（甫尺）
恋の巻　燕村　几董　定雅　私（甫尺）
雑の巻　蝶夢　丹州東陌　三吟（甫尺）

○甫尺 ―― 丹後宮津の出身。生年未詳。清水孝之著『追跡三浦樗良』によれば、「宝暦初年生まれ」とする。玄化堂吉田九郎右衛門の弟で、兄の没後に二世を名乗る。天明四年に書肆業を甥（書肆菊舎太兵衛と推定注25）に譲り、天明五年六月十一日に寺田の雲裡亭で剃髪する。樗良に師事し、兄の志を受け継ぎ、天明四年に序文を記し『樗良発句集』（秦夫跋

文、菊舎太兵衛刊）を上梓する。寺田連中と終生親しく交わり、一説に、甫尺の墓は、寺田連の良水・雲裡等によって京都洛東双林寺に建てられたという注26。文化元年四月十七日没。享年未詳、五十余歳か注27。現墓所は宮津の智源寺。甫尺は絵を能くし、「樗良発句画賛」（阿雲水書画）注28は、甫尺のものであると推測される。なお、定雅と親しく、江涯・良水等と同座する連句録も堀家文書にはある。

四　樗良と寺田連

三浦樗良は、安永四年以降の寺田連中と親交が厚く、堀家文書に樗良・秦夫の往復書簡一通、および秦夫宛樗良書簡五通がある。寺田連中は、安永四年頃から樗良が没する同九年十一月十六日まで師事するが、没後も樗良を慕い、樗良に関係した活動を要所に組み込んでいる。樗良生前の俳諧指導の一端は、丁摺集「無為庵樗良叟月並発句」やその一部に対応する点帖に認められる注29。

秦夫は、樗良への入門期と推察される安永四年の「句集草稿」注30の執筆開始の言葉に、安永四年以前の句は除く旨を記し、並々ならぬ決意のほどを示している。

一　宝暦八寅より安永四未迄之句、千八百七十句、除之。

一　是ハ安永四未年以来ヲ記ス也。

安永四年以前の千八百七十句とは相当な数である。武然の富鈴舎の月並みに加わり、頭角を現した秦夫であったが、安永五年に文誰に引継がれた富鈴舎の月並みに、吸引力はなかった。そこに出現した樗良は、誰よりも大きな吸引力となった。先輩格の一方がこの頃に没し、名実ともに寺田連の頂点に立った秦夫は、新しい指導者を希求していたのであろう。また、樗良にとっても俳諧・経済的に有力な門人の獲得となったのである。

さて、寺田樗良門の俳諧活動の頂点の一つは、樗良の句集を出版することであった。俳人であり書肆であった玄化堂吉田九郎右衛門は、樗良発句集の上梓を企て、安永六年には版を起こすところまでに至っていた。『樗良発句集』再刊の刊記に拠れば、（傍線稿者）

安永六酉初夏刻　　寛政四子仲秋再刻

京三条通寺町西入　　御俳諧書林　菊舎太兵衛

とある。しかし、玄化堂は発刊を果たさず、安永七年の六月に没した。没後は、弟の甫尺が志を引継ぎ、天明四年春に序文を認め、秦夫が跋文を認め、『樗良発句集』（前編）は天明期に菊舎太兵衛から刊行された。しかし、寛政四年再刻の菊舎の序文中に「池魚の災にかかりて」とあり、板木が焼失して再刻となった次第が知られる。因みに、菊舎の出版は天明版のそれが最も初期のものの一つである。菊舎の出版の一部が目録に残されている注31。

また、寺田連中は、樗良七回忌にあたる天明六年に、樗良全集の企画を立てている。この企画は、伊勢の樗良門である橘宗居に伝えられ、その協力的な返書が秦夫のもとに届いている注32。樗良全集の刊行は、伊勢や北陸の門人達も考えていたであろうが、寺田連中が先に実行し得たのは、玄化堂や甫尺が書肆吉田九郎右衛門であり、昵懇の書肆菊舎太兵衛（俳人其成）がいたからである。書肆を抱え込んだ状況が寺田にあったのである。このように寺田連は、俳諧の実作から出版までを容易に成し得たところに特長がある。

樗良全集の状況は『樗良文集』の広告に次のようにある。

樗良発句集　洛陽甫尺著
同　後編　城南良水著
同　附合集　同　秦夫著
同　文集　同　雲裡著
同　自他論〔墨刷り〕

このように計画が立てられたが、実際は次の如くであった。

○『樗良発句集』（前編）――甫尺編、天明四年春甫尺序、秦夫跋、天明期に刊。後、菊舎太兵衛刊に版権が移る。

○『樗良発句集後編』――良水編の刊行はなく、城南寺田社中再校『樗良発句集』（上下二巻二冊）として、板木が焼失した前編に句を加えて再編し、寛政四年仲秋に菊舎太兵衛から再刻された。なお、同じものが後に『樗良集　発句』（上下二巻一冊）としても刊行されている。

○『樗良附合集』――秦夫編の刊行はなく、『樗良集　附合』（内題・樗良集附合集中巻）として、秦夫没後の文化二年冬に、良水の序文で、菊舎太兵衛から刊行された。

○『樗良文集』（扉題・無為庵文集、内題・樗良翁文集）――雲裡編、天明六年春甫尺序、同雲裡序、菊舎太兵衛によって刊行（初刷）された。なお、後に『樗良集　文章』（内題・樗良翁文集、柱刻・下）として、菊舎太兵衛から刊行（後刷）された。

○『樗良自他論』――未詳。宗居の書簡から類推すると、自他の句（樗良の句と他俳人の句）を番にして批評するものと推測される。

なお、樗良の家集には、題簽の意匠を揃えた『樗良集　発句』（乾坤二巻二冊）、『樗良集　附合』（内題・樗良附合集　中巻）、『樗良集　文章』（樗良翁文集、柱刻・下）の樗良三部集がある。

右のような寺田連中と樗良との親密な関係は、他の城南連と樗良との間には見られない。寺田連中と樗良との出会いは、千載一遇のことであった。しかし、樗良に直接師事した期間はあまりにも短かった。そのため、寺田連は、多くの京都の俳諧宗匠に接触していったが、そのなかで最も安定して長期にわたって交際が認められるのは、高桑闌更である。

闌更は、天明六年三月十二日に、東山双林寺において花供養会を主催し、撰集『花供養』を刊行する。以後、毎年刊行される。その『花供養』に、寺田の連中は天明七年から入集が確認でき、毎年ではないが文化四年までしばしば入集している。なかでも闌更が没する寛政十年までが活発である。闌更と寺田連とは以前から交際が深く、安永十年の「秦夫草」中に秦夫との交際の記載が見られ、闌更が関係する俳書『草津集』（安永四年六月闌更跋）や『秋風塚集』（安永五年秋序、闌更序）などに秦夫・雲裡・良水・甫尺等の入集も見られる。

おわりに

闌更の『花供養』は、寺田連だけでなく城南連中にとっても、武然の『春慶引』後の新しい俳諧活動の拠点となっていくが、城南俳壇は、京都俳壇に接しながらも独自に展開していく。明和・安永期頃は、武然の『春慶引』や蓮日庵月並などに、淀連中を中心として多くが参集した。天明期後半以後は、闌更の『花供養』に城南連中の多くが参集していった。その間の寺田連と樗良との交際は、城南俳壇においても独自である。寺田連を中心にして、城南連中が参集するということは無かった。しかし、甫尺を一つの軸としては、城南―京都―丹後が一直線に結ばれる。因みに、丹後宮津俳壇が拠所の一つとした

芭蕉墓のある義仲寺の『時雨会』への参集状況は、地理的にも近いので城南連中の入集は充分に考えられる。ところが、芭蕉百回忌の寛政五年前後は、寺田の秦夫（南和）、淀の山肆、八幡の斗流などが参集しているが、多くは『春慶引』『花供養』に入集している俳人と異なる人々である。ここに地理的な距離に比例しない俳壇の影響が見られるのである。それは、都市系蕉門と地方系蕉門の二潮流注33が色濃くあった天明期京都俳壇の名残である。城南・寺田の俳諧は、都市系蕉門の影響が強いのである。城南に地方系蕉門の影響力の強い芭蕉句碑・芭蕉堂などが少ないのはこのためである。以上のように、本稿では地方俳壇から俳諧史を考察することを試みた。

注1　丹後連の考察については、拙稿「『秋のわかれ』と中興期京俳壇」（立命館大学アート・リサーチセンター紀要「アート・リサーチ」第五号）、「芭蕉百回忌と丹後の芭蕉塚」（英知大学人文科学研究室紀要「人間文化」第九巻）に述べている。

注2　甫尺の俳諧活動については、拙稿「玄化堂甫尺（書肆吉田九郎右衛門）の俳諧活動」（関西大学国文学会「国文学」第九十一号）に考察している。

注3　甫尺が菊舎太兵衛に書肆業を委譲することについては、注2に示した拙稿に考証している。さらに、菊舎太兵衛は甫尺の甥であると推定されることについては、拙稿「『雪まろげ』の版権と蕉門書林」（聖トマス大学人文科学研究室紀要「人間文化」第十二号）に述べている。また、菊舎太兵衛の書肆活動については、拙稿「菊舎太兵衛の俳書刊年考」（龍谷大学国文学会「国文学論叢」第五十三輯）に考察している。

注4　谷地快一稿「『春慶引』をめぐって」（『俳文芸の研究』）に、安永五年に文誰が継承したことが記されているが、年次の根拠となる資料は示されていない。それは、安永五年版の『春慶引』が知られていなかったからである。この度、この空白は、堀家文書によって補われ、文誰が継承した年次の確認が得られた。なお、この本文は、拙稿「安永五年『春慶引』解題と翻刻」（聖トマス大学人文科学研究室紀要「人間文化」第十一号）に紹介している。

注5　清水孝之著『追跡・三浦樗良』（平成三年九月、皇學館大学出版部刊）を参照した。

注6　堀家文書 6-7-70。注4で示した拙稿「安永五年『春慶引』解題と翻刻」に紹介している。

注7　堀家文書 11-4-565。

注8　九可は、城南奈島の人で、日々庵と号す。蓮日庵の一字を採っての命名であろう。その九可の点帖が堀家に残されている。それからは、

点者として立机する実力者であったことが知られる。また、十種類の点印と点数との一覧が記されており、地方点者の詳細が知られる貴重な資料である。堀家文書 11-5-49。縦一八・九糎、横二五・五糎。

注 9　堀家文書 11-5-28　縦二一・七糎、横一七・〇糎。同 11-5-32　縦二一・八、横一六・八糎。

注 10　堀家文書 11-5-51。縦一七・六糎、横二四・〇糎。同書の詳細は、藤田真一稿「新出・蕪村評点帖―南山城の俳諧と蕪村」（関西大学国文学会「国文学」平成二十一年三月第九十三号）に紹介されている。

注 11　堀家文書 11-5-81。縦一五・三糎、横二七・一糎。

注 12　講談社『蕪村全集　第五巻　書簡』に拠る。書簡92。

注 13　注12に同じ。書簡94。

注 14　注12に同じ。書簡67。頭注に「明和五年以後安永三年までの武然の『春慶引』に入集」とするが、明和二年から安永四年までが確認できる。

注 15　堀家文書 11-5-47。縦一七・八糎、横二二・五糎。

注 16　堀秦夫の句帖で、安永七年「はたをくさ」から、寛政九年「秦夫草」まで毎年書き留められている。天明五年から表題が漢字表記に変わるが、本稿では「秦夫草」で統一した。堀家文書 6-7-88 ～95。また、安永四年からの句集草稿（堀家文書 6.7.87）もあるが、これは必ずしも年次別に成っていない。

注 17　堀家文書 11-5-126。縦一五・九糎、横四五・七糎。

注 18　堀家文書 11-5-47/11-5-52。

注 19　『春帖』　堀家文書 6-7-55/6-7-60。年賀状　堀家文書 11-5-74/11-5-7（縦一二・四糎、横九・六糎）。小短冊堀家文書 11-5-60/11-5-62（縦一六・八糎、横二・五糎）。

注 20　堀家文書 11-5-41。展示図録『南山城の俳諧』（二〇〇七年十一月・京都府立山城郷土資料館刊）に松清真由子校訂・翻刻紹介。

注 21　堀家文書 6-7-50。展示図録『南山城の俳諧』（二〇〇七年十一月・京都府立山城郷土資料館刊）に竹内千代子校訂・翻刻紹介。

注 22　雲裡の伝記資料は、中嶋家日記 39-5、奉額については、中嶋家日記 3t-39-2によった。「中嶋家日記」は、寺田の神職中嶋家の文書で、現在は城陽市歴史民俗資料館に所蔵されている。

注 23　良水の伝記資料は、中嶋家日記 39-8によった。改号については、堀家文書 6-7-26によった。

注 24　堀家文書 11-5-68。

注 25　拙稿「玄化堂甫尺（書肆吉田九郎右衛門）の俳諧活動」（関西大学国文学会『国文学』第91号）に述べた。

注26　小室洗心著「玄化堂甫尺」（郷土と美術44号）に「甫尺の墓は宮津の智源寺にあり門人が建てたと云ふので宮津が終焉の地ともみられてゐたが、京都東山双林寺中にも同様の墓石のあることがわかった、（略）京都の分は施主（建立者）が光阿・得朗（ママ）・良水・雲裡の四人で之は伏見（ママ）城南社の同人で甫尺も亦仝社中の人であったのである。」という。また、丹後宮津住の俳人黒田甫夕稿「甫尺伝」（不毛録巻三）によれば、「文化元年四月十七日、京に於て歿し双林寺に葬らる。樗良同門の雲裡・良水・白朗などに依て石碑立てられ、翌年、宮津智源寺にも社中の碑立つ。享年は五十五歳前後ならん。（略）甫尺の歿年については文化元年四月十七日、この事に就て、東山双林寺墓地における墓石に、施主光阿・白朗・良水・雲裡の記せる所より間違いなし。」という。

注27　甫尺の享年については、注5の清水孝之稿「宝暦初年生れ」、および、注26の黒田甫夕稿「享年は五十五歳前後ならん」の言及があるが、いずれも証拠となる資料の提示はされていない。

注28　堀家文書 11-5-40。

注29　樗良の堀家文書資料は、秦夫往復書簡が 11-4-60/553、書簡が 11-4-550/552/562/598/600、丁摺集が 6-7-67、点帖が 11-5-29。

注30　堀家文書 6-7-87。

注31　堀家文書 6-8-15。菊舎太兵衛の出版状況については注2の拙稿「菊舎太兵衛の俳書刊年考」に述べた。

注32　堀家文書 11-4-578。宗居は、樗良編『我庵集』の序文を記した伊勢門人の有力者であるが、士官中の状況から、樗良集の刊行を実行することは容易ではないという。

注33　田中道雄著『蕉風復興運動と蕪村』（二〇〇〇年七月、岩波書店刊）の「蕉風復興運動の二潮流」に拠る。

【附記】　堀家文書資料の学術提供にご快諾を頂きました堀家、並びに元山城郷土資料館の伊藤太氏、元城陽市歴史民俗資料館の平文氏に学恩を賜りました。記して感謝申し上げます。

翻刻『秦夫草（はたをぐさ）』

凡例

一　本稿は、江戸後期の俳人堀秦夫の句稿『秦夫草』を翻刻したものである。

一　『秦夫草』の所蔵は、城陽市寺田の堀家である。城陽市歴史民俗資料館に同資料のマイクロを蔵する。

一　『秦夫草』は次の七冊である。書名・所蔵番号・記述年次（本稿に使用する略号・丁数）・本稿頁数の順に記す。

(1)「はたをくさ」　堀家文書6-7-88
安永七年　（安七・　一オ～一六ウ）　*19*
安永八年　（安八・　一オ～一八オ）　*25*

(2)「はたをくさ」　堀家文書6-7-89
安永八年　（安八・一九オ～二二オ）　*33*
安永九年　（安九・　一ウ～二一オ）　*34*
天明元年春夏秋〔原本記述は安永十〕
（天元・　一ウ～一三ウ）　*42*

(3)「はたをくさ」　堀家文書6-7-90
天明元年冬　（天元・一四オ～一八ウ）　*47*
天明二年　（天二・　一オ～　九ウ）　*49*
天明三年　（天三・　一オ～一三ウ）　*53*
天明四年　（天四・　一オ～一〇ウ）　*58*

(4)「秦夫草」　堀家文書6-7-92
天明五年　（天五・　一オ～　四オ）　*63*
天明六年　（天六・　一ウ～　七ウ）　*64*
天明七年　（天七・　一オ～　六オ）　*67*
天明八年　（天八・　一ウ～　四ウ）　*70*

(5)題名無し　堀家文書6-7-93
天明八年　（天八・　五オ～一〇ウ）　*71*
寛政元年〔原本記述は天明九〕
（寛元・　一オ～　六ウ）　*74*
寛政二年　（寛二・　一オ～　二ウ）　*77*

(6)題名無し　堀家文書6-7-94
寛政二年　（寛二・　三オ～　四ウ）　*77*
寛政三年　（寛三・　一オ～　七ウ）　*78*
寛政四年　（寛四・　一オ～　五ウ）　*81*
寛政五年　（寛五・　一オ～　三ウ）　*83*
寛政六年　（寛六・　一オ～　五オ）　*85*

(7)題名無し　堀家文書6-7-95
寛政七年　（寛七・　一ウ～　三ウ）　*87*
寛政八年　（寛八・　一オ～　二ウ）　*88*
寛政九年　（寛九・　一オ～　四ウ）　*89*

一　丁移りは、各丁の最後に、年次毎の通しの丁数を付す。丁の表は「オ」、裏は「ウ」の略号で示す。表紙・裏表紙はす

べて共紙である。

一　字体は、原則として通行の字体に改める。

一　踊り字は原本の表記に従うが、次のように統一した。

平仮名・同濁点　　ゝ・ゞ

片仮名・同濁点　　丶・ヽ

一字の繰返し　　々

二字以上の繰返し　〳〵・〳〵

一　振り仮名は、本文にある表記のままを記す。

一　濁点・句読点を適宜付す。

一　改行は、原則として原本のとおりとする。ただし、紙面の都合で改行する場合もある。

一　連句の短句は、一字下げに統一する。

一　詞書は、統一して句より二字下げて記す。

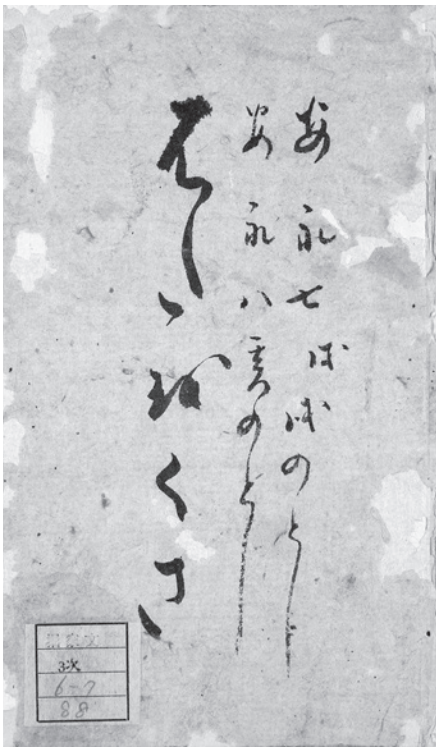
一　句頭の書き入れは、句の上部等に小字で記す。

一　墨消し・見消ちの訂正は、傍線――で示し、概ね句の右側に記す。

一　虫損等により判読不能の場合は□で示す。

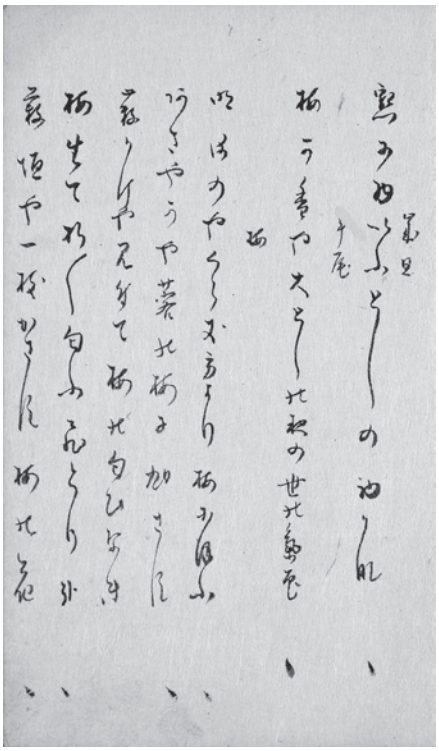
一　本文の空白部分については［　］で示す。

一　実質的な年次等を私に補い【　】で示す。



安永七戊戌のとし
安永八亥のとし
はたをぐさ

（安七・表紙）



（表紙見返し）

【安永七年】

歳旦

熟に物いふとしの初かな、

年尾

梅が香や大どしの夜の世の気色、

梅

明ぼのやくらき方より梅にほふ、
あざやかや蓉の梅に旭さす、
薮かげや見付て梅の匂ひなき、
梅生て折〳〵匂ふひとり哉、
薮垣や一枝かざす梅の花、
一すじの梅匂ひ来る戸口かな、
しら梅の風に崩るゝ匂ひ哉、
梅谷や梅の中より梅匂ふ、
袖赤し若菜摘野のあらし哉、
草の戸の軒にめでたき菜づな哉、
かりそめや背戸の畑の菜づな摘、
窓の旭梅に鶯の影うつる、
居眠れば鶯が啼椽の先、
鶯の窓を覗て初音哉、
鶯の枝飛違ふ二つかな、
鶯の初音聞居るうぐひす哉、

（安七・一オ）

（安七・一ウ）

良水愛子みまかり給ふに
は子板を俤にして猶泣ん　、
日の出や目出たくみゆる梅の花
梅みれば心目出たき日の出かな　、（安七・二オ）

かせん　於無為庵
我こゝろ静な梅の匂ひかな　樗良
燭に霞し窓の三日月　秦夫
出代リが小うたの節もかなしくて
顔のよく似た人尋ね来る　、ら
傘に船の約り場どや〳〵と
ほうろくの荷の打かへりけり　、夫
一休が狂歌を書て下さるゝ　ら（安七・二ウ）
痩肘つどふ雨の尊き　李音
やう〳〵と屎に付たる若たばこ　夫
繋でおゐて牛を遊ばす　ら
預りし児の守する夕月に　音
恋のしらせを投る渋柿　夫
憎しとて露の板橋はづし置　ら
心はおかし此侭野にすむ　音
醴に甘（アマ）み付たる此ごろや　夫
背虫和尚の死れたる跡　ら
楽書にぬりよごしけり花の垣　音（安七・三オ）

日はぬくとくて鶯がなく　夫
末略
竹嶋氏の養子し給ふにおくる
梅うへてとゝのふ家のいろか哉　、

二月分句会
旅人や咄してゆく朧月　、
立出る袖やうれしき春の風
みるうちに一しほくるゝ柳哉　、（安七・三ウ）
燕の出入るや雨の門の口　、
初午や道にて出合ふ舅殿

右
みへ初る家の間の柳かな　、
近江路や袖をかざしの朧月　、
道すじの柳へつゞく野づら哉　、（安七・四オ）

枚方の駅にて旅の
御僧と物かたらひ侍るに、
翌は立わかれ、いづちとも
しら雲の生涯まみゆる
ことのかたければ、そゞろに
かなし
ゆく先はわかれて梅のやどり哉　、

梅の□たま〳〵梅の匂ひかな
高〴〵と梅に鳥鳴日の出哉　、（安七・四ウ）
婚姻をむすび給ふ
巴渓うしへほぎしの
章をおくる
むつまじく梅を心のさかへ哉　、

三月分句会
折〳〵や寒きあらしに初桜
古郷や飯に呼るゝ春の雨
盗花　花折れば咎むる人か薄月夜
雁遠く見居てきゆるわかれ哉　、
百性や麦食喰てくるゝ春
打よりて豆腐焼けり春の雨　、（安七・五オ）
春の雨くれ行野べの三かさ哉　、
春雨に鯰ののたる門田哉
静さや海に鐘きく春の雨　、
盗花　花折ㄴば棒突て来る男哉
摺物ニ出ス　ゆくかたや遠音にみゆるほとゝぎす　、（安七・五ウ）
郭公只一声の野のわたり
月の夜やすゝんで戻る道涼し　、
弥生の末旅行
打かぶる笠も霞の首途かな　、

旅人と我もまぎれてかすむ哉
玉水の里なる重胤子に
奈良にて逢、餞別
の和歌を給ふ　（安七・六オ）
旅衣袂にさぞなつゝむらしおくれてさける
花のいろ香を
旅に逢ふて其まゝかすむわかれ哉　、
奈良大仏にて
春深し伽藍にみつる松の風　、
又　糸ゆふの高くさし入御堂哉
山本や□際くるゝ雉子の声　（安七・六ウ）
素麺や糸ゆふみだす三わの里
はせにて
ちる花の中を廊下のくも手哉　、
ある寺の場にて
静さや間〳〵にちるさくら　、
いせ山田がはらなる
無為庵を訪しに、
はや旅立けるよし
なれば、いと本意なくて
錠さして花にぬからぬあるじ哉　、（安七・七オ）
無為庵をおもふ
いせと京あるじひとりを花の庵

雨にぬれてけふより夏を樹々の色　、
夏にうつる桜が中の遅ざくら
　しばらく連だちたる人におくる
本意なくも夏たつ旅のわかれ哉
　旅行
、みてゆくや所〴〵の衣がへ　、
　すゞか山にて
雲ぎりのあらきに花の四月かな
　雨にたどり留主の扉を　、
　押ひらき、こゝにやどりして
　軒の若葉の雨に慰み
　つら〳〵主のかへらぬをうらむ
夏の夜を入かわりたるやどり哉　、
　何某がもとにて
うらやまし日枝の紅葉に三井のかね　、
　右

（安七・七ウ）

、けさの秋こゝろに籠てはしゐ哉　、
何となく情馳りけりけさの秋
たのしみや軒の茂にけさの秋　、
月細し軒の草葉にけさの秋
浮雲の西へ行けりけさの秋
澄月やけぶるかとみし秋の風　、

（安七・八オ）

、草にちる風の上なるむしの声　、
月かげや風に吹るゝむしの声
足もとに吹馳（て行）りけり秋の風　、
、魂棚や先雄しき瓜茄子　、
、魂まつり踊初る馳走かな　、
香炷てあらしに星の手向哉
七夕やどこも寝済て夜のけしき　、
宵の間やわや〳〵とのみ星祭
、落ざまや月にみだるゝ雁の声　、
鹿の声ひ（し）だい〳〵に遠ざかる　、
鹿の声聞て程ふ（ある）る余情哉
みち汐や月の光りに秋の風　、
くさの葉を吹はなれつゝ秋の風
一しほや露を帯たるむしの声　、
さながらの鳴ばかり也むしの声

（安七・八ウ）

　良水とむし聞に立出て
うきたつや露の中なるむしの声　秦夫、
　薄〳〵月の洩るゝ松かげ　良水
旅人の紙帳に秋の詩を書て　、
　膝にこぼるゝ盃の酒　夫

（安七・一〇オ）

留主をまもりて
何事もいわで月みるふたり哉　秦夫
間〳〵に高きむしの音　良水

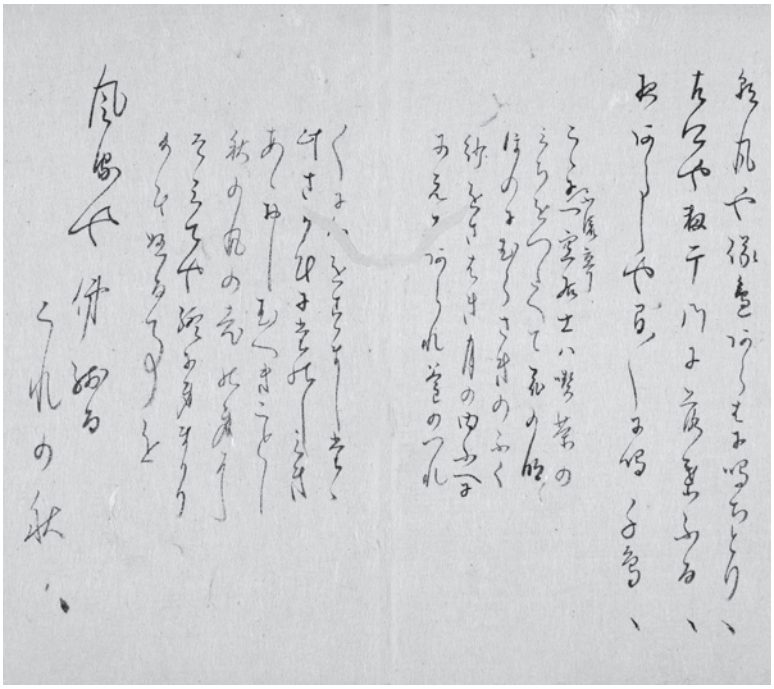
遠近や一時になりぬ鹿の声　、
白浜や月の光りに秋の風　、
玄化堂身まかりし道は未定
俤や風にかなしき雲のみね
手向ばや蛍ながらに露のくさ　（安七・一〇ウ）
かりそめの別れして
五三日忌過す。身まかりしに絶□
みな月にわかれて露の命哉
閏七月十五夜
月の色盆より少し哀なり　、
たゞにさへ哀を後の盆の月　良水
かりにや露の玉祭りせん　秦夫
咲初る垣根の萩を手折来て　、
居合す男歌を詠けり　水　（安七・一一オ）

江涯房四句合
長　振舞や障子明れば菊の花　、
丸　稲刈て門はあかるし後の月
丸　鹿の声跡なき夜半の余情哉
丸　行秋や百性参る米かくと
右

曇りても月の友とふ今宵哉　良水
露の茂に酒のなき宿　秦夫　（安七・一一ウ）

曇りながら夜はうつりゆくけふの月　秦夫、
椽端や膳の先なるけふの月　、
松かげや嵐吹そふ下のみち
霧雨の今にも染る紅葉哉　、
我袖に光りて寒し後の月
蚯蚓なく垣根は寒し後の月
行秋やとても心は静まりぬ　、（安七・一二オ）
秋の名残（年のくれ）水に風みる野づら哉
古郷や柿の木原の落葉して
麦蒔や食喰ながらみるしぐれ　、
道場の太鼓響て初しぐれ
門口や人待ながらみなしぐれ　、
静さに思ひもよらぬしぐれ哉
片町や宿とりてみる初しぐれ　、（安七・一二ウ）
夏　きのふけふ雨の中なるかんこ鳥
暮行や相もかわらぬかんこ鳥　、

いたづらやきのふに似たるかんこ鳥　、
、噂して居れば紅葉の初しぐれ　、
番頭の顔のひらみやゑびす講　、
、ぬつくりと膳に直るやゑびす講　、
過行やよるの船路になくちどり　、
いそがしや隣の門の夕しぐれ　、（安七・一三オ）



朝風や礒辺あらはに鳴ちどり　、
古郷や籾干門に落葉ふる　、
夜あらしや間〳〵に鳴千鳥　、

こゝに不流亭一空居士は、喫茶のみちをつたへて、花の明ぼのにむらさきのふく紗をさばき、月のゆふべにえるあられ釜のつれ〴〵に心をすまし、たゞ此さかひにたのしみき。

あゝおしむべきことし秋の風の老の身にそみてや、終に身まかり給ひぬる事を

（安七・一三ウ）

風流や俤残るくれの秋　、（安七・一四オ）

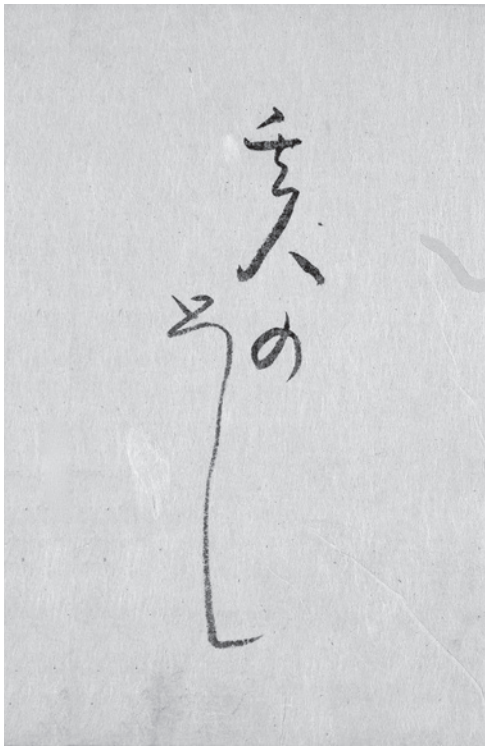
落ざまや月にみだるゝ雁の声　秦夫、
露も置そふ野路のさあらし　江涯
歌詠の淋しき顔に秋更て　、
さい〳〵しゐに出るとろゝ汁　夫
五十町坂を下りれば下の村　、
棒の師匠の侘て住るゝ　涯
頃日や誰にも逢はず斉みて　涯（安七・一四ウ）

瓜も茄子もかるゝ六月　夫
ひそ〳〵と朝解責の噂聞　、
肌をはなさぬこがねつめたき　涯
牛売にことしもありく旅の空　、
檜の匂ふ雨の板橋　夫
日中の施餓鬼初る安楽寺　、
ゆふべは月に鐘を撞らん　涯
秋の風天窓寒さに烏帽子着て　涯
伯母の所へ灸すへにゆく　夫
漸と花咲春に成にけり　、
田螺鳴なる裏の溝川　涯

（安七・一五オ）

年栄や四十ばかりを鉢叩　、
瓢箪の己に似たる鉢たゝき　、
摺物ニ出　誰やらに似た顔付や鉢叩　、
鉢叩過行よるのくらさかな　、
詫てみる我家よ雪の住ごゝろ　、
梅生て人にはみせぬとしのくれ　、

（安七・一五ウ）
（安七・一六オ）
（安七・一六ウ）



【安永八年】

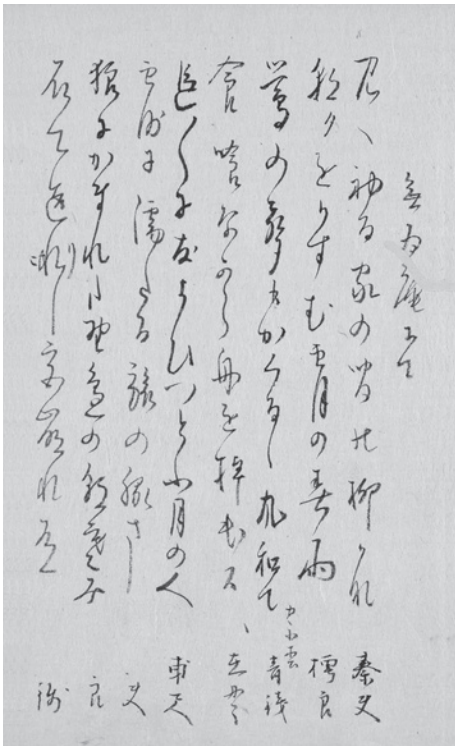
亥のとし　（安八・一オ）
先向ふ膳の四角やけさの春　、
牛引て行人みへぬ柳かな

八雲たつ出雲なる曽川氏のぬし、一とせに一たびづゝ此里に来り給ふも、はや十とせあまりになりにき。今や時至りて、御々ン神の御風になびき、梅が香の糸口をほどくがごとし

したはしやその八重垣の垣の梅　、　（安八・一ウ）

み渡せ□四角く長し春の水　、
、梅に並ぶ雀の腹に日の出かな　、
朝からの梅にやすらふ床几哉　、
休らひや人物みゆる梅のかげ　、
昼過や雨の晴間の桃の花　、
淀舟や背戸からみゆる桃の花　、
羽二重に梅が香払ふあらし哉　、
人物や親子梅見にありかるゝ　、
はら〳〵と夜明る軒の梅の花　（安八・二オ）
花の宿何か馳走にとろゝ汁　、
花にやどり曙みんと宵寝かな　、
　ひとりひがし山みめぐりて
身すがらや眠りてみたる花のかげ　、
　知恩院馬場通りて
門内や左右にちる花開く花　、
、花撰て座を定たるおごり哉　、
どの花に寝よふと旅のおごり哉　（安八・二ウ）
、こゝかしこくれゆく花のうごき哉　、
とく〳〵と日はくれて行花の上
吹下し吹上る花のあらし哉
　ある人のかたにて
春雨に木の芽集て酒宴哉
　鵜の糞を呑んで酒やめんと
する人と打より酒のみて、
　各狂歌をせられけるに、
　予も狂歌に成かならぬかは
　しらね共興じて　（安八・三オ）
鵜の糞をのみても殊に酒好クは
是百薬のよわひとぞしる
　去年の春、いせ山田がはらなる
　無為庵を訪しに、はや旅立
　給ふてからうとなれば、
鎖さして花にぬからぬあるじかな　と
　つぶやき、只いたづらにわかれを
　かなしみけるも、月にうつり
　宵にくれ、また花さく春の
　けふしも丁ど、樗良叟にも合たり　（安八・三ウ）
うつゝかと手をとりて泣花の人
　去年の秋なやめる人の、
　月雪によろぼひ、花に
　やゝ杖を引ておこたりし
　我をとはれ共にうれしさをかたる
たのしみや花にいのちをみせる人　、
　平尾涛山に送る也　（安八・四オ）
手に持し頭巾吹けり春の風
うぐひすに丁ど起たるかげん哉　、

――の音に叶ふたるひより哉　、
春の雨ところ班らにくれにけり
うらやまし罪なき蝶の遊びかな
蒂目にしだるゝ庭の柳哉　、
行春や雨に若葉のみへ初る
、一時に四五輪落る椿かな　、　（安八・四ウ）



無為庵にて

見へ初る家の間の柳かな　秦夫
朝夕をかすむ宵の春雨　樗良
鶯の声もかくるゝ風和て　カヾ小松青錢
食喰ながら舟を棹出ス　、在貫
追〳〵に友よびつどふ月の人　甫尺
露に濡たる旅の脇ざし　夫
狼にかまれた野辺の朝寒み　良
石で返れ（り）し宮崩れ有　錢　（安八・五オ）
福徳を祈に来たる恥しさ　貫
恋しき人の我をとわれて　尺
餌すゝる火影まばゆき釜の前　夫
二百に足らぬけふの働　良
延付に降中に立雪の馬　錢
わら屋根葺の医者の門外　貫
雷の落たる跡に人だかり　尺
口にまかせて唐の片言　夫
よるの花和尚に似たる顔の月　良
蛙の声に灯燈のゆく　錢
末略　（安八・五ウ）

花のなき寺を数へる京地哉　青錢
松より樫へつどふ鶯　樗良
芋種を荷ふて出たる棒折て　在貫
雇人呵る声のくれがた　秦夫
貫ふたる酒を忘れし三日の月　良
平器のふたを菊の根におく　錢
横顔の過行秋の親子似て　夫
窓の穴から我を見る恋　貫　（安八・六オ）

糸巻の乱れし糸をまとひかく　錢
取次てやる余所の染もの　良
とし毎に田舎へ下る小商人　貫
石檀つくる奉加付キけり　夫
椎の木の影の清水の涼しくて　良
こゝろよく飛ぶ月の青鷺　錢
土龍おとして戻る秋のくれ　夫
畦草刈て早稲飯を喰ふ　貫
這入戸の手回しもよき縄すだれ　錢
隣の客が念頃にする　良　（安八・六ウ）

弥生九日かせん

土雛に顔のぬくとし稲荷前　カヾ小松青錢
生ケしつゝじを牛くらひ衍（ふ店）　秦夫
はら〳〵と桶なる塩に花ちりて　錢
瘡にはつ（す）手に這ふ子可愛き　夫
繰綿を求て戻る月のくれ　錢
風呂敷とけばいなご飛出ル　夫
膳棚の戸を立付る秋のかぜ　錢
髪結さして言葉あらそふ　夫
頬かぶり取れば東の恋おとこ　錢　（安八・七オ）
池田伊丹に五年はたらく　夫
好まるゝ魚の料理の出来安キ　錢

新し舟に夏の月見る　夫
何蓋も打重ねたる網代笠　錢
レンの古文字さら〳〵と読　夫
真白にねまりだけある髭の丈ケ　錢
皆付キ〴〵は対馬の衆か　夫
薄雪に一軒家をかり明て　錢
東しらみに連歌おさまる　夫
帰るとて衣の裾を引むすび、　（安八・七ウ）
機嫌のわるひ酒の酔ざめ　錢
段階子一歩小位の打こぼれ　夫
手燭の明り消てくらがり　錢
逢ふ時は恨むる事も忘れつゝ　夫
胸につまりて涙さへ出ぬ　錢
尊さや親に似給ふ仏様　夫
雲もむらさき萩もむらさき　錢
祭り前其紫の幕そめて　夫
月に子供が角力初る　錢　（安八・八オ）
買ふて来た桶の小便打かへし　夫
塀の内なる犬におどされ　錢
片側は大竹藪に吹あらし　夫
京の縁者へ便り（ママ）不自由さ　錢
から鮭を頃日迄もたばへ置　夫
油断もせずと鶯が啼　錢

柴売に約束花にとろゝ汁　夫
　裏のくゞりに天窓打春　錢
　　大尾　（安八・八ウ）

　かせん　前書略

こゝろおかず引分て持花の枝　青錢
　蝶の遊び(翅に)に風の(みゆる)なき昼　秦夫
猫の恋竈の上を飛越へて　良水
　足の痛みをかゝへ居る月　錢
隣から牡丹餅(やき餅を)一つ(貰ひし)くれる秋のくれ　夫
　けしきに逢ふて籾の干揚ル　錢
戯に小うたを付る木綿売　水
　情をしらぬ娘居眠ル　夫　（安八・九オ）
蚊遣り火は煙りも立ず蚊の指そふ　錢
　入日のあとの赤キ塩浜　水
遠近や人呼声の谺して　夫
　乞食が力添て寝させる　錢
シヤウセンをひたものなめるおかしさよ　水
　明日の日和のあはぬ占なひ　夫
神明の鳥井の柱けづり済　錢
　銭百になるとしの暮哉　水
窓の灯を秋の月かと寝とぼけて　夫
　棚の飯櫃出しかけて置　錢　（安八・九ウ）

二つ三つ餧鶏のひよこの羽叩て　水
　見るうちに散ル白芥子の影　夫
父母の並びて悔請取られ　錢
　武田くづれのもとが侍　夫
はか行に細工禎の売退キて　錢
　ことしは一つ出来た帷子　夫
身帯を包まず明す恋の中　錢
　秋の夜なべの豆腐引〳〵　夫
初雁の声に冷つく土間の月　錢　（安八・一〇オ）
　風吹度に顔撫る萩　夫
脇差の値入済いて落付ず　錢
　けふは笠着て園原へ行く　夫
ふとしたる事で狂気の静まりぬ　良水
　地蔵□上る土器の飯　錢
夕ぐれの子を育れば閙しく　敬止
　古郷の便り馬士に聞　水
ちる花も又咲花も涙なる　止
　忘れて居たる独活の芽を出す　水
　　大尾　（安八・一〇ウ）

　カゞ山城と隔たる舎樹子に名乗合て　青錢
山吹のかさねはふかき渕の水　舎樹
　青葉の薫ず頃日の春

張笠は花の形に出来立て　秦夫
　取回しおく錢が苦になる　錢
かしましくけふの名月せはしかり　樹
　つくりし鱗に紅葉添けり　夫
小分な知行戴く秋の風　錢
　たつぷり書し門の評札（ママ）　樹
はや恋る格子の内の娘見て　夫
　夢に通へと神祈るらん　錢
右の傍古木の梅の実のなりぬ　樹
　岩の間で日傳茶を焚　夫
どうらんの煙草もさつと呑明て　錢
　真昼の月に烏横とぶ　樹
秋寒し浦のなぐれに鰯引　夫
　夫が病気にきり〴〵す売　錢
二三人侍衆が連だちて　樹
　狸おどして戻る須磨寺　夫
節穴の明りの洩る雪みぞれ　錢
　読習ひかな書に涙落つ　樹
曙に児は一間にかしこまり　夫
　袂の鈴が折〳〵に鳴ル　錢
諸共に中居酔伏二階口　樹
　恨はらしに顔へ墨ぬる　夫
若竹の月に吹なす青嵐　錢

（安八・一一オ）

夜鷹の声の凄キ明がた　樹
何事の心そゞろに水あびて　夫
　薬缶磨ケばやう光ルなり　錢
向なる孫をさい〳〵連て来て　樹
　重宝したる猫は痩たり　夫
此中は商ひ方も不景気に　錢
　物買ふては僧の講釈　樹
取分ケて陸奥の言葉は急度する　夫
　馬に付たる駄荷に春めく　錢
塀の内多くの花の咲揃ひ　樹
　日は暖に遣水の音　夫
　　大尾

（安八・一二オ）

案内して見せばや宇治の茶摘うた　秦夫
　眠らば起せ春の鶯　青錢
長閑さにけふは障子を打明て　良水
　屋根を仕直す外井戸の覆　、
世話しくも親子酒呑くれの月　錢
　ぴち〳〵はねる藤籠の鮭　、
荷の上に折添てある女郎花　夫
　よく見知たる妹招キけり　水
ほころびし袴の裾の気にかゝり　敬止
　七日の願の満る明ぼの　夫

（安八・一二ウ）

（安八・一三オ）

一番に仕出しの草子に値を付る　錢
酒に酔たる供の侍　止
恵心寺の御内すゞしく風吹て　水
右

青錢子におくる
百里来て花に茶粥の馳走かな　秦夫
花の香に気の引さるゝわかれの日　青錢
里はなれ迄送り出て
笠とりかへん春の四つ辻　秦夫（安八・一三ウ）

卯月末、樗良、在貫にとはれて
植させし主ゆかしき早苗哉　在貫
門のほたるに水風呂を焚　秦夫
くされたる竹の百足をはね捨て　樗良
子供を呼る掛人の祖父　貫
寸白のことしも発る月の秋　夫
磯のすゝきに船の底ぬけ　良
鰯煮る家のうしろに菰を張　貫（安八・一四オ）
かせん首尾也。末略。此外三かせん
有リ。不写。草稿有。

樗良、在貫、良水、舎樹、
秦夫宇治の蛍見に行、
興聖寺前にやどる二章
蛍火や宇治の哀は皆みゆる　、
蛍火に宇治の川岸しぐるゝか
川上や山の曲りを出る蛍
押出すや川の曲リのほとゝぎす　、
まいら戸に我影いさむ衣更　（安八・一四ウ）
侍の袖の短き衣がへ　、
めづらしや窓は月よに時鳥　、
曙や川瀬鳴ゆくほとゝぎす　、
鳴ぬ夜や良三瞻煎時鳥　、
雨晴や山根の雲に時鳥　、
門畑やきせるくわへて夕涼
灯籠に火とぼす庭の五月雨
水風呂も立けりやどのさ月雨　、（安八・一五オ）
あらし吹篝詠る綱鵜かな　、
旅立人におくる
腹ぶくろ腹（夏）をあかしの蛸と月
どつかりと誰やら居る門すゞみ　、
、あゆみては又立どまり夕涼　、
、たば粉の火みゆる隣の門涼　、（安八・一五ウ）

茄子を画けるに

絵心や酢みそで喰ん初茄子
からくりや心のいとのけさの秋
、出てみるや心得顔にけさの秋
見へ初るこゝろのすじやけさの秋
薄〳〵と星の逢夜を人ぞ知る
酒呑て泣人もあらんけふの月
くさの葉を吹はなれけり秋の風
日あたりや家を並べて門の菊
片枝や風に吹るゝ薄もみぢ

、
、
、（安八・一六オ）
、
、
、

朝顔の実を取人に初しぐれ
曙や風の中より初しぐれ
しぐれ来や詠る雁にさはぐ雁
家ひとつみゆる山路の夕しぐれ
、しみ〴〵と降て夜に入しぐれ哉
風のしぐれ過てひそ〳〵降しぐれ

、
、（安八・一六ウ）
、
、
、
、

旅行

袖ぬるゝ行先〴〵のしぐれ哉
横にみる野中の松はしぐるゝか
ぐはら〳〵と戸明る音や小夜しぐれ
風にきく嵐に夜半の鳴ちどり
朝の間に市は立けり初しぐれ

、
、
、（安八・一七オ）
、

ふくと汁先あたゝまるいのち哉
ふくと汁あぢな所を風味哉
臼を引隣もあなれ冬ごもり
猫ひとつふしぎもの也冬ごもり
、髭のびて頬（ヲトガイ）ぬくし冬ごもり
旅人の（や）呼り合行雪のくれ
戸明れば犬いさみけり朝の雪
池水のみどりに雪のなだれ哉
振向ば己に似た名か鉢叩

、
、
、
、
、
、（安八・一七ウ）
、
、

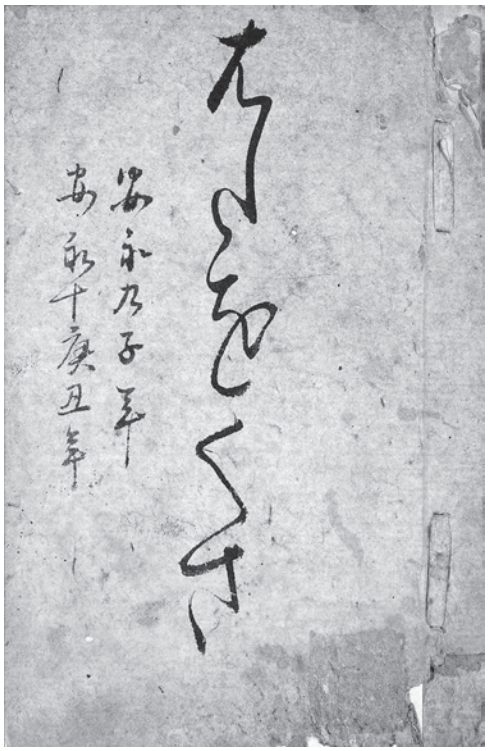
十二月十三日煤はきして

、煤はきやすゝの仕舞を雪まろげ
去年よりことしは甘しふくと汁
鳴つかぬ人はまれ也年のくれ
金かくす人や師走のほとゝぎす
人ひとり通り初けり朝の雪
市人のぬからぬ顔や年のくれ
世の中や只一すじに年のくれ

、
、
、
、
、
、

槙の木枯かゝりければ
冬枯や月日の甘露根に覚へ

（安八・一八オ）
（裏表紙・一八ウ）



はたをぐさ

安永九子年

安永十庚丑年

（安九・表紙）

（表紙見返し）

風のしぐれ過てひそかに降しぐれ　秦夫

人かげ寒き門の戸の口　江涯

鶏頭の花五六本盛りにて　〃

呼れて来たるぼた餅の月　夫

行秋に隣の伯父が歌をよむ　〃

すぽん鳴なる裏の川ばた　涯

なよ竹にそよ〳〵風の鳴（吹）わたり　〃

三人ながら皆眠る顔　夫

（安八・一九オ）

岩鼻に玉の巵居て置　〃

花ちりかゝる鯛の吸もの　涯

若イ衆におどりすゝめる春のくれ　〃

燈籠かすむ月の朧よ　夫

俤のかなしきまゝに伽羅炷て　〃

地蔵弁を祈るわりなき　涯

玉島の町並広き朝ぼらけ　〃

天窓かゝへてうめき居る声　夫

一昨日の軍の敗れ無念さに　〃

大事の鮓もなれ過にける　涯

暑き日の横にさし込裏借屋　〃

唐がらしなる椽の摺鉢　夫

此秋は法華になれとすゝめられ　〃

女房呼し月の夕ぐれ　涯

いかめしき萌黄の袴着たりける　〃

雪も奇麗に宿の船ナ付　夫

未満

右は去亥冬於江涯亭

（安八・二〇オ）

鋤鍬にとぼし火光るとしの暮　〃秦夫

鯨をわける祖父が包丁　樗良

屋敷から戻りがけなる袴着て　〃

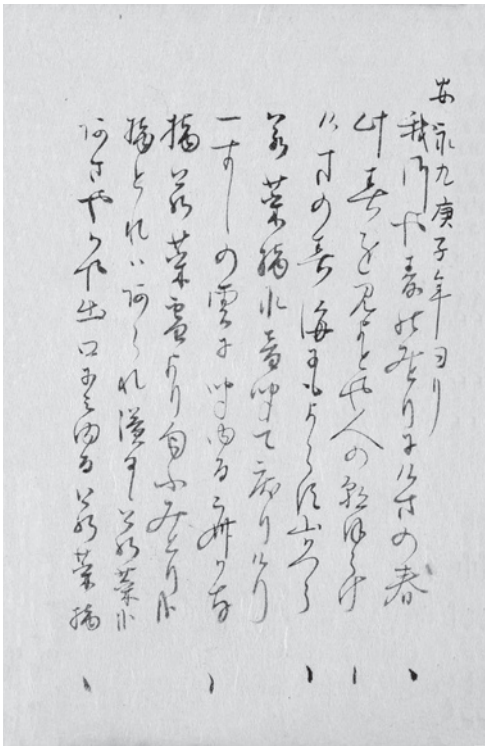
となりの松を誉に行けり　夫

（安八・二〇ウ）

月の夜に酒も一つなる女房衆　　、
　しかの鳴音を余所にうらやむ　　良
米櫃に這入てしのぐ秋の風　　夫
　後世の事さへおもひがけねば　　良
みどり子に年をとらする嬉しさよ　　夫
　海老もあわびも生キてとゞきし　　良
板の間に手燭かゝげる風涼し　　夫
　門は朝日の出る旅立　　良
ほこ〳〵と膝ぬくき握り飯　　夫
　なれし娘が心かよはせ　　良

未満　　（安八・二一ウ）

調ふや春を雀の舌の先　　、
泥ぬぐふ顔やうき世はかはるとの　　、
鉢叩頭巾やろふぞちやん袋
白梅にあらし羽二重素足かな
冬ごもりおもひやる事皆寒し
仏にもなる分別か鉢叩　　（安八・二二オ）



【安永九年】

安永九庚子年ヨリ
我門や麦のみどりにけさの春　　、
此春を見よとや人の朝ぼらけ　　、
けさの春海にもよらず山かづら　　、
若菜摘水音聞て戻りけり
一すじの雲に聞ゆる薺かな　　、
摘若菜雪より匂ふみどり哉
摘とればあられ溢るゝ若菜哉
あざやかや出口にみゆる若菜摘　　、
我友に先さし向ふけさの春　　、
乱れたる色にはあらず梅の花　　、

（安九・一ウ）

、幸に梅が香ふるゝ出がけ哉　、
箒目に一輪光る梅の花
うぐひすや風のあちらに初音鳴　、
朝の間や鶯の来る隣まで
鶯の尻声かすむ谷間哉　、
鶯や今ふけりたる顔もせず　、（安九・二オ）
うぐひすの咽へさし入朝日哉　、
鶯にねぶたきほどの遠音哉　、
燕の腹ひろげたる柳かな　、
よるの間に梅改（新しき）る気色哉　、

追悼

節季候が連て去ンだか人の果（かなし）

、

来る春を（に）逢はで人おし人かなし　（安九・二ウ）

二月五日旅立

那智にて

霞よりへげて落けり瀧の雲　、
旅に居て日さへ忘るゝ朧月
春雨や杉植に行雲の山　、
雉子雲雀麦はみどりの旅の空　、
日の出や海よりかすむ笠の内
背中出て春まだ寒き蒲団かな
雲かすみ夢さへ春の旅寝哉　（安九・三オ）
虱五升（虱五升）夢さへ春の　、
雲かすみ旅ぼく〳〵と雲雀哉　、
一つ家の鶏に通ひしきゞす哉
如月のはじめつかた、旅立
明くれ山路過行木末も
まだ寒き桜木をかぞへつゝ　、
花さかぬ桜をいだく山路かな
とつぶやきしに、片倉
峠といふところにて、初　（安九・三ウ）
桜におどろく
昨日までおもひ切しを初桜　（安九・四オ）

きのふけふ花に馴たる袂かな　、
きのふけふ花に落つく日和哉　、
雨晴て花見え初る山路かな
着のまゝをことしも花見衣哉　、
のか〳〵と花見てありくひとり哉　、
むづかしく隣もありや花の幕
筏士の袂や風にちるさくら　（安九・四ウ）
、いつとなく登りし花の高み哉　、
ねぶりてもよし只ひとり花の陰　、
ふし付や暮行春に蚊がくらひ
暁や露の玉鳴ほとゝぎす　、

山口や鳴曲りゆく時鳥　、
川岸や木影鳴行ほとゝぎす　、
尻声や鳴放したる時鳥　、
暁や声もみどりにほとゝぎす　、
、郭公待てば一声鳴ものか　、
明星に恋をしにけり時鳥　、
笋やせつかく延て虫くらひ　、
近うなり遠うなり雨のかんこ鳥　、
蛍火や飛行までの跡の闇　、
蛙鳴拍子もありや飛蛍　、
宇治にて
にぎやかに背中並べて葉撰哉　、
卯月七日加茂にて
祭りまへみて行かもの若葉哉　、

（安九・五オ）

（安九・五ウ）

子春

飯焼や日中をみたる梅の影　舎樹
となりへ聟の礼に来る音　夫
うつくしき春の嵐に雪ちりて　、
酒屋の蔵にさくら割つる　樹
元服を無理にすゝめて泣す月　樹
翌は菊の香に匂ふらん　夫
女医者麻のもやうの上着縫う　樹
人の恋をばうらむ日のくれ　夫
まいら戸に二つ並べし床枕　樹
猫のざれゐる竹のすゞ風　夫
干物の落て濡たる溝のうへ　樹
未満

（安九・六オ）

（安九・六ウ）

四月五日、甫尺、李音来ル。かせん
仙不写（ママ）
すゞ風や声あらはるゝほとゝぎす　、
女房に背（カタ）たゝかせて夕涼

（安九・七オ）

淀舟にて
はなし声聞やさ月の船の闇
昼舟にて登りしに、乗合の
中に軍書いふ人とて、みな〳〵
すゝめしに、予もまた
いざかたれ昼は寝られぬ舟の蝿　、
乗合の中にひとりぞ更衣　、
来合せば飯時分也さ月雨　、
禅寺の法事初るさ月雨　、
若竹の末も動かでさ月雨　、

（安九・七ウ）

玉水重胤の母公身
まかり給ふをいたみて
力おとしあふぎづかひの脇さへ　、

俤やかなしかざしの丸うちは
、素麺も一度は涼し魂祭り
六尺の刀提たりすまひ取
中〳〵に菊は頼もし秋の風
其まゝに草もみだれず秋の風
一つには骸持よし秋の風
、月影やくらき方より秋の風
秋風の奥こそあなれ小夜碪
草の実のことしもこぼれ秋の風
雨晴て猶めづらしやけふの月
滴るや隣の屋根の雨の月
百性やほこりの中の菊の花

嘯山撰画賛合

福禄寿川渡り画
子供らが影坊笑ふすゞみ哉
猿ノ画
声かれて腸あかし秋の風
我まゝに年は老けり秋の風
粽ノ画
ほどけよきほどに巻たる粽哉
亀ノ画

、
、
、
、
、
、
、
、
、
（安九・八オ）
（安九・八ウ）
（安九・九オ）

君が春亀は朝日にむかひけり
小原女ノ画
いにしへの声よ姿よ初しぐれ
梅ノ画
朝毎にまた新しや梅の花
梅の花かすむばかりを一匂ひ
孔明ノ画
鶯の声は深山を出る日がら
手の平に海山やてる胸の月
紙雛ノ画
紙びなやもたれ合する人心
雪中ノ南天ニ雀ノ画
雪誉に来たる雀の額つき

右

静さや鳥の翅に朝しぐれ
降そめて軒端はあるゝしぐれ哉
背戸門や我家見に出るしぐれ哉
あちこちと日のさす芦の枯ほ哉

静さや冬のはじめの菊の花
あかり障子に鷦鷯飛
二三年我頤は碁に痩て

、
、
、
、
、
、
（安九・九ウ）
（安九・一〇オ）
江涯
秦夫
、

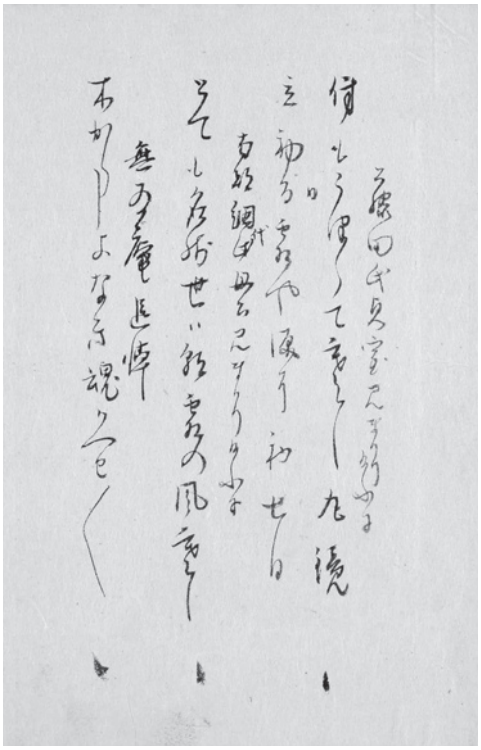
友達衆と上京へ行　涯
町筋の看板光る宵の月　、
酒桶こかす門口の秋　夫（安九・一〇ウ）
八百に値ぎつてみたる雁一羽　、
伝蛮に勝て扨も気味よき　涯
杜若さかり涼しき水の面　、
あかしの方に鐘の聞ゆる　夫
わかれ路の涙や袖に匂ふらん　、
うき暁とひや酒を呑　涯
雨〆風に葡萄の棚の打倒　夫
鶏頭淋し神子酉の門　涯
糸買に長浜へ行朝の月　甫尺（安九・一一オ）
疝気のくすりさがす引出シ　涯
花一枝あぶなき所に立かけて　夫
石の地蔵にもゆるかげろふ　甫
畑打の昼飯むまきひたし物　涯
街道すじのうたうたふ節　夫
油屋の先ンの妾の隠居家　甫
米三石に娘預る　涯
棒松に雪の降たる面白さ　夫（安九・一一ウ）
箕の藁灰に薦をかけ置　甫
吸もの丶加減をみたる肴売　涯
聾親仁がおかしがりつ丶　夫
方々の懸もやらずに盆の月　甫
猫にとらる丶露の鶏　涯
石垣の普請初る秋の末　夫
日用頭の分別をきく　甫
くれ合に大分空はわるうなり　涯
葬出しかけて門でぐづつく　夫（安九・一二オ）
高取の伯母の息子が二人来て　甫
百に四升の小鮎ざこ買　夫
けさからは店に花ちるひがし風　甫
阿房が太鼓たゝく長閑さ　夫
大尾　甫

十月江涯房とかせん有

不写

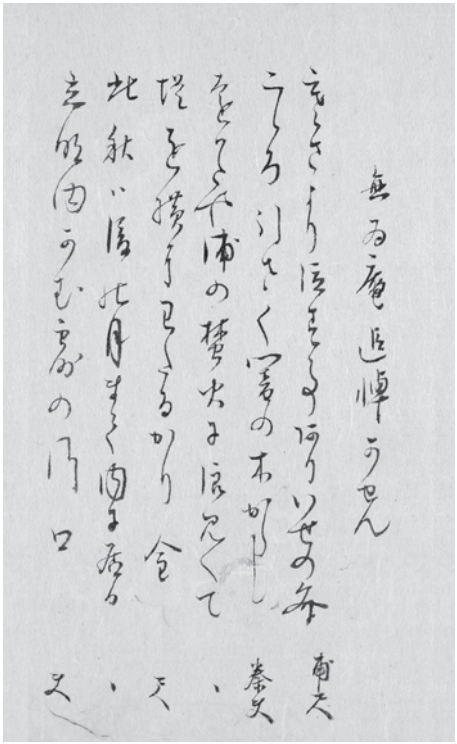
静さや鳥の翅に朝しぐれ　、
、宵の間のしぐれに寒き在所哉　、
、あちこちと野に人見へて夕しぐれ　、
立ながら手の平あぶる夕しぐれ　、
、まい〳〵と一日遊ぶしぐれ哉　、
、時雨来や向ひの門のよるの声　、
降そめて軒ばにある丶しぐれ哉　、
白菊にみゆるばかりを初しぐれ　、（安九・一三オ）
濡て行人をみて衍野のしぐれ　、
、山本やしぐれて仕舞ふ雲の色　、

すこしばかりしぐるゝ雲のかよひ哉　、
、背戸門や木の葉みだれて朝しぐれ　、
から〳〵と旅行笠のさむさかな　、
旅人の足もと寒き火かげ哉　、
吹だまるすだれに寒き木の葉哉　、
冬籠食くふてまた居りけり　、
夕月や浪に光りて鳴ちどり　（安九・一三ウ）
ちらばふやふくさ包に風の雪　、
しばらくや闇の中よりつもる雪　、
見るうちにみだれかゝるや竹の雪　、
湖やかりがねわたる雪のくれ　、
曙や梅の林の風の雪　、
静さは殊更雪のとしのくれ　（安九・一四オ）
ぐつすりと寝かゝる雪のよさりかな　、
遠かたやけさより見ゆる雪の山　、
さしわたす雪の野はらの旭哉　、
白たへに暮行雪の野山かな　、
旅人も通り仕舞や雪のくれ　、
にえ立や窓のしぐれに大根汁　、（安九・一四ウ）



藤田氏貞室みまかり給ふに
俤もうつらで寒し丸鏡　、
同
立初る霜や涙に初七日
南都網氏代母公みまかり給ふに
とても名残世は朝霜の風寒し　、
無為庵追悼
木がらしよなき魂かへせ〳〵　、（安九・一五オ）

背戸門や我家見に出る初しぐれ　秦夫
　茶の口切し朔日の朝　甫尺
上方の便りに壺の値が出来て　〃
　豆腐を買に行やうな声　夫
宵月に其まゝ作る碁一盤　〃
　相撲のはなし丁寧にきく　尺
乗合に秋山伏の五六人　尺
　刀の鞘に雨光るなり　夫
物思ひあだに卯の花切捨て　尺
　ほとゝぎすやは誰が身を鳴　夫　（安九・一五ウ）



無為庵追悼かせん
寒さより泣す事ありいせの文　甫尺

こゝろ引さく闇の木がらし　秦夫
遠がたや浦の焚火に浪見へて　〃
　堤を横にわたるかり金　尺
此秋は後の月まで内に居る　〃
　立明ゆかむ露の門口　夫　（安九・一六オ）
わらづとの片荷へりたる油筒　尺
　酒のむ親を娘いやがる　夫
念仏の果れば四つの太鼓打　尺
　しらぬ間にたんと時雨る　夫
けがをした足引ずりて駕籠に乗　尺
　あかねはげたる恋の袖口　夫
田楽のみそにも色や匂ふらん　尺
　北に霞し黒谷の鐘　夫　（安九・一六ウ）
兼好の長閑に歌をよまれけり　尺
　となりの客が花にうかるゝ　夫
たんこぶのきら〳〵光る月よざし　尺
　雨の晴間にすぽん釣秋　夫
負まじきすもふにまけて腹が立　尺
　明日の山手の先陳は誰ソ　夫
土器を中にぐるりと取回し　尺
　暁さむく燭のかゞやく　夫
うつとしく顔にかゝりし乱れ髪　尺　（安九・一七オ）
　取ちがへたる門中の恋　夫

後から六尺桶をこかし来る　尺
　空飛鴨を皆がほしがり　夫
来月は法華の宮の祭にて　尺
　間にひらく上鳥羽の菊　夫
二百目に牛を買取秋のくれ　尺
　半分掛し寺の頼母子　夫
濡椽にちら〳〵花の散かゝり　尺
　橋行人のすがた春めく　夫（安九・一七ウ）
飯蛸を狐の罠に提て置　尺
　一本ぬすむ雨の竹の子　夫
またしてはふたり泣けりいせの文　、
　いつ吹やまん闇の木がらし　尺

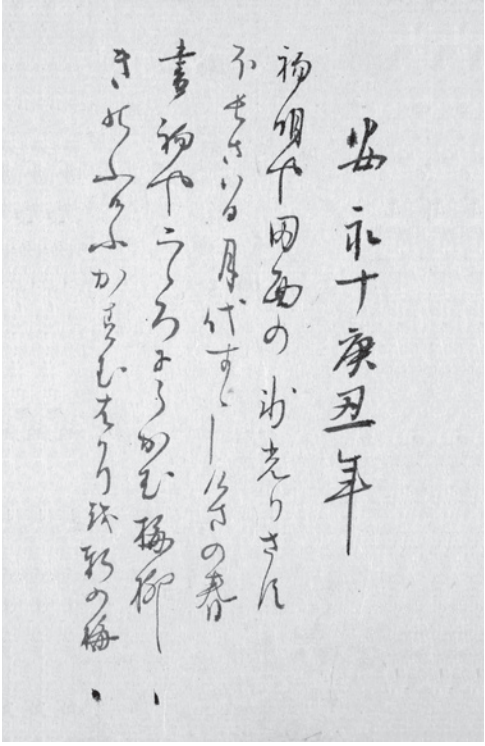
大尾

打よりて火桶を撫る対夜（ママ）かな　、秦夫（安九・一八オ）
　良水香炷まどの薄雪　雲裏
山ちかく松の葉風の音すらん　良水
　川の向ひに月光るなり　夫
稲こきの休みに居稲のうへ　裏
　もけたる雁に水を呑する　水
筑紫より八幡宮をうつされて（し来て）　夫（安九・一八ウ）
　雨マうるほひの多ひ六月　裏
餅搗て一日遊ぶ小百性　水

　垣越しにやる恋の染もの　夫
顔付に似合ぬことを囁て　裏
　相談もせず酒を商ふ　水
秋風に家のまはりの竹を伐り　夫
　隠元大豆の生りおとりけり　裏
ひつそりと薄茶を立る暮の月　水（安九・一九オ）
　寺の住持のみへる足音　夫
頃日の日和に花の咲て行　裏
　霞棚びく生駒葛城　水（安九・一九ウ）

（安九・二〇オ）
（安九・二〇ウ）

人の来ぬ間〳〵の年忘（や）　、
しづまりて人がいさゝぬとしのくれ　、
出かゝれば人がまた来るとしのくれ
いやな事きく耳もちてとしのくれ
弟に家買てやるとしのくれ　（安九・二一オ）



【天明元年】

安永十庚丑年

初明や田面の氷光りさす　　蘭更
ふとさはる月代すゞしけさの春　　良水
書初やこゝろにうかむ梅柳　　秦夫
きのふけふかすむばかりを軒の梅　　雲裏
いざおきん柳まど打梅匂ふ　　甫尺
心のどけき宿の頃日　　、
酒盛の酒もしづかに春くれて　　、
返しに来たる鞍を干させる　　（天元・一ウ）
小莚に児を遊ばす暮の月

たはれ〳〵て瓢くだくる　　更
押わけて行ケば皆ちる萩の花　　夫
うしろ堂から参る観音　　水
ほとゝぎす飛違鳴暁に　　裏
なみだのそみし袖ほどきやる　　更
島守の君に心を通はして　　尺
雨のふり来る軒の松竹　　夫
玉みそのすゝを野分の吹おとし　　裏
熊野路めぐる木の本の秋　　水
月うすく釣船よする頃なれや　　更
南にとぼす賊の松明　　尺
二三年花さく宿に落ぶれて　　夫
鼠飛出る雛の古櫃　　更
春の雨よる昼となく降しきり　　裏
いせの下向を兄弟が待　　水
米五升餅につかんとしらげ置　　更
串柿うりて小銭まうける　　尺
此度は親父の菩提弔て　　夫
乞食多く軒に集る　　更
ほか〳〵と朝日さし込鍋の蓋　　水
布袋つくりしあら金の土　　尺
二股の大根を老のめでたがり　　裏
主のむすめを嫁に取たり　　更
（天元・二オ）
（天元・二ウ）
（天元・三オ）

恋ごろもむかしを月に笑ふらん　夫
　鹿なくかたの山しらむ也　水
秋さむくゆがんだ家に母もちて　裏
　あたらし町のかせ糸をくる　尺
はやり出す野中の稲荷賑やかに　水
　いかも雲雀も打かすむ空　夫
花の咲夕べを馬に居眠りて　裏
　壱歩失う弥生晦日　筆
　大尾

（天元・三ウ）

遠山の松に見初る薄霞
　節分
わすれてもよきに年取こよひ哉　、
、出ごゝろや遠山松の初霞　、
、あら〳〵とあらしに梅のつぼみ哉　、
正月やいとゞめでたし梅の花　、
名残とてみれば思へば雁の声　、
白梅のすこし霞みて散にけり　、
立退ば其まゝくもる柳かな　、
羽遣ひにうれしげみゆるこてう哉　、
　涅槃坂より大仏をみて
升形や松を見こして薄霞　、
若くさや鹿のふり向三かさ山　、

（天元・四オ）

庭掃てやがて静にちる桜　、
明ぼのや遠山桜見付たり　、
くれ行や桜は雨に濡ながら　、
入込や里の裏手の春の水　、
苗代や此四五日の色まさる　、
山門や扉ひらけてちる桜　、
行春や芦の青みの汀より　、
一つづゝ来てはむれ立胡蝶哉　、
　良水子の旅行をすゝむ　前書略
ゆくすがら梅もすみれも皆くすり（旅立よ）　、
朝風に心まめなり衣更　、
衣更てつれて出たる子供哉　、
目に立や百性中の衣更　、
　井田敬止君、去年の秋頃より
　やまひに臥給ひけるに、冬の夜
　寒もしのぎ、春に成行ほどに、
　暖き日はまれにもやまひよからん
　かと、たのしみつゝ、やゝ卯月にも
　成ける日
病人やすこし見直す衣更　、
　看病二章
看病や一日づゝ夏も立初る　、
痩顔やとぼしに見つゝ蚊屋の中　、

（天元・五オ）

（天元・五ウ）

時に四月十五日、よはひ六十
有三にして、終に身まかり
給ひぬ。枕もとに忙然たり
息絶て軒端は夏の松の風
我かなし時鳥さへからすさへ
いかなる因縁にや、我幼少
より憐給ふ事一かた
ならず。今や墓前にて
つく〴〵と想像てかなし
なき人にかなかしさ告よ時鳥、
夏ながら我の身にしむ秋の風
夏の日もきのふとくれて初七日、
墓参
あら墓や夏の木くさのはや覆ふ、
さながらに色に出にけり杜若、
かきつばた橘の香ぞあればあれ、
ほとゝぎす高音ながらに初音哉、
大津にて夜行吟
湖ややみにかくるゝほとゝぎす、
松井何某は、我旧友たりしが、
湖辺に住ゐして、医師をして
あなるを尋行、一宿し侍しに
なつかしく、古郷のはなしに

（天元・六オ）

（天元・六ウ）

（天元・七オ）

夜も明なんとす。あるじ歌
すこし詠人なれば、予にうた
詠といふ。予和歌の事は
しらざれども、あるじがすゝむる
に、拙きをわすれ、三十一字を
ならぶるのみ
めぐりあひてかたりあはすることの葉も、
残して明るみじか夜のそら
橘にあるじが布子かり居かな、
雨中湖水眺望
引ッたてゝ三井の若葉を雨の雲、
翌日湖水晴天
湖や水にうつろふ夏の空、
夏の湖日枝を扣てたばこ哉、
ばせを塚にて
此塚の声ならなくに時鳥、
石山の石にすゞ風あらわるゝ、
桜峠越にかへる
若葉影こんにやくにえる出茶屋かな、
かんこ鳥我に先だつ山路かな、
竹の子に空大豆飯ぞおもしろき、
湖やほそりてすゞし宇治の里、
朝風ゆ其まゝふるゝ幟かな、

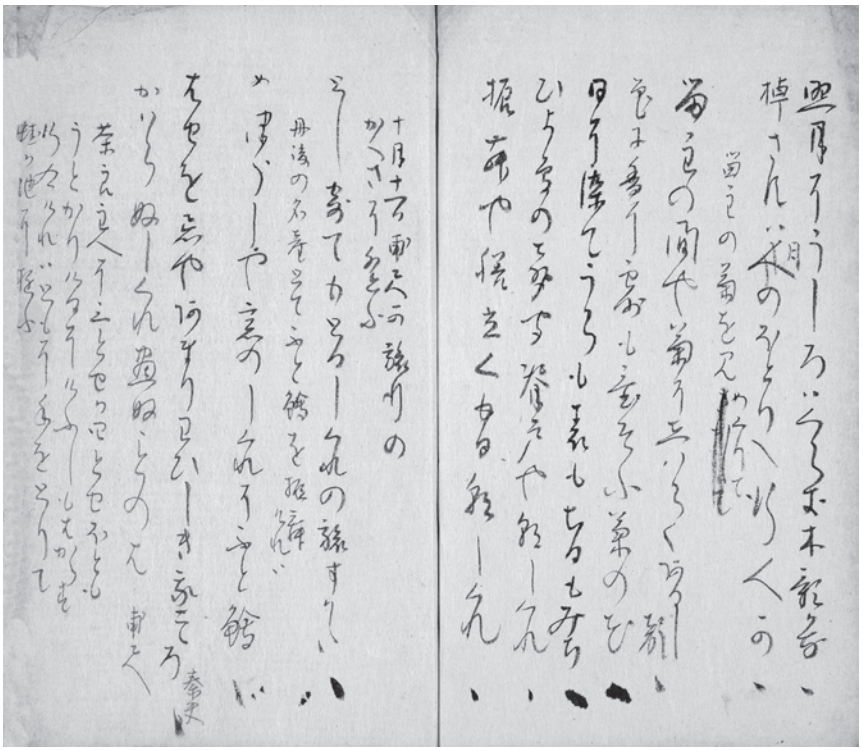
（天元・七ウ）

（天元・八オ）

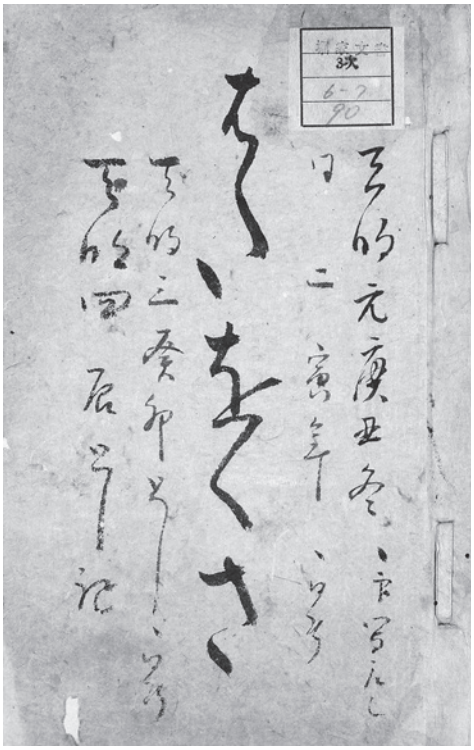
（天元・八ウ）

葺初て色を軒端のあやめ哉(くさ)　、
押やりて麦の中なる節句かな　、
祝ひとて巻てほどひてちまき哉　、（天元・九オ）
こゝかしこ鶏うとふ五月雨　、
五月雨や軒のむぐらに夕ぐれぬ　、
昼まへや日あしの匂ふ五月雨
夕ぐれや雲うごきぬる五月雨　、
五月雨や竹にしばらく雲の月
五月雨や門(竹)に落たる雲と月(の)　、
薮越シやとぼしみ涼し別座敷
しら露に角やさはりてかたつぶり　、（天元・九ウ）
わすれめや去年をしのぶの
夕月に俤かよふ山ほとゝぎす
涼風やとぼし火もるゝ別座敷　、
燈籠に火とぼして待ほとゝぎす
草内山岡氏母公みまかり給ふいたみに
卯の花におどろく里ゐの別かな　、（天元・一〇オ）
定雅の妻みまかりけるにいたみ
夢あつしうつゝに遠きわかれ哉　、
四条のすゞみを見やりて
、すゞみ川闇を覆ふてから錦　、
松の葉にすゞ風もるゝゆふべ哉　、
すゞ風や薮と蔵との間より　、（天元・一〇ウ）

芭蕉葉は破れ初けりけさの秋　、
墓参りむかし流行し薄羽織　、
人並や鉦打ならし玉まつり　、
打見たる人のすがたやけさの秋　、
坂越(山本)やとぼし火みへて小夜礎　、
、夜に入てやがて打出す礎かな　、
更る夜やしばし音する遠礎　、（天元・一一オ）
遠里やあらしにさはる小よ礎
、日はてりて半露けし秋の空　、
朝顔の花つぼみてや三日の月　、
春　蟻は穴へ黄昏花の酒に泣
久かたや住甲斐ありてけふの月　、
もれ出て雲の間やけふの月　、
雲の月思ふあたりへもれ出る　、（天元・一一ウ）
宵の間や雲しづまりてけふの月　、
つく〴〵と越しかた思ふけふの月　、
澄月に猶吹添ふや小よあらし　、
恥しや月にたぶさの影ぼうし　、
かたぶけば猶おしまれて月見かな
ぬる人は今宵の月の盗人よ　、
澄月や身にしみ〴〵と光さす　、
月代や松の下葉のあらわるゝ　、
水音にすこしかたぶく野べの月　、（天元・一二オ）



照月にうしろはくらき木影かな　、
棹さすは人(月)のほとりへ行人か　、
　留主の菊を見まわして(めぐりて)
留主の間や菊にしばらくあるじ顔　、
色に香に露も置そふ菊の花　、
日に染てうらも表もちるもみぢ　、
ひよ鳥の声聞背戸や朝しぐれ　、
振舞や膳立くもる朝しぐれ　（天元・一二ウ）
　十月十一日甫尺が旅行のかへさに逢ふ
とし寄てもどるしぐれの旅すがた　、
　丹後の名産とてふと鱠を振舞ければ
めづらしや窓のしぐれにふと鱠　、　秦夫、
ばせを忌やあまりわびしき我こゝろ　甫尺
　かはらぬしぐれ尽ぬことのは
　茶良主人に三とせか四とせほども
　うとかりけるに、けふしもはからず
　行合ければ、ともに手をとりて
　蛙が池に遊ぶ　（天元・一三オ）
こしかたのつみもしぐれの月と花　秦夫
　火桶にむかふ顔のおとろへ　冷五
山もとや烏寝に行夕しぐれ　、
賑はしや鐘も月よの十夜かな　、
　龍安寺に遊ぶ
をし遊ぶ水はみどりの影寒し　、
俳諧や何にもならぬ年のくれ　、　（天元・一三ウ）
　（裏表紙見返し）
　（裏表紙）



天明元庚丑冬　、印写取也
同　二　寅年　、同断
はたをぐさ
天明三癸卯どし　、同断
天明四　辰どし記

（天元・表紙）

（表紙見返し）

【天明元年冬】

十月十九日玄化堂にて
前書略

丹後宮津

年を隔てかはらぬ炭のかをり哉　跨山
しぐれめづらし軒の夜がたり　秦夫
旅衣大脇ざしを横たへて　甫尺
南のかたへ通るかり金　良水
あたらしき船おろしたる宵の月　夫
やぶ入送る親子睦じ　山
ちよつと来た人に振舞小豆飯　水
近う聞ゆる初瀬寺の鐘　尺
くれかゝる野みちにねむの花ちりて　山
牛のつら出す門の五月雨　夫
人し札ず階子大工を思ひ初　尺
宵のあかりにトとひに行　山
目白鳴鳥屋が西の裏借屋　夫
菊を作りて君にめさるゝ　尺
寿は九十に近き大たわけ　山
せむし息子に嫁をほしがる　夫
花の頃うき名を唄ふ鳥羽の里　尺
雪解ながらに水ぬるむらし　山
業平の袖も馬上に打かすみ　夫
旅商ひに遊ぶ半日　水
黄金の仏掘出すあれ畑　山
流行咳気を送る此頃　尺
慰にいかき豆腐を拵て　水
障子をはれば祖父の悦ぶ　夫
トチノ木に雀集るけさの霜　尺

（天元・一四オ）

（天元・一四ウ）

（天元・一五オ）

谷八郷の年貢只中　山
近所からもてあましたる恋衣　夫
情かゝりて痘痕かはゆき　水
消〳〵のおゝとなぶらに夜半の月　山
薄がもとにほそる虫の音　尺
上張を乞食にとらす秋の風　夫
南部へ下る宵のくらがり　水（天元・一五ウ）
逢さかの関の宮居は神さびて　尺
山どりの尾の岩にかくるゝ　夫
四人が心合たる花ざかり　水

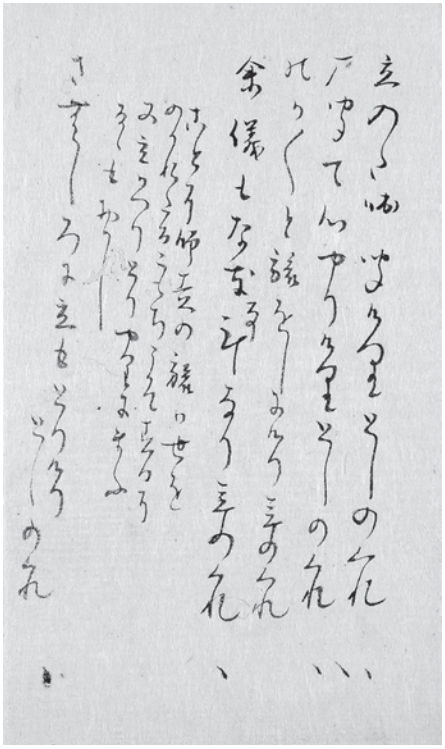
同日　前書略

あちこちと匂ふ時雨（時雨に匂ふ）のたもと哉　、秦夫
見知りし顔に頭巾脱つゝ　跨山
牛車同心町にとゞろきて　甫尺（天元・一六オ）
塀のうちより鳥の立けり　水
飯時のけぶりたな引朝の月　山
鎧も寒き岡の萩原　夫
何某の先に立るゝ在まつり　水
すだれのうちに言名付有り　山
恋しさに一もと貫ふ杜若　夫
空すみわたる卯月朔日　水
暁や黒髪山を右手に見て　山（天元・一六ウ）

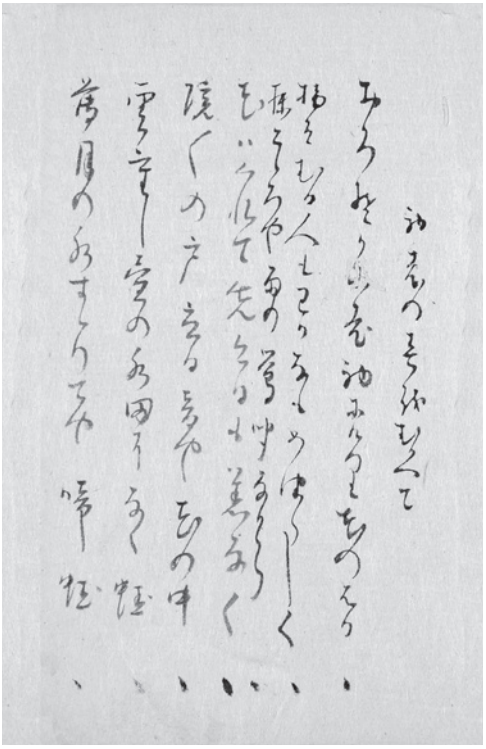
浪華の人をふと思ひ出す　夫
隣から大キな蛸をくれにける　水
瘧をおとす一流の灸　山
露霜にいたく兀たる折烏帽子　尺
松に淋しき春の夕月　、
花ちりし後の弥生の暮近く　山
住持居たる寺の陽炎　夫
味噌部屋のうしろに垣を結回し　尺
名に立恋の中を隔る　山（天元・一七オ）
俤の雲に匂へと香炷て　夫
須磨もあかしも雪の明ぼの　尺
茶粥食て寝る計なる峰の寺　山
李白を泣す我が腸　夫
七つ子を碁盤の前に直し置　尺
けふの暑も西にかたぶく　山
宿替て隣へ来たる法華衆　夫
風呂焼妹を余所ながら見る　尺
月よにも闇にも脱がぬ鉢かづき　山（天元・一七ウ）
霧吹のぼる此頃の秋　水
渓みちをつとふ男鹿の矢を負て　尺
近江へ盗む山城の石　夫
駕舁をだまし置たるおかしさよ　水
大盃を呑る手の平　尺

龍安寺にて

をし遊ぶ岡の朝日の影寒し
をし遊ぶ水はみどりの影寒し　、
　、（天元・一八オ）



立入た咄聞けりとしのくれ　、
雁聞て心やりけりとしのくれ　、
のか〳〵と旅をしにけり年のくれ
余儀もなき事計なり年のくれ　、
　ことに師走の旅は、世を
　のがれたるこゝちこそするに、
　又立かへりとりやりにまぶ
　るゝもおかし
さむしろに立もどりけりとしのくれ　、（天元・一八ウ）



【天明二年】

　初老の春をむかへて

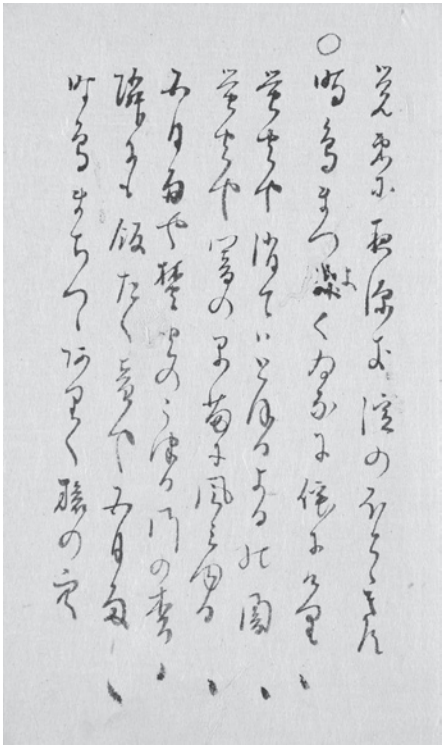
おろそかに老初にけり花のはる　、
摘そむる人もわかなもめづらしく　、
寝ごゝろや雨の鶯聞ながら　、
花はくれて先今日も恙なく　、
渓〳〵の戸立る音や花の中　、
雲重し昼の水田になく蛙　、
薄月の水すゝりてや啼蛙　、（天二・一オ）
一よさは綱をゆるしぬ猫の恋　、
松寒し里家にけぶる春の雨　、
さえづりの聞へるまでは雲雀哉　、

東塘東へくだり給ふ餞に
旅衣よしや花からわか葉まで　、
三縁寺之御弟子、勧学に
東へくだり給ふ餞に
見はやさんみちにいる身の花衣　、
いづれにもむかひ合たるこてう哉　、
立よれば我髪にさへちる桜　、
衣更て提て出けりかきつばた　、
ほとゝぎす水にうつろふ色音哉　、
小倉を通りて
うなぎさく音はすゞしき命かな　、
まめやかに此家の
まうけになりければ
花生て夏をはじめる水の色　、
闇の夜に高音鳴行ほとゝぎす
あと先や闇に跡なき時鳥　、
郭公日にいく度かまつこゝろ　、
○声のほど詠る闇のほとゝぎす　、
行先の里は数多よほとゝぎす　、
時鳥待夜の心野に山に　、
ほとゝぎす鳴や青田に風そよぐ　、
一声と思ひの外や時鳥　、
夜船にて

（天二・一ウ）

（天二・二オ）

（天二・二ウ）



覚束に夜深き淀のほとゝぎす　、
○時鳥まつよくゐなに侘にけり　、
蛍火や消てはとぼるよるの闇　、
蛍火や闇の早苗に風みゆる　、
五月雨や焚火のうつる門の松　、
隣にも飯たく音や五月雨　、
時鳥まちつゝありく旅の空
半化子餞別
夏を名残かしこや旅のほとゝぎす　、
乗合や顔に伏見の夏の月　、
乗合の鼾に入や時鳥　、
村雨に先だつよるのほとゝぎす　、
こゝらちかき里〳〵の境に、水の

（天二・三オ）

ながれのそとへやり水かしこへ
やり水など、、かたつぶりの角
をふり合、とし頃あらそひ止ざり
けるより、今はた二たり三たりに
媒せよと仰せ事を給りて、やがて
兎にし角にして、魚住水のごと
なりけらしをうれしと、海の山
の品をかざりもたらし来れるとて、
けふしも何某の亭へ人〳〵を
招かれ、終日たわむれけるまゝに
旅中吟
よしあしもながれて水の月すゞし　、（天二・四オ）

六月六日於甫尺亭五十韻
ほとゝぎす待夜水鶏に侘にけり　、秦夫
鉢の真瓜にうつる夕月　甫尺
外まはり丸木柱の家建て　、
国の田地は弟にやる　夫
来る秋に先めづらしき生鰯　、
起もそろはぬ明がたの露　甫
柿さはす桶を戸口へころばかし　、
隣へ見舞牛の煩ひ　夫
雨ふりてけふも立れぬ御客人　甫（天二・四ウ）

牡丹の花の咲匂ふらん　夫
半蔀をくゞり抜ては雀啼　甫
朝風寒く物思ふ頃　夫（天二・三ウ）
我恋は言葉のはしに顕れて　甫
浅間の山は煙立なり　夫
落馬して死たる人を駕に乗せ　甫
餅屋が軒にきり〳〵す鳴　夫
桐の葉の七日の月のさしかゝり　甫
姉も妹も歌をよむ秋　夫
世の中をうしろにみれば面白や　甫（天二・五オ）
味を忘れぬ阿波の蒟蒻　夫
花一本座頭二人リに酒二升　甫
取放したる庭のいとゆふ　、
天地の秦の春風かくさばや　夫
物言さして鼾かきけり　甫
五六年つれなき人と縁組て　夫
泪しみつく帯のかたはし　甫
観音の鐘は霜夜にさえる也　夫
鰒汁を焚勢田の中宿　甫
よい声で浄瑠璃語る艾売　夫（天二・五ウ）
鎗頗の誰やらに似て　甫
盗まれて年貢の立ぬ西瓜畑　夫
洗濯ものに秋風がふく　甫

宵下の月東へまはる稲光上り　夫
　翌の軍の工夫するなり　甫
其まゝに汁の川海苔匂して　夫
　雨悦びにやすむ一村　甫
にた〳〵と色気違の笑ひ顔　夫
　紅のふどしに猫の飛つく　甫
折ふしは竹に南風の風が吹　夫　（天二・六オ）
　今に備後の便リ聞えず　甫
打寄て寺の諸道具改わ　夫
　出来分限者を憎立つゝ　甫
いかい事雪に折たる松檜　夫
　鷹の犬引谷の細道　甫
罷出る親父が先へ口利て　夫
　百廿手の太々をうつ　甫
跡月の十八日は日よりなり　夫
　木部屋の屋根に冴かへる月　甫
花みんと思へば心いさましや　夫
　膝をならべて鶯をきく　甫
大尾　（天二・六ウ）

吹初て心にわたる秋の風　、
親に似るうしろすがたや墓参　、
頃日のゆふべあしたや秋の様　、

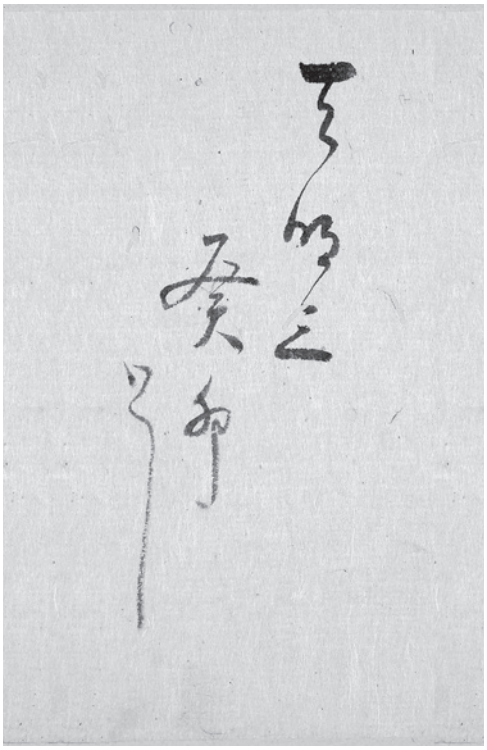
七夕の相おふ空や花もみぢ　、
一よさを雨の月から晴るゝ月　、
宵の間や雨に濡たるけふの月　、
雨晴てゆゝしき月の木草かな　、
影坊や月につく〴〵四十顔　、（天二・七オ）
ねられぬや荻の上風窓の月　、
下みちもみゆるもみぢの木間より　、
山深く住やあらしの小よ碪　、
わが家も誰ソながむらん初しぐれ　、
空寒し時雨のあとの宵の月　、
凩に雑水（ママ）煮るゆふべかな　、
寒菊やきくはさま〴〵咲つくし　、
世の中や師走の中の雀とり　、
めん〳〵に門を叩てとしのくれ　、（天二・七ウ）
凩の日も二三日ぞとしのくれ　、
雁がねの又めづらしや年の暮　、

空寒し時雨の跡の宵の月　秦夫、
　大根取込軒の木がらし　甫尺
子を連た乞食に茶漬振舞て　、
　髭の涎に蝿が飛なり　夫
廿年前から松のこけかゝり　、
　公事の済まで草を刈さぬ　尺　（天二・八オ）

ウ息負(ママ)て西国したる兵右衛門　夫
　階子のかげにみゆる藁苞　尺
ちどり鳴浦の焚火の光して　夫
　遠き雲井をかこつ我恋　尺
仏にも神にも身をば打任(まかす身のほどや)　夫
　瓢に生し薄一もと　尺
泥亀喰隣に月の影さして　夫
　踊くづるゝ門の秋かぜ　尺
二三人連て戻りし御客人　夫
　うつかりとして鋤につまづく　尺
志賀の花堅田は雁のさはぐ頃　夫
　天窓丸める徒弟の春　尺
ヲ雛櫃の蓋に鎧をかざり置　、
　ふとんのうへゝ朝日さし込　夫
木綿売宿の女をねめ付る　尺
　裸に成し水風呂の恋　夫
薮垣の溝のあたりに水鶏鳴　尺
　昨日もけふも雨の日のくれ　夫
追〳〵に米ふみ登る樫木原　尺
　未満　（天二・九オ）

　丹後宮津跨山子ニ別ル
海山やわかれて後は冬ごもり　（天二・九ウ）

（天二・八ウ）



【天明三年】

天明三癸卯どし　（天三・一オ）

なに事も心にうれしけさの春　、
立初る日こそしのゝめ朝ぼらけ　、
あちこちと野べに摘るわかなかな　、
せりなづなあらしが中を色に出る　、
七くさの梅に聞えるとなりかな　、
雪かゝる松のこなたやわかなつみ　、

　宿に若な　（天三・一ウ）
しら雪に爪紅みゆるわかなつみ　、
静さや(うらゝ日や)小川ながれて簀戸の梅　、

静さや野くれ山くれ春の水　、
山々や遠の雪山春日さす　、
しら梅や主は貧に痩にける　、
星はら（寒し）〳〵今宵や梅のつぼむ時　、
星寒しはら〳〵梅のつぼむ時
薄月や梅に立のく人のかげ　、（天三・二オ）

林義牧先生を
訪らひ参らせて
かくれ家や侘てみやこの月と梅　、
鶯にやがておとらぬ朝ごゝろ　、

八幡の野辺にて
雁鴨もかへらぬ神の野のけしき　、
春霞俄にたてり男山　、（天三・二ウ）

男山にて
紅梅に児の顔みる山の坊　、
坊跡や薄が中の梅椿　、

八幡山にて遠望
淀川やほのかにごる春の水　、
鶯におもへば悲し人を啼　、（天三・三オ）

岩崎氏伯父追悼
越中の陸史身まかり給ふと聞て
雲遠きわかれと聞ケば梅さびし　、
たが心もぬけて野べのこてうかな　、

嵐山にて
雨雲や花にかよふてあらし山　、
花ひとつ我にちるさへ（ちりくる）嵐山
見過して花なき桜静也　、（天三・三ウ）

桃山にて
むら〳〵と菜種の中や桃花　、
後の世の事もおもはぬ桜かな　、
雨晴て日に曇りけり桃の花　、
顔付やぬからぬひなの料理人　、
祝ふてのほどにひゐなの目鼻かな　、
雁去ンで湖の水なん〳〵たり　、
頃日や帰る〳〵と雁の声　、（天三・四オ）
蝶の羽に飯こぼしけり雛の膳
鶯の油断もなしに初音かな

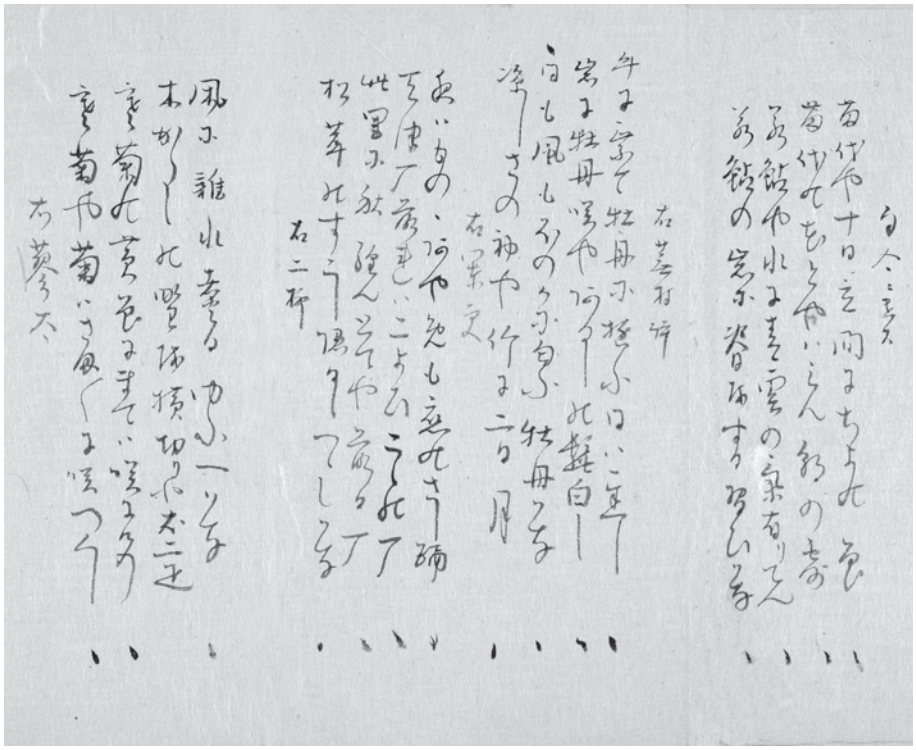
可再案
再案　鶯のめづらしき日に初音かな　、
昨日けふ雨になれたる蛙かな　、
咲そめて人にみらるゝ桜かな　、（天三・四ウ）

幾戻りけしきをよ半の時鳥　、
めづらしき人に逢けり衣更　、
花生て手もと涼しや衣更　、

仮初に出て聞けり時鳥　、
一声やあはれをつくすほとゝぎす　、
秋句　油手やふすまつかんでけさの秋　、
折からの心まうけや時鳥　、（天三・五オ）
時鳥初音に浮世しのばるゝ　、
ほとゝぎすまてる心を色音かな　、
時鳥雲井を夜半のから衣　、
郭公一よ〳〵にあだならぬ　、
時鳥まつとせし間に初音かな　、
冬　棕櫚の葉の風（や）にはた〳〵年の暮　、（天三・五ウ）
烏にもおとらばよきに綱鵜かな　、
わが心われとみらるゝ清水かな　、
美しき鳥の羽拾ふ清水かな　、
むすぶ手に日かげ涼しき清水かな　、
寝心や蟬の遠音の浮沈　、
鳴入て蟬の声すむ巌かな　、
初蟬に静かさまさる山路かな　、
蟬鳴や細谷川の瀬を早み　、
行かひや人花やかに夕涼　、
椽側や袖口みえて夕すゞみ　、
聞馴ぬ声やとなりの夕涼　、（天三・六オ）
一葉づゝわかれて涼し庭の松　、
一雫岩を落つゝ清水かな　、

旅行　、
行先や釣がね草に日はくれぬ　、
初秋やゆふべあしたに思はるゝ　、
秋立や梢の蟬の鳴音より　、
秋立や軒のすだれに日影さす　、（天三・六ウ）
秋の（ママ）　、
春日野や花とちりかふ朝の露　、
暁や草間の露の光より　、
しら露に影さす野べの朝の月　、
油手やふすまつかんでけさの秋　、
けさの秋柳にみゆる風もなし　、
顕はれて日よりが中の秋の空　、
書をみればいとゞ淋しき秋の暮　、
須磨寺に火を打音や秋のくれ　、（天三・七オ）
一声の余情に寒し鹿声（よるの）　、
島山や月はなかれて鹿の声　、
いかばかり思ひぞこめて鹿の声　、
閼伽棚や静にみゆる菊の花　、
菊の花障子にこもる天気かな　、
朝風や萩に隠るゝ鹿の尻　、
古郷へもどりて寒し後の月　、
菊いろ〳〵只むづかしき浮世かな　、（天三・七ウ）
待宵はいざよひに似て頼もしく　、

かげろふや薄が本の女郎花　、
門口や牛の面ふく秋の風
日はさしてすだれにさはる秋の風　、



句合ニ出ス

苗代や十日立間にちよの色　、
苗代の花とやはみん朝の露　、
若鮎や水に青雲の気有リてん　、
若鮎の岩に背をする習ひかな　、

（天三・八オ）

右蕪村評

牛に乗て牡丹に遊ぶ日は遅し　、
岩に牡丹咲やあるじの髭白し　、
、日も風もほのかに匂ふ牡丹かな　、
涼しさの初や竹に二日月　、

右闌更

夜はものゝあやめも恋のさし踊　、
天津雁落ればこよひこゝの雁　、
此里に秋経んとてや落る雁　、
松茸のすこし隠るゝつゝじかな　、

右二柳

（天三・八ウ）

凩に雑水（ママ）煮るゆふべかな　、
木がらしの野を横切リ（ママ）や犬二疋　、
寒菊の黄色にまでは咲にけり　、
寒菊や菊はさま〳〵に咲つくし　、

右蓼太

月しばし柳を抜て松の枝　、
みち〳〵て見ぬ間に月の動キかな　、

椽鼻に畏りけりけふの月　、
ひや〳〵と誠を添ふる秋の月　、（天三・九オ）

良水亭

出汐から見へてゆゝしや宿の月　、
頃日やわせは定る天気相　、
かげろふや露をふくみて女郎花　、

八月十六日八幡放生の場を拝して

有がたや魚刎鳥は羽をならす　、
覚束なくれ行野べの女郎花　、（天三・九ウ）
水音（ヲト）や浦山里の後の月　、
後の月やゝ更行て雲早し　、
○衣手や浮世に寒し後の月　、
稲の穂や秋も定る後の月　、
松杉の木立も寒し後の月　、
後の月あらしを含む雲ゐかな　、
四五軒の家作寒し後の月　、
時雨には程もあるらし後の月　、（天三・一〇オ）
茄子引て門は露けし後の月　、

名月を見ありきしも、きのふけふのこゝちこそするに、はや後の月とて、野らの気しきも事かはりたれば

明くれの雲井澄けり後の月　、

深草元政の墓を拝して

我なみだ無縁にこぼす草の露　、
賑やかや籾干門の菊の花　、（天三・一〇ウ）
四五軒の家から濡るゝ初しぐれ　、
心から見れば外山の初しぐれ

橋立再案

橋立や浪にゆられてちよの松　、
山畑や霜に逢たる蕎麦の花　、
花に葉に寒き色也水仙花　、
時雨来や紅葉葉計ぬるゝほど　、
押分て汲水白しもみぢ川　、（天三・一一オ）
かたげたきものは紅葉の小枝かな　、
奥もある谷のもみぢの木立かな　、
一とせをおもへば寒し冬籠　、
念仏さへ申さで寒し翁の日　、
たゞならねよるのみやこの鉢叩　、

けふの紅葉たのしきにまた酒の味　野行
時雨にむかふ猿の吟　秦夫
五六人長ヰ刀を横たへて　甫尺
くるゝ峠に鹿の啼出す　東塘
しら浪のよせては返す浦の月　夫（天三・一一ウ）

修学寺行

あるかたの紅葉ゆかしと人々にいざなはれて
心より紅葉て出るもみぢ狩　、
行すがら見やれば鞍馬山は
くろくして只静なれば
又ゆかし紅葉も見へず鞍馬山　、（天三・一二オ）

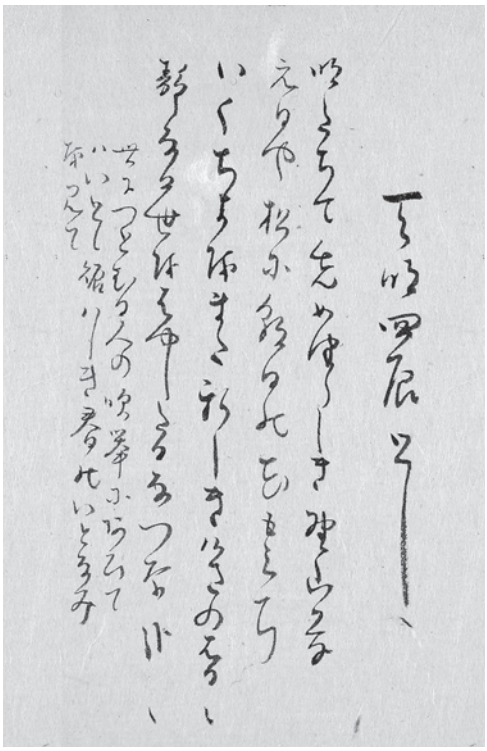
御茶屋の紅葉は橋にちり、
池に横とふ。げにや、いそのかみ
の風流おもひやられて
いにしへもみゆる御茶屋の紅葉かな　、

高台寺行

静さは萩より暮るゆふべかな　、秦夫
膝に手をおく八朔の月　甫尺
秋風に絵図引大工袴着て　良水
汲ならべたる水の涼しき　雲り（天三・一二ウ）

仰山や門は木をわる年の暮　、
棕櫚の葉や風にはた〳〵年暮　、
むつかしき世の交りやとしの暮　、
酒呑てしばし慰むとしのくれ　、
ほ句する心もありや年の暮　、（天三・一三オ）

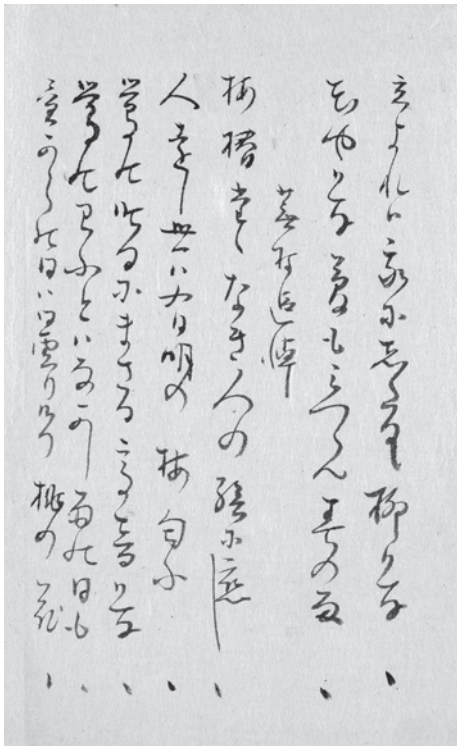
奈良行。冬の句有。不写。（天三・一三ウ）



【天明四年】

天明四辰どし
明たちて先めづらしき野山かな
元日や松に朝日の花もみぢ
いくちよをまた新しきけさのはる　、
静なる世をはやしたるなづな哉　、
世につとむる人の吹挙にあひて
は、いとゞ賑はしき春のいとなみ
を見て　（天四・一オ）
時めくや御組やしきの門の春　、
鶯の間に来啼小庭かな　、
鱠盛香に匂ひけり梅花　、

咲初て一輪梅の花寒し　、
聟が来て娘にげこむ門の梅　、
また祝ふ梅やわかなに閏月　、
初霞何国はあれど和歌浦　（天四・一ウ）



立よれば我にしだるゝ柳かな　、
花やかな夢もみつらん春の雨　、

蕪村追悼

梅椿たゞなき人の絵に恋し　、
人遠し世は有明の梅匂ふ　、
鶯の昨日にまさる高音かな　、
鶯のわぶとはなかじ雨の日も　、
昼からの日は曇りけり桃の花　（天四・二オ）

ひな祭り畳にたるゝ柳かな　、
ひなの日にかしこくなりぬ娘の子　、
日にちらで雨に落けり花椿　、
雪よりも静也けり春の雨　、
遠がたや柳かくるゝ雨の人　、
蝶の羽に雨降いだす堤かな　、
味噌部屋を追出されけり猫の恋　、
夜るの雨桃ちり軒の桜さく　、
声あらば鳴べき雨の小てうかな　（天四・二ウ）
あだならず我にちりけりゆふ桜　、
けふも又花に暮行人の顔　、
頃日や花より花に日を過す　、
夕暮や松のかひよりちる桜　、
夕ぐれて人気さんしや桜狩　、
山門や花にいで入都人　、
風羅集二入　雨風や花しばらくの日数さへ　、
雨雲や桜にまがふ梨の花　、
此様にちれとや花に花がちる　（天四・三オ）

知恩院にて

ちる花の局とも見ゆる御堂哉　、
堀かへす小田や蛙の声の中　、
桜葉のうら風初て（吹かけて）春ぞ行　、
こんにやくもあんばいよしを花の春　、

四山亭の佳景聞
　からに目にみぬをうらむ
わがこゝろ遠き四山の花見かな　、
　勢州御園四山亭勧進に遣ス
　翁九十回遠忌に　（天四・三ウ）
手向ともみるや野山の花に鳥　、
　鷺坂寺にて
先問ん鷺坂山の白つゝじ　、
雉子鳴て鷺坂寺の日暮かな　、
蝶の羽にわが袖うれし更衣　、
更衣て風吹添ふるたもとかな　、
月あさし片岡闇に啼水鶏　、
時鳥情にあまる高音かな　（天四・四オ）
中〳〵に声なくもがな時鳥　、
時鳥一こゑたらぬ野山かな　、
人伝に聞けり余所のほとゝぎす　、
葛の葉のうら吹風の蛍かな　、
残月や堤啼越す郭公　、
うたかたや哀待夜の子規　、
時鳥待心からなかぬから　、
ほとゝぎす木草の色に啼帰る　、
時鳥啼や木くさの色に出て　（天四・四ウ）
野の人の詠るかたや子規　、
頃日や何かに付ケて蜀魂　、
啼たつや竹田の野路の時鳥　、
時鳥啼てほどなく夜明かな　、
雨戸から野の人見たる五月雨　、
昼からや昨ふに似たる五月雨　、
五月雨や引出したる古布子　、
五月雨の晴につくろふ蜘の糸　、
山をでゝ啼わかれけり時鳥　（天四・五オ）
時鳥山を鳴出る夜の声　、
夕顔や軒の妻よりたそがるゝ　、
ほとゝぎす遠近人に啼過る　、
　暁台子元室をとゞめし折
　のすりものに出ス
　人々をとゞめしに、世の事のつどひ
　来て、あすは出なんとすれば、かの
　さかさまにきしや衣の、といひ
　けんもおもひやられて、哀一夜を
　たわぶるゝのみ
化ならぬ夜を啼更す水鶏かな　、
　東山南無庵に入り西山を　（天四・五ウ）
　さかなに酒三ばいを呑ム
酒にのむ五月雨遠しあらし山　、

真葛が原の夏の下庵　半化

さみだれ降くらせしに、やゝ、

六月朔日、めづらしく晴て

さすがに蟬も打なき、土用前、

の空花やかなれば、稲荷へ詣ふでし（森にて）

木の間より青雲見えて風薫る、（天四・六オ）

六月二日土用に入、天

三日よりまだ降つゞくにおどろく

水無月に残りてくるし五月雨、

六月七日いまだ降やまず、風はげしくて

風あれてけふはなごるか五月雨、

六月五日瓶原石井氏の叔母を悼

みな月や袖にかなしき涙川、（天四・六ウ）

世を思ひやりて雨ふりけるに

世の中のなみだや袖にかゝりけん

みな月寒くさみだれのふる

宇治きくやに宿りて時鳥聞

けるよしにて、良水子より父音

にきこゆる狂歌

時鳥啼てきくやの座しきより

みゆる朝日の山を落来て　良水

時鳥啼て菊屋ときゝしより

俤にたつ朝日山もと　秦夫（天四・七オ）

旅行　涼風に棚引雲の夜明かな、

旅より帰り来る西行庵主

寿照尼をとぶらふて

松竹やあるじ帰りて風薫る、

旅行

里〳〵の煙すゞしき夜明かな、

久かたや天の河原の下影、

けふも先命なりけり夕涼

すつかりとむいて涼しき瓜の皮、

北国の咄聞けり門涼、

涼風に袖も袂も皆うれし、

筋違に柳荒行白雨かな、

せはしさや盆に近づく蟬の声、

こそ〳〵と洗濯ものゝ暑かな、（天四・七ウ）

わたらめやわたらじ恋の天の川

作ものや作りならべてけさの秋、

恋初ていくつ成べし二つ星、

帷子の身に添にけりけさの秋、

朝顔に寝るも悟りの一つかな、

朝顔や露と咲ては露ときえ、

朝顔に二三日なるゝこゝろかな、

菊皿のむかし恋しや玉祭、（天四・八オ）

子や孫に世は賑はしき玉祭、

涼風のやゝうつろひて秋の風　、
目覚るや昼寝の顔へ秋の風
秋風にふと目を覚す昼寝かな　、
孝行の名やしほらしきすまひ取
勝角力柱もゆらぐ計りなり　、
再案　落付に素めん涼し玉祭り　、
同　見隠れや小松が本の女郎花　、
日は洩て竹にうつろふ秋の情　、（天四・八ウ）

西行庵にて

聞初る竹に桜に秋の風
　甫尺をとゞめ、軒の秋風に
　膝をならべて、むかし樗良
　法師のかゝるためしを語り
　いでなと俤みゆる計にて、
　そゞろにゆかし
此風情露の古人をおもへとか
　懐せばき月の夕暮　甫尺
　是にてかせん有。其外四かせん半巻興行。

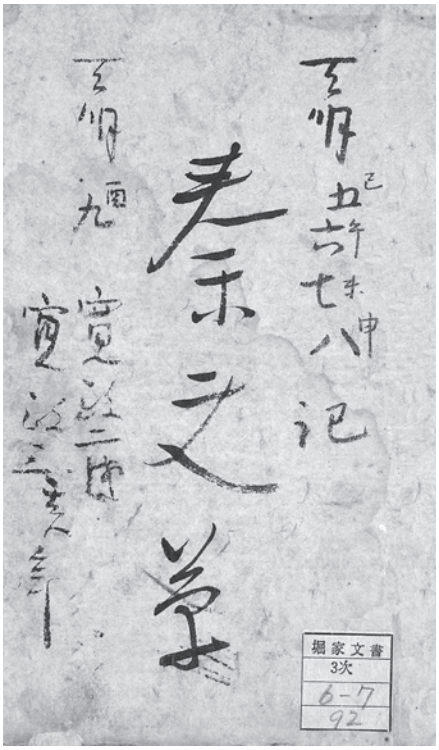
うき人の羽織をかりて踊りかな　、（天四・九オ）
稲妻や錦引さく峰の松　、
賑やかや川を隔てゝ盆の月　、
涼しさに哀をまぜて盆の月　、
おもしろや恋か無常か盆の月　、

　酬恩庵は、一休和尚迂化の
　禅林にて、世に聞えし戴
　髪の尊像を安置す。
　みづから刻ませ給ふみす
　がたいまそかりけるごとく、いと
　めでたく覚えて
有難や有髪御像露は何　、（天四・九ウ）

　瓶川、雨林の両子にもて
　なされて、客は甫尺とふたり
　にして四たり。灯に額を照
　らし、はいかいにたはるゝ
今宵先人の心を花もみぢ　、
呑ならふたば粉はからし秋の暮　、（天四・一〇オ）
松茸の有べき山の照葉かな　、
爰かしこ鹿啼たてゝ夜明かな　、
萩に啼薄にやつる鹿の頬　、
米洗ふ隣の門や菊の花　、
待宵に名月おもふながめかな　、
十六夜や松の左りに月の影　、（天四・一〇ウ）

（裏表紙見返し）

（裏表紙）



天明　巳五　午六　未七　申八　記

秦夫草

天明　酉九　寛政二戌

寛政三亥年

（天五・表紙）

（表紙見返し）

【天明五年】

旅行

雲雀啼野辺や麦畑なたね畑

宇治にて

春雨や早瀬を下る柴小船

春雨や旅人ぬるゝ宇治の里

興聖寺にて

奇麗さや庭に落たる花つばき

（天五・一オ）

むつきの頃、わが軒ばに

遊し也。些子いまや

身まかりしにおどろく

梅にみて花（桜）にかなしき命ぞも

植初て水鶏影（ママ）ろふ門田かな

鍬牛はむすこに譲る田植かな

さびらきや女夫が中に田三反

洛甫尺於此里、六月十一日

落髪、十三日、大津エ向テ、

橋立、北国行也

（天五・一ウ）

行末三千丈の愁をいとひ、

けふや、うばたまの黒髪を剃

おとして、夏は清水にあた

まをあらひ、冬はふすまを

かぶるに、きみよくすべて

なす事無為にして

遊ぶ甫尺坊をうらやむ

（天五・二オ）

月花や冬はともあれ夏坊主

去年は花に首途を祝し、

ことしは時鳥にわかれを

おしむ

茶けぶりに帷子涼し此わかれ

笠のうらに

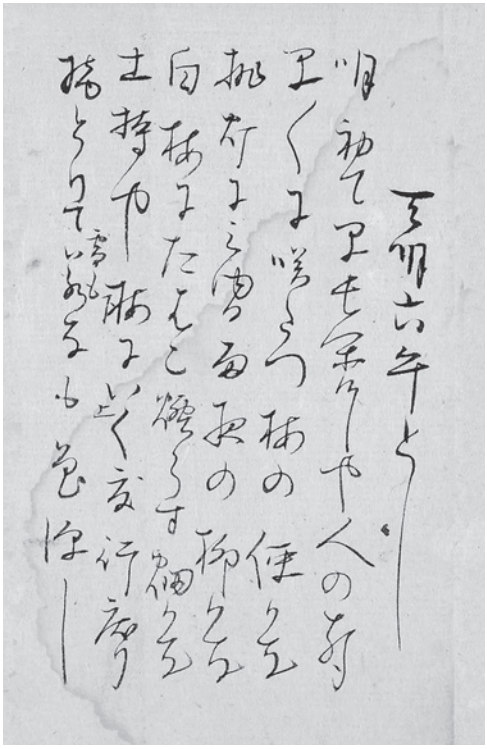
（天五・二ウ）

雨に日によを昼顔の花のかさ
と書付ける。是は網代笠の
上を張り、渋を用ひたれば、
すこしはり上りて、昼顔の
花のやうになん見えけるまゝに
高の　なか　露　千ン代　ちく
その中に高のゝ露を花とみて
せんよの春をちくと祝ん
菊は二たび匂ふ花と
歌に聞へけるに
菊の花三たび匂ふやしたし物
旬よりも年にひねたり初しぐれ
とゞきたる難波の文もとしの暮
よい顔したりとしの暮
木がらしに桜を植て冬籠
高雄にて
日を踏てしばし紅葉の橋わたる
翁忌
○有明や菊折かざす翁の日
○前書　けふや翁の忌日なれば、たま〳〵
ねぶたき目をとく起て、明ぼのゝ
けしき見ありくこそ、いさゝか
心計の手向なりけんや

（天五・三オ）

（天五・三ウ）

（天五・四オ）



【天明六年】

天明六午どし
明初て早も閑けしや人の声
早〳〵に咲たつ梅の便かな
挑灯にみゆる雨夜の柳かな
白梅にたばこ煙らす畑かな
土持や梅（下）にい（上）く度行戻り
摘とりて雪も若なも色深し
手にとれば若なの雪や消るほど
はやされて尚色深き若なかな
音高き笑の中のなづなかな
高塀や梅に折〳〵羽根みゆる

（天六・一ウ）

盃に三日月見えて梅の花
つぼみより花びら寒し梅の花
麦畑や雨日籠りて雉子の声
人につらく我に化なり春の雨
浪白くみゆる芦辺の春の雨
鶯や霞に声のうら表
春もはや音立初るなづなかな
灰猫の頬もぬぐはで恋心
夕月の梅にうらむる猫の妻
藪入や馬士のぼり込包みもの
やぶ入や声もほのかに詞尻
やぶ入や三人寄て切り刻み
藪入や背高娘の背戸へ出る
藪入や布子つもらす和尚様
やぶ入や三枚敷に五人寝る
やぶ入や永小便に待合せ
藪入の真中通るわかいもの
藪入や兄が羽織をつもらする
藪入やきざみたば粉の恋心
しら梅や畑さら〳〵鍬遣ひ
山陰や梅にゆかしき鍬の音
山陰や鶯啼て菰二つ

梅渓にて

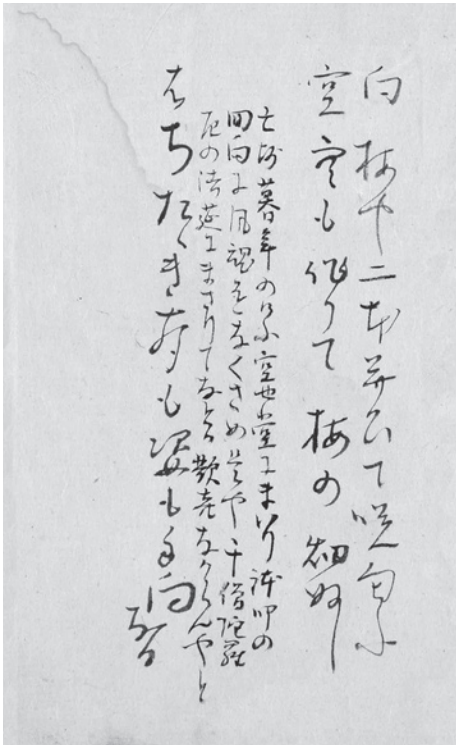
（天六・二オ）

（天六・二ウ）

（天六・三オ）

梅林間に梅の匂ひかな
香をこぼす梅より梅の間かな
梅谷やほのかに匂ふ梅の奥

（天六・三ウ）



白梅や二本並びて咲匂ふ
空空（ママ）も作りて梅の畑ぬし

亡師、暮年のけふ、空也堂にまいり、鉢叩の
回向に風魂をなぐさめ、是や千俗陀羅
尼の法莚にまさりて、などか歓喜なからんやと

はちたゝき声も姿も手向かな

夜昼やおのが一ふしと啼蛙

（天六・四オ）

黒田氏の年礼は、泉川の小鮎時分を例にして

みかの原黒田氏へ年礼

小鮎の時分を例にして

ゆつくり（年）と年礼かけて鮎鱠

諸国から仰ぎて花の都かな

（天六・四ウ）

難波津にあし火たくやはと、むかしの

人のいひけんも、今や時さり雲うつりて、

甍寸地を争ふといふなるなには石丁

丸屋清兵衛がもとに旅寝して、椽はなに

はらばい、眼下に天神ばし、天満橋

すゞ風に損とひ、笘船は暁のかたより

あらはれ、納屋には材木を引づる声

駄荷（賃）馬は守口の街に賑ふ夕附田

（天六・五オ）

打けぶり武庫山勝尾寺山は見かくれに

見へたりすべて此頃のありさま

場にしていさぎよし

こゝちよや何となにはの夏座しき

（天六・五ウ）

朝顔やきのふに似たる露の花

朝顔や露を結びて花の形

鹿鳴や野辺の月夜に風わたる

戸障子に響く隣のきぬたかな

秋もやゝおもはるゝ夜の碪かな

十ばかり打てせはしき碪かな

松杉にかゝりて月の影ふかし

白露に猶色深し（てりまさる）野辺の月

前書有　無為にして一よ見にけりけふの月

（天六・六オ）

十六夜や心かはりて月の興

池寒し早聞初る雁のこゑ

此頃の思はるゝなり雁の声

名月

日や静昼から月の思はるゝ

勝角力手をひろげたる秋はあらじ

門並やすこしばかりの菊の花

市丁や菊さま〳〵に降しぐれ

（天六・六ウ）

晴て寒し時雨て寒し窓の月

宵月や十夜に近き鐘の音

宇治にて

通円が名に侘たりや初しぐれ

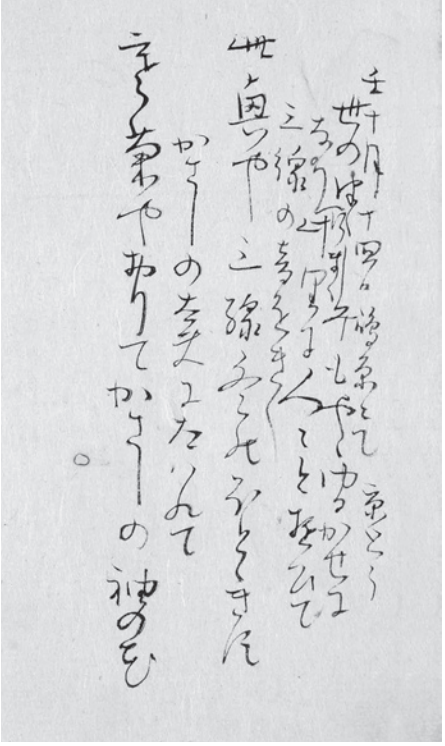
茶畑や時雨るゝ宇治の裏通り

傘に明星くらし夕時雨

一時雨ふりては照らす夜半の月

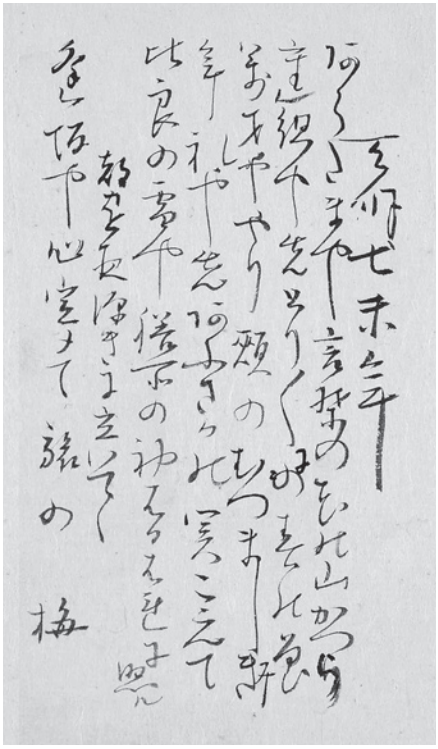
（天六・七オ）

わりなしや鱧一本の夷講



閏十月十四日、島原にて京とう
世のつゝしみもやゝゆるがせに
なり行まゝ、此里に人々と遊びて
三線の音をきく
此興や三線冬のほとゝぎす
かざしの太夫にたはれて
寒菊やおりてかざしの袖の花

（天六・七ウ）



【天明七年】

天明七未年
あらたまや言葉の花の山かづら
重組（ママ）や先とりぐゝの春の色
万才ややり頻のむつまじき
年礼や先あふさかの関こえて
比良の雪や膳所の初はるはれに照ル
都を夜深きに立いでゝ
逢坂や心定メて旅の梅
宇治にて
茶坊主の梅折かざす畑かな
梅が香にふれてあらしの干大根
鶯も雀も遊ぶ軒の梅

（天七・一オ）

しら梅にみゆるたばこのけぶりかな
紅梅もありて文かく人のかげ（や 居間に 部屋は）
紅梅や奥にものかく人のかげ

○春はうれしきのみに日もうつり行て

梅柳かれこれ花の彼岸かな
年々や花にふまるゝ麦の中
興尽て帰る山辺に桜ちる
おもしろやいとはしほどの風にレ花
よくみれば頻かすむ蛙かな
ちる花の中に飛入こてうかな
見おろすや花の間の人通り
桃山や桃（花）を咲せて鍬遣ひ
段々や花に入こむ人のむれ
こしかたや花に発句のはづかしき
花ちりて安〳〵風のわか葉かな
空豆も麦も見事や春の雨

（天七・一ウ）

御室にて

一重から八重まで花のさかりかな
茶摘から麦迄花（続）くひよりかな
日は落て月にゆゝしき夏野かな
きのふは雨に春の行ゑを
かこち、けふは袷にてん気を
よろこぶ折から、郭公の

（天七・二オ）

（天七・二ウ）

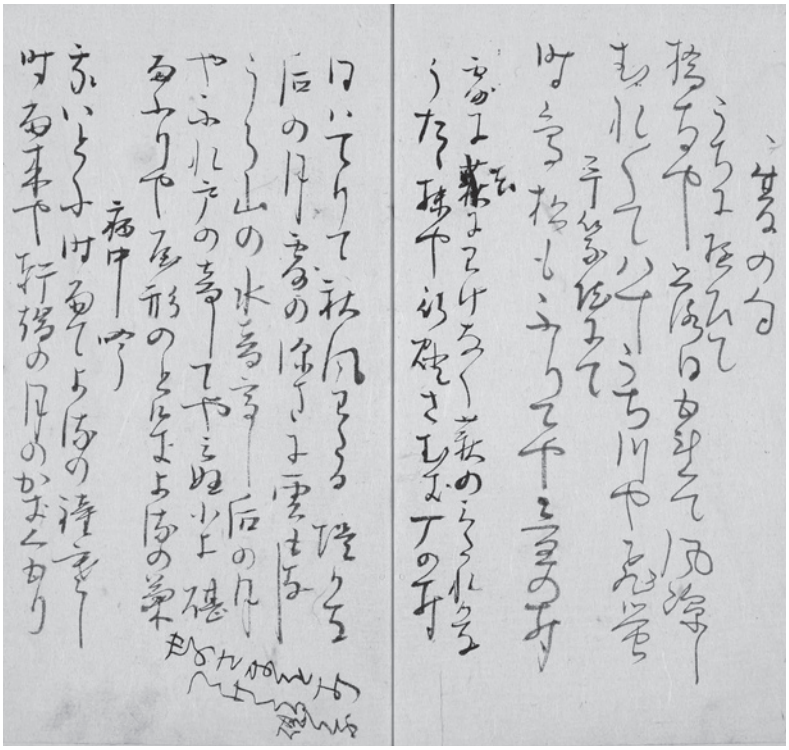
啼いでけるに驚く

時鳥まだき心に初音かな
柳みだれ日影やあさきかきつばた
花に葉の折れて見事や杜若
座中にてりやうるもすゞし初真瓜
しばらくに雲ちり行て松の月
朝よさや露をふくみて女郎花
世話やきや先づ預りて分ケ相撲
うす雲にあらじや添ふて出る月
影細き戸口によりて月見かな
雁ねぶるかざしよ芦の五六本
すさまじや裏の泥田に落る雁
山本や焚火あらはにうつ小よきぬた
露けしや草にやつるゝ菊の花
霧深し有明月に船の声
すゝきちり萩ちり秋の蝶いかに
咲初て彼岸にあひぬ寺の菊
黄菊白菊露しみ〴〵とうるはしや
菊咲て家内のこらず馳走かな
朝霧に在口みえて菊の花
雨の月雁の羽に光りさし
雁がねや岡山こゆる雨の月
月影や岡山こゆる（べ 鳴 こす）雨の雁

（天七・三オ）

（天七・三ウ）

（天七・四オ）



夏の句

うぢに遊びて

橋守や落日もれて風涼し

むれ〳〵て八十うぢ川や飛蛍

平等院にて

時鳥松もふりてや昼の声

露に萩（花）にわけなく萩のみだれかな

うた、寝や行燈さむき雁の声

日はてりて秋風わたる堤かな

后の月露の深さに雲もなし

うら山の水音高し后の月

やぶれ戸の音してやみぬ小よ礒

世のさまを打つゞけたる礒かな

雨ふりや屋形のどけきよるの菊

病中吟

我いとふ時雨てよるの鐘寒し

時雨来や軒端の月のかきくもり

取みだす在所の様や降しぐれ

翁忌や昼は時雨て夜は月よ

出てみれば十夜まいりの月よかな

浦はまやくるゝ方より啼ちどり

遠くちかく聞ゆる風のちどりかな

ちりもみぢもみぢの瀧とながれけり

日はしばし残りて寒し遠もみぢ

日はぬくき門やもみぢに埋（イケ）大根

ちりて来て大根に交るもみぢかな

目に立や火燵ぶとんの紅さらさ

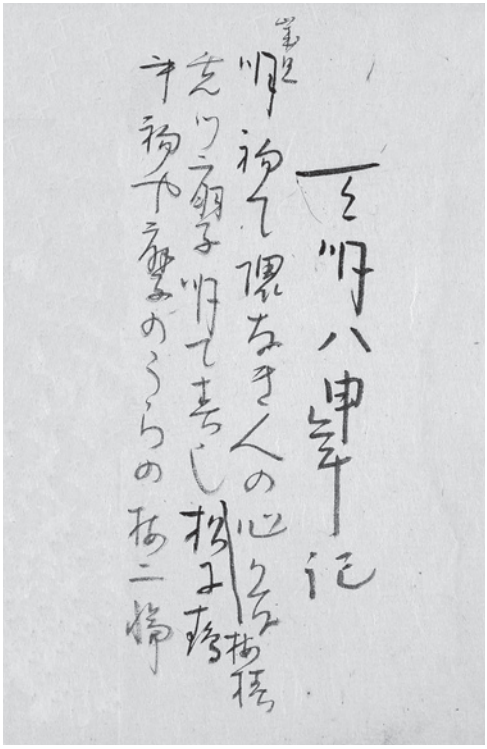
都辺や声かくれなき鉢たゝき

（天七・四ウ）

（天七・五オ）

（天七・五ウ）

（天七・六オ）



【天明八年】

天明八申年記

歳旦　明初て隈なき人の心かな

先づ扇子明て春也松に鶴（梅椿）

書初や扇子のうらの梅二輪

書初は扇子に書てよかるべし

人日

音高きわかなやけふを花ざかり

鶯の雨に濡たる遠音かな

半日は酒にゆだんや梅の花

歳旦　月は更科日は家々やけさの春

七草の外に目出たしふきのとう

（天八・一ウ）

鶯や雨の柳に声の場

山里や鶯啼て這入口

鶯の羽風に梅の匂ひかな

鶯や毎日啼てたのもしき

鶯の声問〳〵や割木わり

〔　　〕に木をわるとなりかな

半分は蔵にかげろふ桜かな

仕合や花咲出す雨の後

風あるゝあとから霞む春日かな

谷間や日の色こめて朝霞

念仏和尚餞別

風ひくな花に時候の定まらず

旅百里身は蝶鳥のつばさかな

割木わる間〳〵や鶯の声

旅宿や二階めづらし春の雨

咲もちるも花に化なり春の雨

物好の去年にかはる花見かな

いなり玉屋にて

山吹や宿はなじみの別座敷

のどかさやきのふの雨に春の水

山越シや花の月よに高咄し

くつさめの響にかすむ谷間かな

（天八・二オ）

（天八・二ウ）

竹嶋亭

刈込やなの花みゆる蔵の間

旅行

旅衣羽織着ようか衣更

白壁やわがはがくれのうぢの里

べつたりと茶摘にかゝる天気かな（在所かな）

世のいとまをぬすんで

一日二日出あるけば、いさゝか

旅行おもひこそすれ

目に付や小草の中のすみれ草

一里出て猶おしまるゝ春のくれ

脇句 岩がねつゝじ顔にかゞやく

なの花やいなり（野中）の鳥井人通り

（天八・三オ）

猿沢池にて

青柳やせんべいちらす鯉の花

興福寺

桜ちりて千とせの松に飛こてう

致誉和尚賀

松にちぎり竹に早手の花（や）の春

摘初る心の花のわか葉かな

白けしの花の一重ぞまことなる

ひなびたる恋やあらゆる茶つみ唄

しはぶきや竹の子時の薮見まゐ

（天八・三ウ）

一村やわか葉の中の茶つみ唄

時鳥何を心にかけり啼

ほとゝぎす待や心のしほらしく

門先や時鳥まつ立すがた

朝よさや人にまたれて郭公

水鶏なけ空豆めしの塩かげん

（天八・四オ）

南岳亭

咲つゞく庭の色香やさつき山

上田氏のなにがし、しばらく

此里に住ゐ給ふをとぶらひ

けるに、早いなか馴たる

調度のみゆれば

けし咲や世を住替て糸車

雨ふりや莚だゝみの茶の匂ひ

よし襖へだてゝ見えてかきつばた

（天八・四ウ）

うぢ茶屋

すゞしさや庭一ぱいのいざり松（に痩たる）

行水や門に咲たつ花あふひ

南無庵の建られし双林寺芭蕉堂もはや三とせ、四

とせもふりゆけば、庭のけしきもおぼろげにみゆ

ほとゝぎすの姿に茂れ庵の梅

（天八・五オ）

南無庵にて

留主に来て酒に得終に花あやめ

（天八・五ウ）

今様や羽織みじかき夕涼

三縁寺

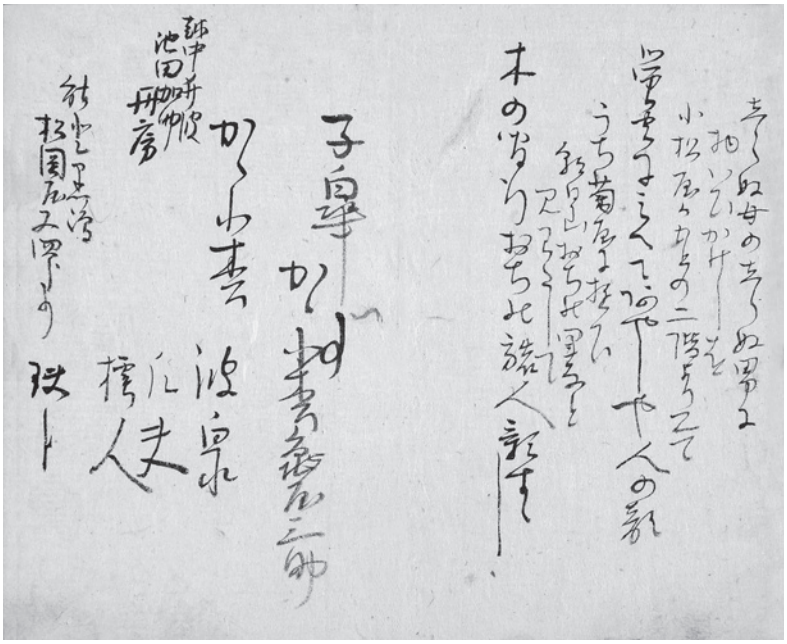
此寺や門ゝからゆかしけしの花

双林寺閑阿弥にやどりて

山もとやわか葉がさねに宿寒し（朝）

誰やらが恋のすがたよとぶ蛍

（天八・六オ）



しらぬ女のしらぬ男に物いひかけしを

小松屋がもとの二階より見て

蛍火にみえてあやしや人の顔

うぢ菊屋に遊び、朝日山、おちの里など

見わたして

木の間行おちの旅人影すゞし

（天八・六ウ）

子皐事　かゞ小松　亀屋三助

かゞ小松　波泉

越中井波　池田加助　凡夫

丹房　樗人

能登黒嶋　松岡屋又四郎事　珎卜

（天八・七オ）

名月（此秋は）に都で名のれすまひ取

昼顔や朝顔の情は露しらず

きのふけふ雨の水鶏ぞ鳴つゞく

田休の牛も昼寝や五月雨

青楼に登りて

酒のめやけふも五月の雲厚キ

生花や床にぱら〳〵露涼し

静さや昼寝に遠き蟬の声

咲初る萩に涼しや御祓川

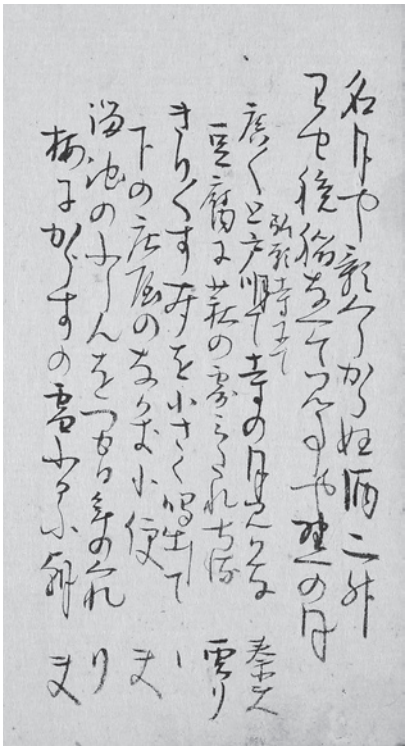
門掃て露に濡けりけさの秋

けさの秋とおもふ計に早わびし

（天八・七ウ）

雨の柳風も動かで秋の情
瓜なすびそれもはかなき麻木ばし
両隣寝すみて月の光かな
広ぐゝと戸明て寺の月見かな
名月や露ふりて野辺の花とちる

（天八・八オ）



名月や影くらからぬ酒二升
わせ穂稲なべて見事や野べの月
　弘願寺にて
広ぐゝと戸明て寺の月見かな　秦夫
　豆腐に萩の露みだれちる　雲り
きりぐゝす声を小さく鳴出して　〃
　下の庄屋のながき小便　夫
溜池のふしんをつもる年のくれ　り

梅にからすの雪ふるふ朝　夫

（天八・八ウ）

名月湖水遠望
水や空ひかり露けき鳥の月
　石山に遊びて
石山や名たゝる月の澄のぼる
　旅行
秋風もなべて粟津のあらしかな
　風あるゝあした、土瓶に
　茶をしつらひ、机に向ひ、
　障子にあたる日かげに遊びて
あらためてけふおもしろや冬ごもり
　小倉にて
ざこ分る盥にまぢる木の葉かな
時雨行あらしの末や日の匂ひ
俳諧の実に入けり小夜しぐれ
日に染て雨に照まさるもみぢかな
影寒き膝にもみぢの入日かな
谷川の末やよどみてむら紅葉
山畑や麦蒔人に紅葉ちる
　うぢ興聖寺にて
僧山にかへるゆふべやちりもみぢ
　興聖寺前の川施餓鬼を拝みて

（天八・九オ）

（天八・九ウ）

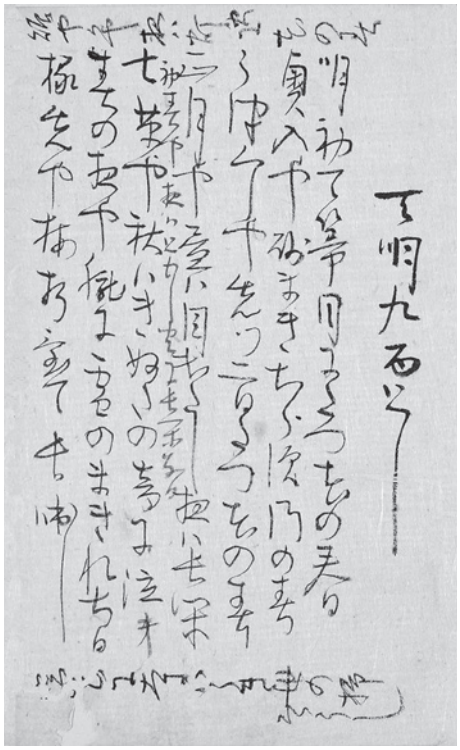
声水にながれて寒し川せがき

小倉堤の夜行

月代や寒き御池の鴨の声
鉢たゝき外にまぎるゝ声もなし
世の中にそまる心やとしのくれ
烧灯に分別らしや年の暮
わりなしや夫婦が中を鉢たゝき
さし向ひ住みて浮世を鉢たゝき
前酒から後酒まで匂へ雪の蕎麦
寒き夜やことに鳥羽田の芹の味
夕飯（食）の間にたまれ庭の雪
宵の間やあらし（風しづまつて）はやれて寒の入
からびたる声（りこが声ぐ）を集て友千どり

（天八・一〇オ）

（天八・一〇ウ）



【寛政元年】

天明九酉どし

明初て箒目にたつ花の春
奥入や砂まきちらす門の春
うつくしや先づ二日たつ花の春
正月や昼は目出たし夜は長閑
初春や夜はともし火に長閑なる
七草や秋はきぬたの音に泣（キ）
春の夜や朧に雪のまぎれちる
椽先や梅折置て長咄し
賑やかや夜は灯火に花の春
咲花に寺はうき世の掃そうじ
古今集世に有梅の匂ひかな

（寛元・一オ）

朧とは梅の匂ひに月夜かな
門口の砂はよごれて梅白し
桃咲や淀はにごりて春の水
桃遠く色香に濁る沢辺かな
町口や往かふ人に飛こてう
　此間句不写、並石山行あり
梅過て桜にちかき節句哉
咲出て寒き日も有初桜
行春や心あまりて言葉たらず
行春や水に五寸のかきつばた
花ざかり覚束なしやよべの雨
花さけば花に浮世の罪ふかし
なら初瀬後生をかけて花見哉
発句して花にさかなや人の口
月くらし柳しだれて鳴□
　待宵曇
待宵や心からなる月の友
　名月晴天
隈なくて言の葉もなしけふの月
名月や更てしみ〴〵人の声
　十六夜晴天
一よならず二夜隈なき月見かな
見過(明)さん今宵いざよふ月の影

（寛元・一ウ）

（寛元・二オ）

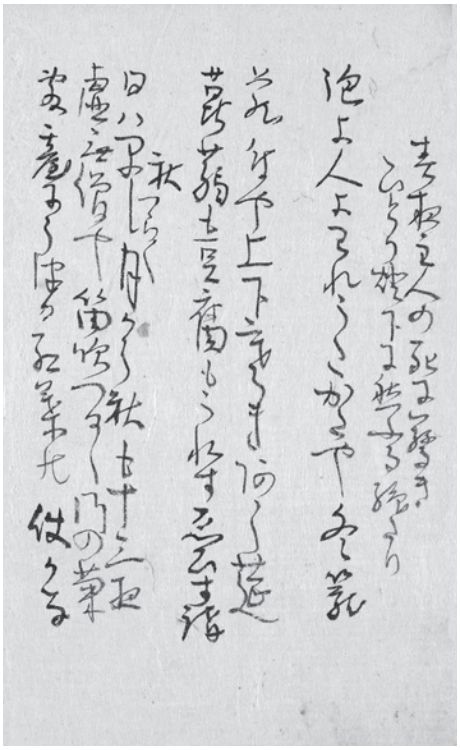
　月
よきほどに登りて月の静なり
隈なくて鼻のぐずつく月見哉
あからさまに門の床几に月見哉
広〴〵と小便したる月夜かな
すさまじや壁這ふ蔦に秋の風
　夏の句
麦秋やはしかき門のかざり太刀
朝風や芦の葉刈の乱れ髪
　古き団をもて骨を継、糸をかけ、
　これをしつらひみるに、皺はあれ
　ども、風はむかしにかはらず。まづは
　倹のひとつならんか。されど、昼は
　物うければ、よる〳〵蚊をたゝくべし
葛城の闇を手はりの団かな
　前後也
　四月十二日奈良行
出てみれば丁ど袷の天気(ひより)かな
　途中
西ひがしゆかりや野辺の時鳥
　高木興戸のほとりを行に
草も木もうごかで里の昼寝かな
　う月十三夜、月もやゝ涼しく

（寛元・二ウ）

（寛元・三オ）

南大門のほとり遊行して
のら〳〵と月に声なし夏の鹿
十四日、春日へまうでけるに、簾の
若葉、峰の松が枝なべて這
つどふ。藤の花の盛りなるに
神の三笠誰がぬふてふ藤の花
霞消て木末の藤や夏の雲
やがて雨降出ければ、大仏
前井筒屋がもとに遊びて
松杉に若葉に奈良の雨古し

（寛元・三ウ）



（寛元・四オ）

泡よ人よわれうたかたや冬籠
蔵付や上下寒きあら莚
莨蒻も豆腐もうれずゑびす講
秋つら〳〵
日は早し月から秋も十三夜
虚無僧や笛吹つるゝ門の菊
敷台にうつる紅葉の使かな
傘に鼠のつきし夜寒かな
妻乞や川鳴越して朝の鹿
在口や引ずる牛にてるもみぢ
紅葉狩割子をひらく座敷かな
濃く薄く色を重て花もみぢ
通天
紅葉見や谷のむかひの人は誰ソ
冬
浦浜や烟むすんで夕時雨
南無庵夜話に
ふつ〳〵と時雨にそむる心かな
しづけき夜べを炭団崩るゝ
漆せし琴を童子が居ざらせて

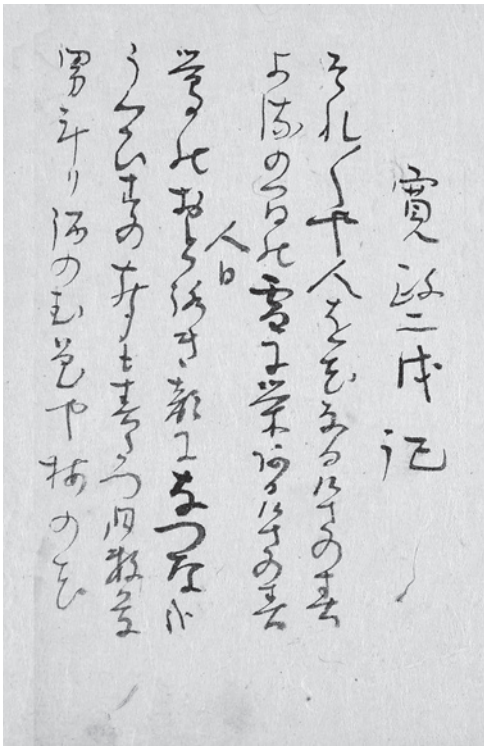
（寛元・四ウ）

秦夫
半化
羽州露橘

（寛元・五オ）

春夜主人の死に驚き
ひとり燈下に愁ふる絶たり

（寛元・五ウ）
（寛元・六オ）
（寛元・六ウ）



【寛政二年】

寛政二戊記

それ〳〵や人を花なるけさの春
よるの間の雪に栄あるけさの春

人日

鶯のおどろき顔になづな哉
うぐひすの声も春たつ日数かな
男計り酒のむ色や梅の花
横ぎりや梅に道あるあれ畑
鶯や蔵を隔てゝ啼かすむ
うぐひすや薮に蔵みる裏通り
鶯や朝日ちらつく枝の中

（寛二・一オ）

帰る雁花も雲井もおぼろなる

近州鏡山、志計追悼秋ノ句

残る名や有明月の花すゝき

（寛二・一ウ）

吉野行之句々有

鳶色の帯も二重（ハ）や更衣
ほとゝぎす待や心の更衣
ほとゝぎす待を心のたより哉
五月雨や猫の目光る屋根の漏
板の間や宵こぼれて杜若
火を焚てゆふべわするゝや五月雨
沾屏の金ものくらきさつき雨
椽先や手燭にみゆる露の萩
朝顔に秋は立けり五六日
落髪に白髪見初てけさの秋

（寛二・二オ）

薄雲に罌子（ケシ）まく花の名月か
いく度も背戸から門の月見かな

清光

空色の深きに月のひかりかな

十六夜

いざ酔ふてまどろむうちや月の影

（寛二・二ウ）

田家

ぶり〳〵の芋でもてなす月の客
薄縁りにひや〳〵月の光りかな
更行や野はしら〴〵と露の月

（寛一・三オ）

初冬遠望

松や紅葉雲や時雨にうつる空
昼は時雨よるは十夜の月夜かな
雪かゝる菊のかれ葉にみそさゞゐ
白たへや雪見にありく心さへ
朝市や人のあたまに降しぐれ
白たへや乞食も見へず雪の原
雪のすだれ風の心が吹まくる
月雪や顔はなじみや鉢たゝき
蕎麦売のあとは更行鉢叩

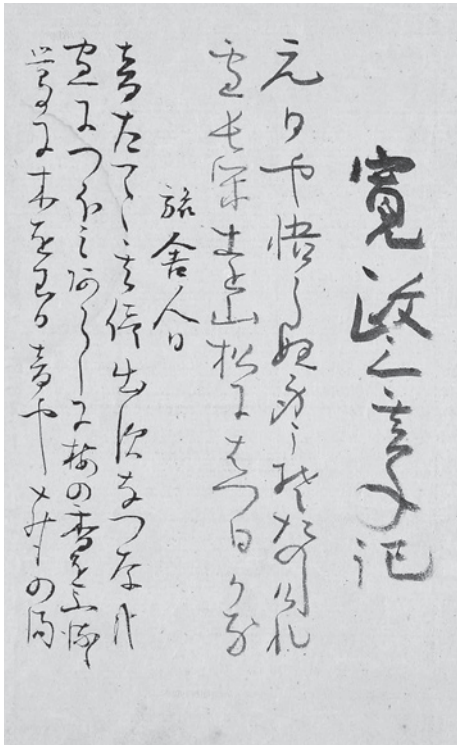
（寛一・三ウ）

良水もとより例早梅を給はりしに

取へりも梅もかはらぬ年のくれ
釘口のそばに立けり冬の梅
兎も角も世はなり合や年の暮
枯あしに風ふく冬の日数かな
都辺や木鳥も鳴かず鉢叩

（寛一・四オ）

（寛一・四ウ）



【寛政三年】

寛政三亥年記

元日や悟らぬ身こそたのしけれ
雪長閑遠山松にはつ日かな

旅舎人日

音たて、其侭出すなづな哉
雪につぼみあらしに梅の香をふる、
鶯に木をわる音や声の間
ゆるやかや遠鶯の啼かすむ
しだれては雨にもちかき柳かな
闇の夜を見越してくらき柳かな
梅ちりてぬくとき桃のつぼみかな
菜の花にぬけ道通る道者かな

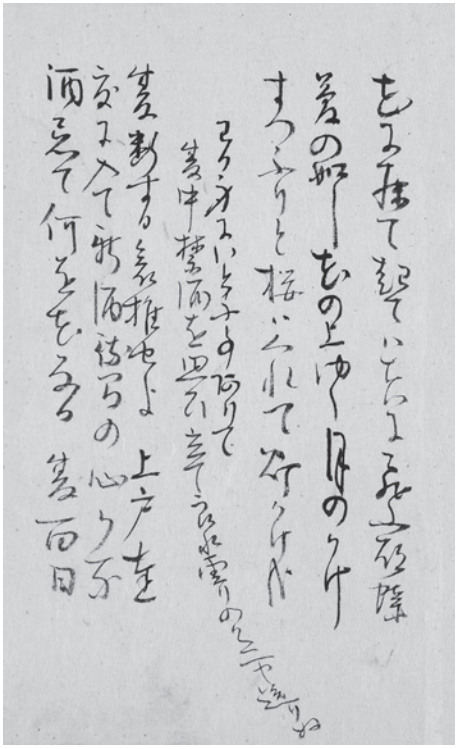
（寛三・一オ）

鶯に木をわる音や声の間
梅寒し綿の相場の高なぐれ
日は朝日月にはおぼろ梅の花
春の夜や梅の色香にくもるべし
つみて来て家内賑ふ若菜かな
　薪の能をみて
焚火ちるよるの胡てふや歌舞の袖
　二月堂へまうでゝ
行かひや花にもちかし二月堂
　南都角振町、藤田氏にやどる
鹿二疋角ふり町の朧月
　京師にて
見初るや花屋が門の初ざくら
あまのりや春めく伊勢の初だより
　こたび念仏精舎の五重相伝のみのりは（を行ふ）
　聴衆六十余たりとかや。みな
　世をつとめ、老にのぼりて安養界に
　一蓮を誓ふぞめでたし。夜に
　昼に唱名の声〳〵は、寺門に聞へて
　我もともに随縁の心を催ふす
本堂にひゞく念仏や老の花
　暮春
桜ちりて藤に暮春の雨の色

（寛三・一ウ）

（寛三・二オ）

（寛三・二ウ）



花に寝て起ては花に飛ぶ胡蝶
夢の如し花の上ゆく月のかげ
すつぷりと桜はくれて灯かげ哉
　わが身にいとふ事ありて、
　夏中禁酒を思ひ立て、
　良水、雲りのかたへ申送りぬ
夏断する哀推せよ上戸達
夏に入て新酒待間の心かな
酒忌て何を花なる夏百日
夏に入て酒のまぬ日や先づ三日
　石部の駅を通りて
中庭や藤に色よき客座敷
父〳〵と鳴ゆく闇（野辺トモ）のほとゝぎす

（寛三・三オ）

わせ植て水鶏の来啼門田かな
灯影して庭の若葉に人のかげ
時鳥まつに馴たるこゝろかな
麦秋や夜るは静(長閑)に時鳥

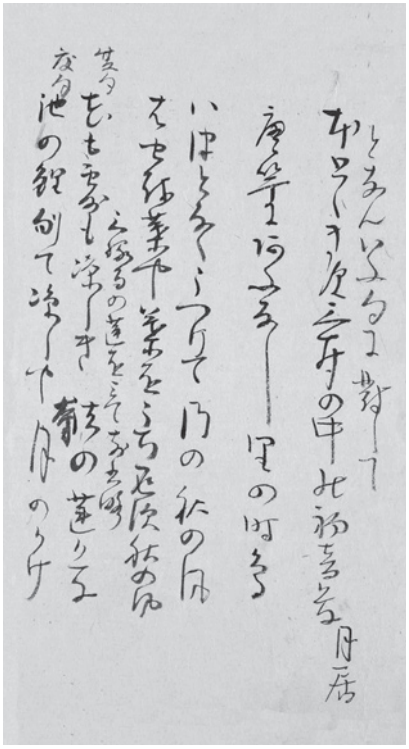
（寛三・三ウ）

居子とぶらひ、雲裡亭にやどる。予も燈下に膝を交て、月雪のこしかたをかたりつゝ、夜も半過行頃しも、時鳥の初音さやかに三声音づるゝは、客人をもてなすものか、又は三子を笑ふ類かおどろくや殊に三声のほとゝぎす　秦夫

雲裡亭に初音もらしけるをおかしがりて、その興をはしづくりて秦夫のぬしが句に

おどろくや殊に三声の時鳥

（寛三・四オ）



となんいふ句に対して

ほとゝぎす三声の中の初音かな　月居

唐竿にあぶなし里の時鳥
いつとなくうつけて門の秋の風
ばせを葉や葉をうち返す秋の風

三縁寺の蓮をみて　前書略

夏句　花も露も涼しき法(寺)の蓮かな
夏句　池の鯉刎て涼しや月のかげ
秋立や窓のゆふべの日かげさへ
生霊達今来ましたか鉦の音
三久や茄子としよる秋の風
空吹て心にわたる秋の風
見事さや作物にふく秋の風
咲初し野をなつかしや女郎花

（寛三・四ウ）

とうきびの上風おかし発句せん
影(ママ)ろひに笹の一重や星まつり
朝顔の花にうき世(わがや)の高斛

（寛三・五オ）

ことしの月十四、十五、十六と雨降、十七も八も九もすべて月の間、雨にて曇がちなり

大空や登り下りの雲の月
月夜　何某勾当が自賛の琴を聞て
塵(チリ)ととべ(飛)爪音高し月の雲

（寛三・五ウ）

北国行脚せし人の
音信も聞へざれば
雁のたより人は紅葉にうときかりき
草や木に心ありけり初しぐれ
まがき荒て蝶の泪よ初しぐれ
哀さや声なき蝶にふるしぐれ
夜時雨や軒の松風あるゝ音
――や軒端にあるゝ音はして
窓の灯や時雨をてらす川向ひ
ふごの尻叩く軒端の夕しぐれ
時雨来や筆のはしりに影くらき
雨雲の立や谷間のむら紅葉
折て来て座敷をてらす紅葉かな

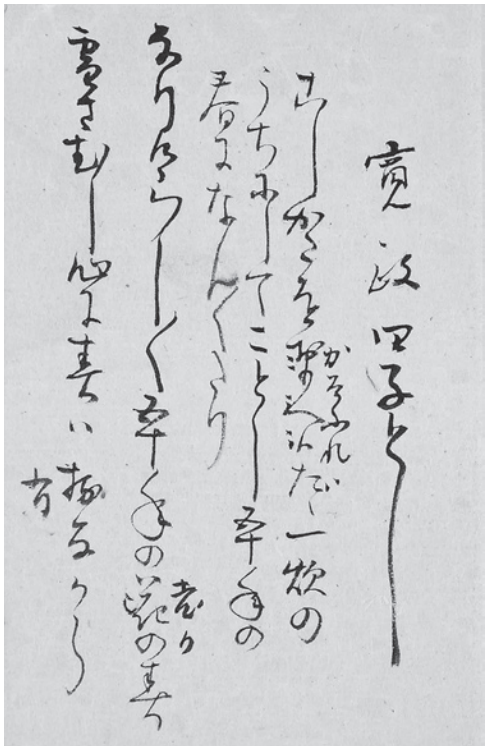
（寛三・六オ）

翁忌
穂薄に旅人見たし翁の日
ゾンキヤウや十夜まいりの人の声
念仏より蛸に名高き十夜かな
賑やかにうかれ念仏の十夜かな
鉦十座打明したる十夜かな
木がらしのひとり上手や竹の笛

（寛三・六ウ）

（寛三・七オ）

（寛三・七ウ）



【寛政四年】

寛政四子どし
こしかたをおもへばたゞ一炊の
うちにして、ことし五十年の
春になん〳〵たり
なりけらし〳〵五十年の花の春
雪さむし心に春は拵ながら
雪つもる木の間に春の日かげかな
旅舎人日
出這入にはやす宿屋のなづなかな
鶯やきのふの雪にけふの声
日に添ふて窓に影さす柳かな

（寛四・一オ）

雨気つく夜やなつかしみ朧月

初春

雨よりもちりくる雪に春の色
雨よりも雪に初春の光りかな
あら壁や干揚る桃の花ぐもり
一つ家の背戸のくもりや桃の花
雲雀なく空やながめて啼蛙
京口やねぶかの中の茄子苗
泥脛や二布は白きくわへぶり
花とちり花と飛こふ麦の蝶

（寛四・一ウ）

一　百人一首拾穂　藤田意仙
一　我庵集　小佐治要人
一　つれ〴〵讃　同柳下

菜の花や道者の通るぬかり道
蜆とる舟のあたりやさゞれ浪
しほらしや柳のしたの春の水
春の水日にうつろひてみゆる也
菜の花に今しばらくの入日かな
夜は花に明ゆく花のうごき哉
咲花にくらぶる人の往来かな

京口にて

（寛四・二オ）

（寛四・二ウ）

雲雀なく野辺や目をやる作り畑
花や露や萩のみだれのわけもなき
朝顔に光りはなちてわかれ星
一夜ゆへとし〴〵ゆかし星の恋
我影や月なゝめなる秋の風
朝顔やしばしがうちを咲ならぶ
さは〴〵と我影にわたる秋の風
夕風に顕にけりけさの秋
やすらへば雨と降けり夕しぐれ

東武某賀題菊契千秋といふ

いく秋や菊に似合のあるじ顔

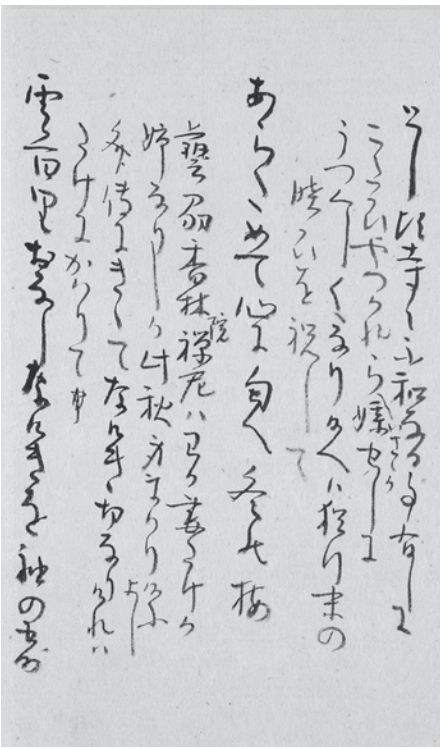
京師西村氏二十五回忌に

跡とふや菊にめでたき法の声

（寛四・三ウ）

（寛四・三オ）

（寛四・四オ）



とし頃寺へ不和なる事有しに、
こたび、やつがれらいさゝか媒せしに
うつくしくなり給へば、猶行末の
暁ひを祝して
あらためて心に匂へ冬の梅

芸州、香林院禅尼は、わが妻たけが
姉なりしが、此秋身まかり給ふよし
文伝にきゝて、なげき切なりければ、
たけにかはりて申
雲百里おなじなげきを袖の露

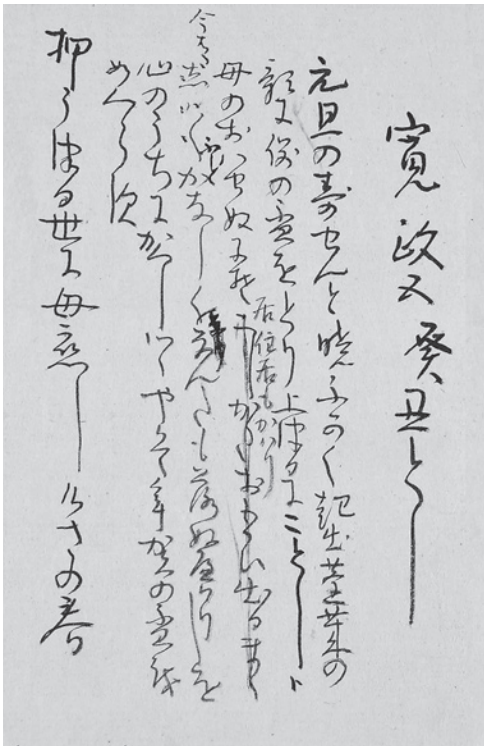
ことし十一月十六日、樗良十三年
正当になれば、人々打寄りはいかゐ有
おもかげにならべて寒し膝頭
樗良叟十三遠忌になれば
一とせの禁酒をやぶるとしの暮

（寛四・四ウ）

（寛四・五オ）

春　ゆるやかに水心あり春の水
酒のみてねむる間ゆかしとしのくれ
おもはずも碁を囲みけり翁の日

（寛四・五ウ）



【寛政五年】

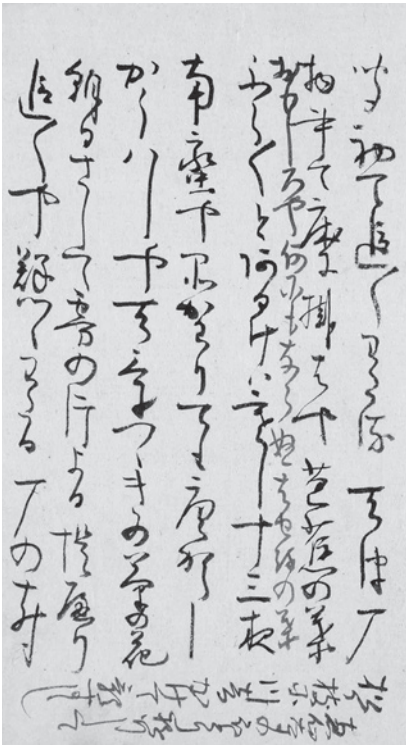
寛政五癸丑どし

元旦の寿せんと暁ふかく起出、蓬莱の
影に例の盃をとり上つるに、ことしは
母のおはせぬにぞ、さしかたおもひ出るまゝ
今はたしばゝかなしくなりなんだも落ぬべかりしを
心のうちにかくしつゝ、やがて年賀の盃を
めぐらす
押うつる世に母恋しけさの春
世にすみて色にめでけり福寿草
ゆるやかに水心あり春の水
此間句

（寛五・一オ）

いくちよを何に誓ひて星の恋
朝顔や露諸ともに光り合ふ
かはるともなくて秋たつ明り窓
　久しく絶にし宇治橋の
　あらたになれゝば
橋すゞしかさゝぎわたる夢心

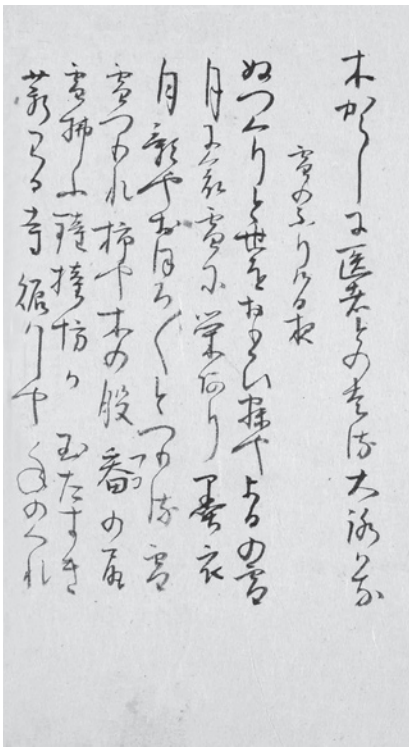
（寛五・一ウ）



聞初て追〳〵わたる天つ雁
物書て床に掛ばや芭蕉の葉
おもしろや何にもならぬばせをの葉
ふら〳〵とあるけば寒し十三夜
南蛮や品かわりても唐がらし
かうばしや天気つゞきの菊の花
朝日さして霧の片よる堤べり
追〳〵や群つゝわたる雁の声
　恵心寺のほとり遊行して
松が枝に川音かけて影すゞし
　田中亭
苔も石も秋たつ庭の朝じめり
春　梅が香や朝日を拝む松の間
　南都芭蕉翁菊塚建立に手向奉る
菊のかやむかしを今の薄月よ
　讃州屏風浦、西行の久の松の勧進に遣ス
枝に葉に春やかさねて久の松

（寛五・二オ）

（寛五・二ウ）

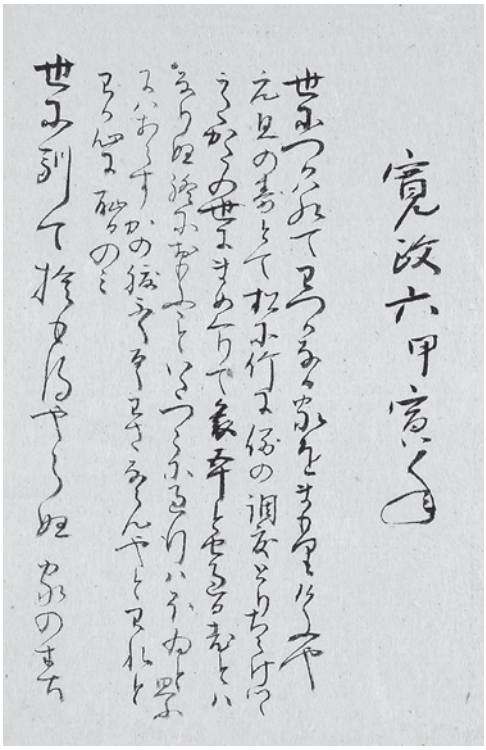


木がらしに医者どの走る大路かな
　雪のふりける夜
ぬつくりと世をおもひ寝やよるの雪

月に哀雪に栄あり墨衣
月影やおぼろ〳〵とつもる雪
雪つもれ柿や木の股畚(フゴ)の尻
雪払ふ鐘撞坊が玉だすき
薪わる寺賑はしや年のくれ
梅手折心の透間としのくれ
　甫尺坊東行餞別
みて帰れ奥の苫屋の秋の露

（寛五・三オ）

（寛五・三ウ）



【寛政六年】

寛政六甲寅年

世につかはれてわづかなる家をまもり、けふや
元旦の寿とて、松に竹に例の調度とりちらけつゝ
うたかたの世にまめぐりて、哀五十とせ過る老とは
なりぬ。終におもふことといたづらに過行は、ほゐと思ふ
にはあらず。かの腹ふくるゝわざならんやと、われと
わが心に恥るのみ
世に馴て捨も得やらぬ家の春
酒すこしなりて程よき礼者かな
蓬莱の右に老たり(わが侘)家の春
はし箱に一つや去年の唐がらし

（寛六・一オ）

春の部になれや雀の額つき
出代りや走に流す飛鳥川
庭の雪むらぎえ残る石の縁り
おもしろやすみれ花咲啼蛙
二三輪咲て匂ふや梅の花
梅の花匂ひながらにすがりかな
折添へて梅にゆゝしや手束弓
梅が香や雨にもちかきくもり空
鶯の声にもさはる余寒かな
鶯や谷の戸出てなじみ声
なつかしき事かぎりなし春の雨

（寛六・二オ）

椿市を通りて
紅梅にかはらぬ家のゆがみかな
梅の花寒さのぬけぬさかりかな
松にちら〳〵花かあらぬか春の水
山越や里は広みの春の水
匂ひして梅に柳のしだれかな
一すぢや野の道うかぶ春の水
山路来て山間やちらりとみゆる春の水
春霞毎日おしき入日かな
松原や右に立きる春の水
咲出すや世上は花に音高し
春雨や和歌の浦山おもはるゝ

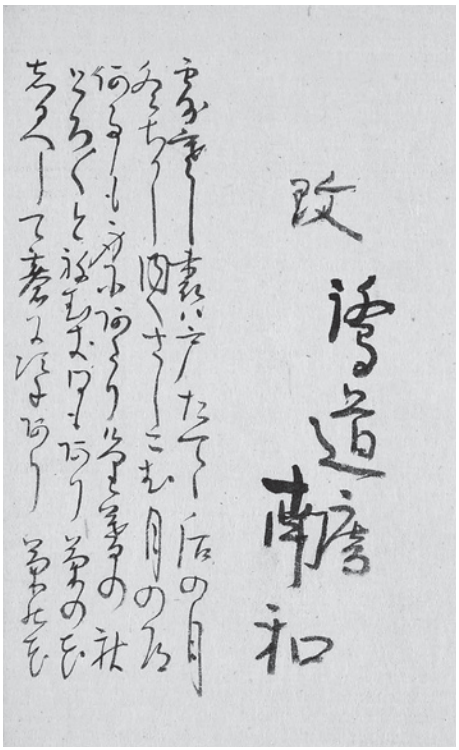
（寛六・二ウ）

碎々菜咲花見がてらや啼蛙
うれしさの見え透く蝶の翅かな
庭の花見つゝ花見の身ごしらへ
鶯や朝から啼てくるゝまで
春の名残おしむにたれり藤の花

（寛六・三オ）

袷着てみれば袂に風わたる
鶯に身ぶりは似たり更衣
罌子の花雨にもあはずちりにけり
化人となりてまたばや郭公

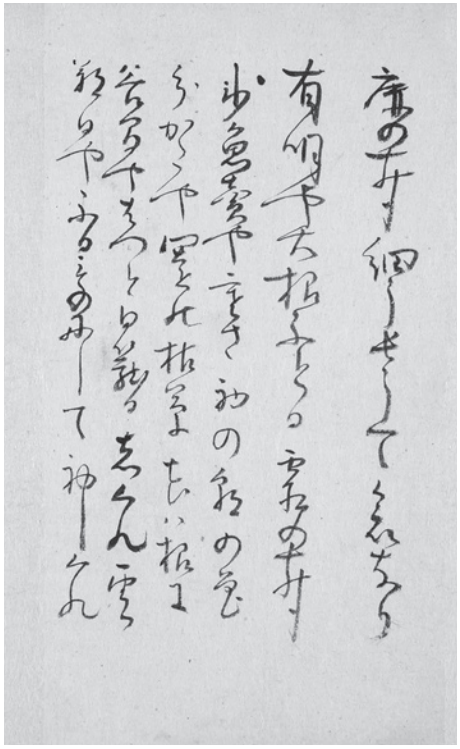
（寛六・三ウ）



改　鷺道庵　南和
露寒し裏は戸たてゝ后の月
冬ちかし内へさしこむ月の道

何事も身にあたりけり暮の秋
とろ〳〵とねむき日もあり菊の花
しるべして碁に次手あり菊の花

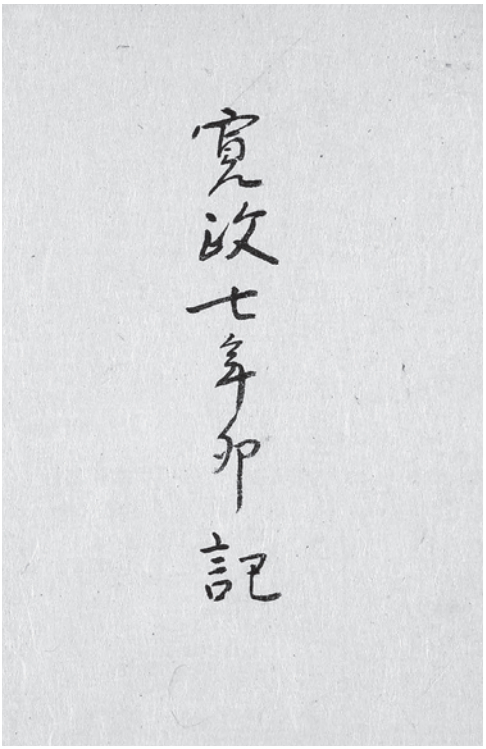
（寛六・四オ）



鹿の声細う長うて哀なり
有明や大根ふとる霜の声
氷魚売や寒さ初の朝の色
分かたや園の枯草花は根に
谷間やぱつと日籠るしぐれ雲
朔日やふるものにして初しぐれ
水鳥の声に冬もる寝覚かな
詫ながら名にたつ花の冬牡丹

（寛六・四ウ）

（寛六・五オ）



【寛政七年】

寛政七年卯記

立よればどこやらすごき柳かな
疱瘡の跡うつくしき春日かな

伏見桃山にて

接かへて若木ばかりや桃の花
あさつきもよしやよしの丶花の頃
炭をこす冬のはじめや翁の日

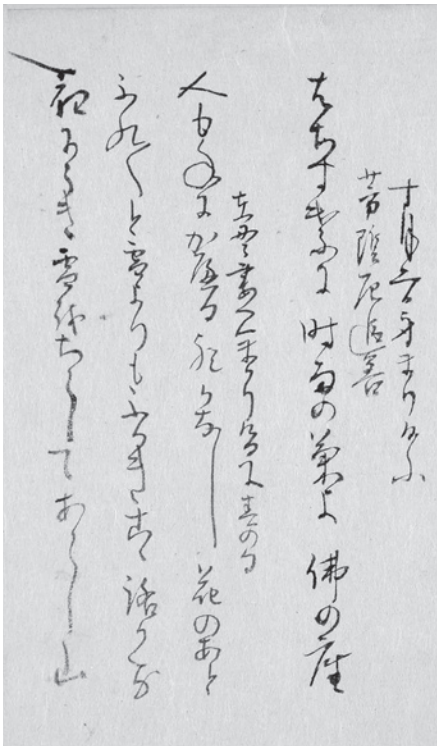
恵比須講

碁もうたず将棊もさ丶ずゑびす講
恵比須講や鯛に賑ふ神ご丶ろ

（寛七・一ウ）

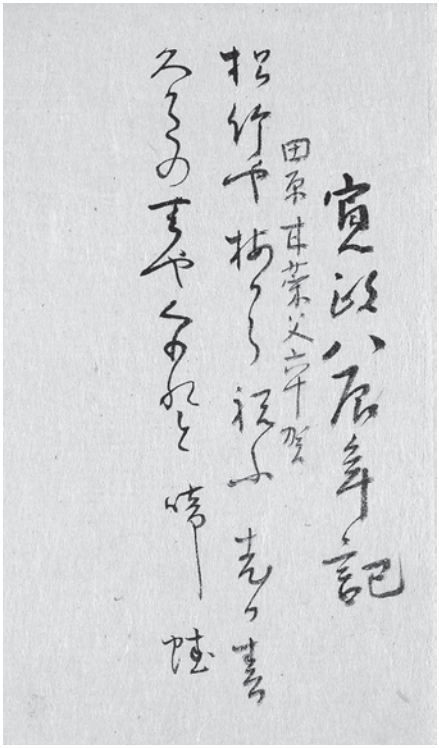
（寛七・二オ）

（寛七・二ウ）



十月二日、身まかり給ふ
芳陰尼追善
はちす葉に時雨の菊よ仏の座
　在貫妻みまかりけるに春の句
人もねにかへるかかなし花のあと
ふれ〳〵と雪よりもふかきこゝろかな
花にうき雪をちらしてあらし山

（寛七・三オ）
（寛七・三ウ）

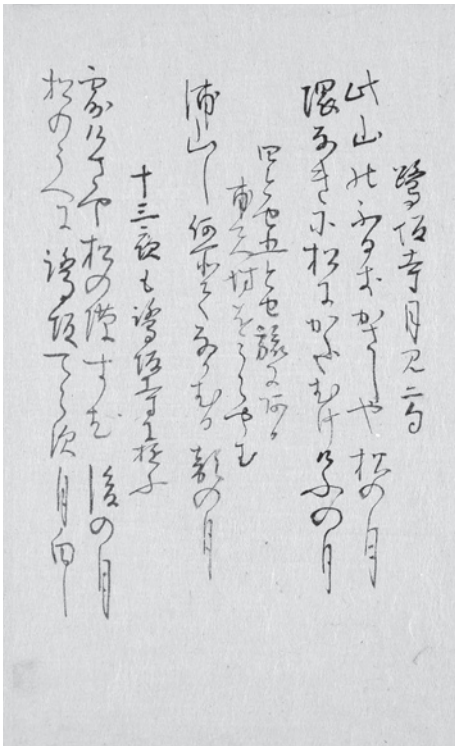


【寛政八年】

寛政八辰年記
田原甘菜父六十賀
松竹や梅から祝ふ老が春
久かたの天やくもれと啼蛙

花の形見つゝ下手絵やかきつばた
花のみにてる日もみえず杜若
五月雨や影はあやめに雲の月
水や空落ては登る五月雲
五月雨や峰に尊き鐘の声
一声や鷲のみのほとゝぎす
五文字に置て待ばや時鳥

（寛八・一オ）
（寛八・一ウ）



鷺坂寺月見二句

此山のふるきかざしや松の月
隈なきに松にかたむけけふの月

四とせ、五とせ旅にある

甫尺坊をうらやむ

うらやまし何所でながむる顔の月

十三夜も鷺坂寺に遊ぶ

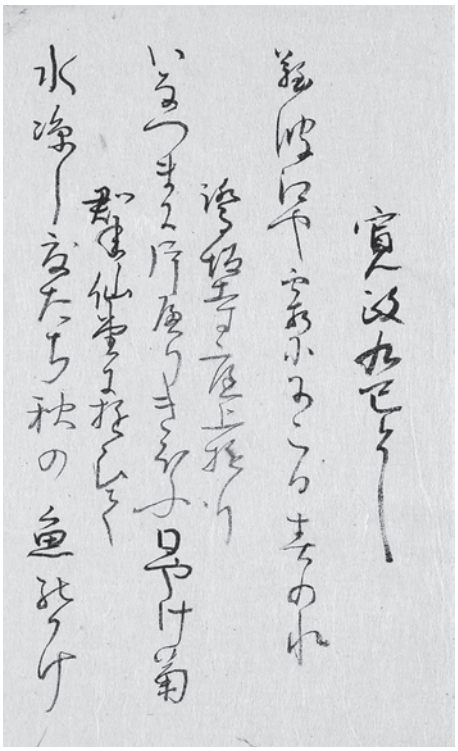
露けさや松の隙すむ後の月
松のうへに鷺坂てらす月白し
むさし野や枯し薄に日のあたる
日は落て薄に光るかれ野かな

神事御旅奉納

おりゐます稲葉の雲に神いさめ

（寛八・二オ）

（寛八・二ウ）



【寛政九年】

寛政九巳どし

難波江や霞ににごる春の水

鷺坂寺庭上遊行

いなづまに片へりきほふ日やけ菊

群仙堂に遊びて

水涼し夏たち秋の魚のかげ

同探題

いつのまに落て秋たつ一葉かな
長範が出立はたそや組おどり

宇治にて

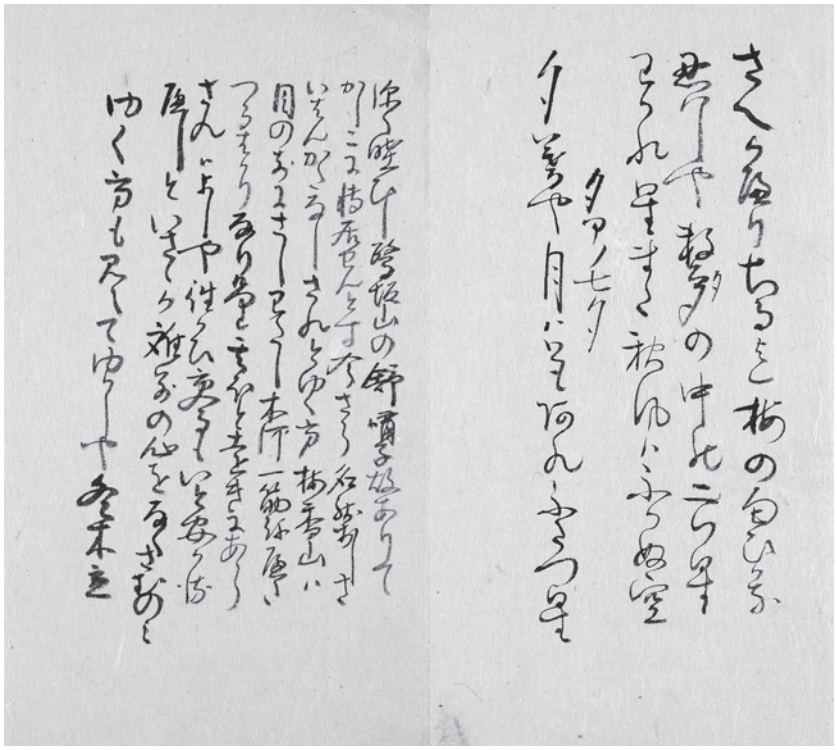
郭公宇治の夜半を鳴いそぐ

梅雨が母身まかりしに

（寛九・一オ）

かなしさや身はみな月の袖時雨

（寛九・一ウ）



さえかへりちる迄梅の匂ひかな
忍ばしや数多（タ）の中の二つ星
わかれ星まだ秋風はふかぬ空
　夕べノ七夕
夕暮や月はともあれふたつ星

（寛九・二オ）

深く睦びし鷺坂山の舒嘯子故ありて、かしこに転居せんとす。今さら名残おしさいはんかたなし。されど、ゆく方梅香山は目の前にさしわたし、木河一筋をへだつるばかりなりけり。其ほど遠きにあらざれば、よしや往かひ交るもいと安かるべしと、いさゝか離別の心をなぐさむのみゆく方も見えてゆかしや冬木立

（寛九・二ウ）
（寛九・三オ）
（寛九・三ウ）
（寛九・四オ）
（寛九・四ウ）
（裏表紙見返し）
（裏表紙）

『秦夫草』俳号等人名索引

凡例

一　同一連句中の重複は収載しない。

一　同一丁(半丁)の重複は収載しない。

【あ】

青銭　安八－五オ・六オ・七オ・九オ・一一オ・一三オ・一三ウ

網代　安九－一五オ

【い】

池田加助　→凡夫

意仙（藤田）　寛四－二ウ

石井　天四－六ウ

一空居士　→不流亭

一休和尚　天四－九ウ

井筒屋　寛元－四オ

岩崎　天三－三オ

【う】

上田　天八－五オ

雨林　天四－一〇オ

雲り　天三－一二ウ／天八－八ウ／寛三－三オ

雲裏　安九－一八ウ／天元－二オ

雲裡　寛三－四オ

【お】

翁（芭蕉）　天三－一一ウ／天四－四オ／天五－四オ／天七－五ウ／寛三－七オ／寛四－五ウ／寛七－二ウ

小佐治要人　寛四－二ウ

【か】

亀屋三助　→子皐

閑阿弥　天八－六オ

甘菜（田原）　寛八－一オ

【き】

菊屋（うじ）　天八－六ウ

暁台　天四－五ウ

【く】

黒田　天六－四ウ

群仙堂　寛九－一オ

【け】

敬止（井田）　安八－一〇ウ・一三オ／天元－五ウ

月居　寛三－四ウ

玄化堂　天元－一四オ

元政　天三－一〇ウ

【こ】

江涯　安七－一一ウ・一四ウ／安八－一九オ・二〇ウ／安九－一〇ウ・一二ウ

孔明　安九－九ウ

香林院禅尼　寛四－四ウ

跨山　天元－一四オ・一六オ／天二－九ウ

小松屋　天八－六ウ

【さ】

在貫　安八－五オ・六オ・一四オ・一四ウ／寛七－三オ

西行　寛五－二ウ

西行庵　天四－七ウ・九オ

些子　天五－一ウ

【し】
志計　寛二－一ウ
重胤　安七－六オ／安九－八オ
子皐（亀屋三助）　天八－七オ
四山亭　天四－三ウ
舎樹　安八－一一オ・一四ウ／安九－六ウ
酬恩庵　天四－九ウ
寿照尼（西行庵主）　天四－七ウ
春夜主人（几董）　寛元－四ウ
舒嘯　寛九－二ウ
嘯山　安九－九オ
二柳　天三－八ウ

【そ】
双林寺　天八－五ウ・六オ
曽川　安八－一ウ

【た】
たけ　寛四－四ウ
竹嶋　安七－三ウ／天八－三オ
田中亭　寛五－二ウ
玉屋（いなり）　天八－三オ

【ち】
致誉和尚　天八－四オ
茶良　→冷五
樗人　天八－七オ
樗良　安七－二ウ／安八－三ウ・五オ・六オ・一四オ・一四ウ・二一オ／天四－九オ／寛四－五オ
※無為庵も見よ

【て】
定雅　天元－一〇ウ
貞室（藤田）　安九－一五オ

【と】
涛山（平尾）　安八－四オ
東塘　天二－一ウ／天三－一二オ
得終　天八－五ウ

【な】
南無庵　天四－六オ／天八－五ウ／寛元－五ウ
※闌更・半化も見よ
南岳亭　天八－五オ
南和（鷺道庵）　寛六－四オ
※秦夫も見よ

【に】
西村　寛四－四オ

【ね】
念仏和尚　天八－二ウ

【は】
梅雨　寛九－一ウ
巴渓　安七－五オ
ばせを塚　天元－八ウ
ばせを忌　天元－一三オ
芭蕉堂　天八－五ウ
芭蕉翁菊塚　寛五－二ウ
波泉　天八－七オ
秦夫　安七－二ウ・一〇オ・一〇ウ・一一オ・一一ウ・一二オ・一四ウ／安八－五オ・六オ・七オ・九オ・一一オ・一三オ・一三ウ・一四オ・一四ウ・一九オ・二一オ／安九－一〇ウ・一五ウ・一六オ・一八ウ／天元－二

オ・一三オ・一三ウ・一四オ・一六オ／天二－四ウ・八オ／天三－一一ウ・一二ウ／天四－七オ／天八－八ウ／寛元－五ウ／寛三－四オ

※南和も見よ

半化　天二－三ウ／天四－六オ／寛元－五ウ

※蘭更・南無庵も見よ

【ひ】

瓶川　天四－一〇オ

【ふ】

父音　天四－七オ

藤田　寛三－二オ

蕪村　天三－八ウ／天四－二オ

扶卜（松岡屋又四郎）　天八－七オ

不流亭一空居士　安七－一三ウ

【ほ】

芳陰尼　寛七－三オ

甫尺　安八－五オ／安九－七オ・一一オ・一五ウ・一六オ／天元－二オ・一三オ・一四オ・一六オ／天二－四ウ・八オ／天三－一一ウ・一二ウ／天四－九オ・一〇オ／天五－二オ・二ウ／寛五－三ウ／寛八－二オ

凡夫（池田加助）　天八－七オ

【ま】

松井　天元－七ウ

松岡屋又四郎　→扶卜

丸屋清兵衛　天六－五オ

【む】

無為庵　安七－二ウ・七オ・七ウ／安八－三ウ・五オ／安九－一五オ・一六オ

※樗良も見よ

【や】

野行　天三－一一ウ

山岡　天一－一〇オ

【ら】

蘭更　天元－二オ／天三－八ウ

※半化・南無庵も見よ

【り】

李音　安七－三オ／安九－七オ

陸史　天三－三ウ

柳卜（小佐治）　寛四－二ウ

良水　安七－二オ・一〇オ・一〇ウ・一一オ・一一ウ／安八－九オ・一〇ウ・一三オ・一四ウ／安九－一八ウ／天元－二オ・五ウ・一四オ／天三－九ウ・一二ウ／天四－七オ／寛二－四オ／寛三－三オ

蓼太　天三－九オ

林義牧　天三－二ウ

【れ】

冷五（茶良）　天元－一三オ・一三ウ

【ろ】

露橘　寛元－五ウ

鷺道庵　→南和

おわりに ――秦夫の俳句――

秦夫は『秦夫草』を書き留めながら俳諧活動をみつめ、句集の編纂も試みていました。句の上下に「、」が付いているのが、秦夫自身の選んだ秀句です。また、各所に推敲の跡が残されているのも彼の息遣いが窺えるところです。この度の句稿の上梓にあたっては、自身のまとめた句稿が残されているので、これを上梓するという選択肢もありました。しかし、人柄が偲ばれる少し未完の句稿を選びました。充分に味わいたいと思います。

さて、秀句の多くは天明の初期にあります。作句数からみると、『秦夫草』を書き始めた安永期が最も盛んな時期です。与謝蕪村の点帖を最高点で得て褒美として手中にした頃です。また、三浦樗良という千載一遇の師に巡りあったのもこの頃です。秦夫は、樗良に出会う以前の句を書き留めていません。草稿の「句集」（3次／6-7／87）には、「宝暦八寅より安永四未迄之句千八百七十九除之」としています。何と、一八七九句も書き留めず、省くというのです。そこには、気持ちを刷新して新しい俳句に邁進する姿勢が髣髴としてきます。

しかし、句の内容が最も充実していたのは、天明期であると思われます。安永期の多作が結実したとも言えましょう。残念なことに、樗良が亡くなるのが天明元年で、心から慕う師の亡き後、俳諧の師をどこに求めて良いのか、模索していたのかもしれません。京都の宗匠である与謝蕪村、京都円山芭蕉堂の高桑闌更、京都から大坂へ移った不二庵二柳、江戸の宗匠である大島蓼太と、そうそうたる顔ぶれの宗匠に句を送っているのが、天明三年のことです。本書の天明三年八、九丁の図版（56頁参照）と表紙の背景にあげました。

また、句をみると、眼前の景だけではなく、聴覚などの五感を働かせて作句しているのが印象的です。観察が細やかで、都市系の洗練された詩境が感じられます。近世中期の京都俳壇は、蕪村などの都市系の俳諧が盛んでした。秦夫らの寺田俳諧も俳諧史的にみれば、都市系俳諧の流れの中に位置づけられます。一方で、京都の五升庵蝶夢らの芭蕉顕彰の動きが盛んになり、やがて全国に波及していきますが、京都での魁は闌更の芭蕉堂建立、花供養会の創始です。秦夫は、これにも少しく関わっています。しかし、やはり都市系俳諧の色彩が強いと言えます。

左に、紙数の許す限りで、私に秀句を抜き出してみたいと思います。五感の中でも、聴覚に優れた句が多いのが特長です。傍点を付しました。

草にちる風の上なるむしの声　（安七）
うぐひすの咽へさし入朝日哉　（安九）
ほどけよきほどに巻たる粽哉　（安九）
しばらくや闇の中よりつもる雪　（安九）
夏の湖日枝を扣てたばこ哉　（天元）
水音にすこしかたぶく野べの月　（天元）
渓〳〵の戸立る音や花の中　（天元）
隣にも飯たく音や五月雨　（天二）
薄月の水すゝりてや啼蛙　（天二）
乗合や顔に伏見の夏の月　（天二）
油手やふすまつかんでけさの秋　（天三）
日も風もほのかに匂ふ牡丹かな　（天三）

四五軒の家から濡るゝ初しぐれ　（天三）
蝶の羽に雨降いだす堤かな　（天四）
声あらば鳴べき雨の小てうかな　（天四）
昼からや昨ふに似たる五月雨　（天四）
五月雨の晴につくろふ蜘の糸　（天四）
うれしさの見え透く蝶の翅かな　（寛六）
氷魚売や寒さ初の朝の色　（寛六）

最初にあげた「草にちる風の上なるむしの声」の句は、野に虫の声を聞く、そこを風が吹きぬけて行くという景は、多くの詩人の心を捉えてきた詩材ですが、秦夫は虫の声に焦点を絞って草の上に吹き散らすと言い立てたのです。ここに彼の独自の視点を感じます。また、好んだ題材として「蝶」があります。「蝶の羽に雨降いだす堤かな」「うれしさの見え透く蝶の翅かな」らに繊細な詩心を感じます。

さらに、自分自身や周囲の人々へと視点を向けた人事句にも目がとまります。俳諧と向き合った奮闘の様子や、悟りに近い境地へと推移していく様子などが窺えます。傍点を付した「何にもならぬ」「発句のはづかしき」から「俳諧の実に入けり」「発句せん」へと俳諧に向き合う姿が変化していく様子が窺えます。また、時には雀に、時鳥に語りかけながら作句したのでしょう。「悟らぬ身こそたのしけれ」という姿が見えてきます。

俳諧や何にもならぬ年のくれ　（天元）
ほ句する心もありや年の暮　（天三）
こしかたや花に発句のはづかしき　（天七）

俳諧の実に入けり小夜しぐれ　（天八）
発句して花にさかなや人の口　（寛元）
元日や悟らぬ身こそたのしけれ　（寛三）
とうきびの上風おかし発句せん　（寛三）
梅手折心の透間としのくれ　（寛五）
春の部になれや雀の額つき　（寛六）
五文字に置て待ばや時鳥　（寛八）

右にあげた最後の二句は、作句状況がよく窺われるものです。意外に思うところですが、「雀」は季語ではありません。そこを歳時記の「春の部になれ」、入れようと言い立てるのです。また、時鳥の初音を聞くのは風流人の常ですが、その初音を待つ様子を、俳句の最初の五文字に「ほととぎす」と置いて待つと言うのです。いずれもほのぼのとした俳諧の「をかし」があり、人柄が偲ばれるところです。

次の句は、家族への想いが年とともに深くなっていくものです。秦夫は家業の傍らで俳諧に親しんでいたと思われますが、家族に支えられた生涯であったようです。妻の「たけ」の姉の死に際して、秦夫は妻に代わって「雲百里おなじなげき」（82頁図版参照）と言います。妻の歎きを我が事として受止める慈愛が感じられます。また、母を、子や孫をいとおしむ心もあります。それと同時に、家を先祖から受継ぎ、次世代に引渡すというさだめを、淡々と受け入れる決意が感じられます。

紙びなやもたれ合する人心　（安九）
親に似るうしろすがたや墓参　（天二）
顔付やぬからぬひなの料理人　（天三）

ひなの日にかしこくなりぬ娘の子　（天四）
子や孫に世は賑はしき玉祭　（天四）
つみて来て家内賑ふ若菜かな　（寛三）

芸州香林院禅尼は、わが妻たけが姉なりしが、この秋身まかり給ふよし文伝にきゝて、なげき切なりければ、

たけにかはりて

雲百里おなじなげきを袖の露　（寛四）
押うつる世に母恋しけさの春　（寛五）
世に馴て捨も得やらぬ家の春　（寛六）

近世後期の俳諧は、時として近代俳句の萌芽がみられます。近世俳諧は、古典の世界を借りながら、今様の世界を詠むのが主流ですが、作者自身の五感と向き合って作句するということが増えてくるように思います。秦夫の句にもそのような秀句がみられます。この度、秦夫の句稿を翻刻する機会を得て、近代俳句に繋がる視点を見出したことを成果の一つに挙げたいと思います。また、近世後期の京都の俳諧資料を影印、翻刻したことは、俳諧研究の基盤を固めた一つの成果であるが、今後の継続的な資料収集が課題として残っているところです。

付記

本稿は、科学研究費助成事業「近世後期京都俳壇における芭蕉顕彰資料の収集と研究」（課題番号１７Ｋ０２４７４）の成果の一部である。

また、立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」二〇一八年度共同研究課題「花供養をめぐる近世後期京都俳諧の研究」の成果の一部である。なお、成果の一部はWeb公開中である。

http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/rarebook/2/3/post-48.html

本稿をなすにあたっては、堀家の学恩を賜わりました。記して深謝申し上げます。

堀秦夫句稿『秦夫草』翻刻と南山城の俳諧

発行日　平成三十一年二月一日

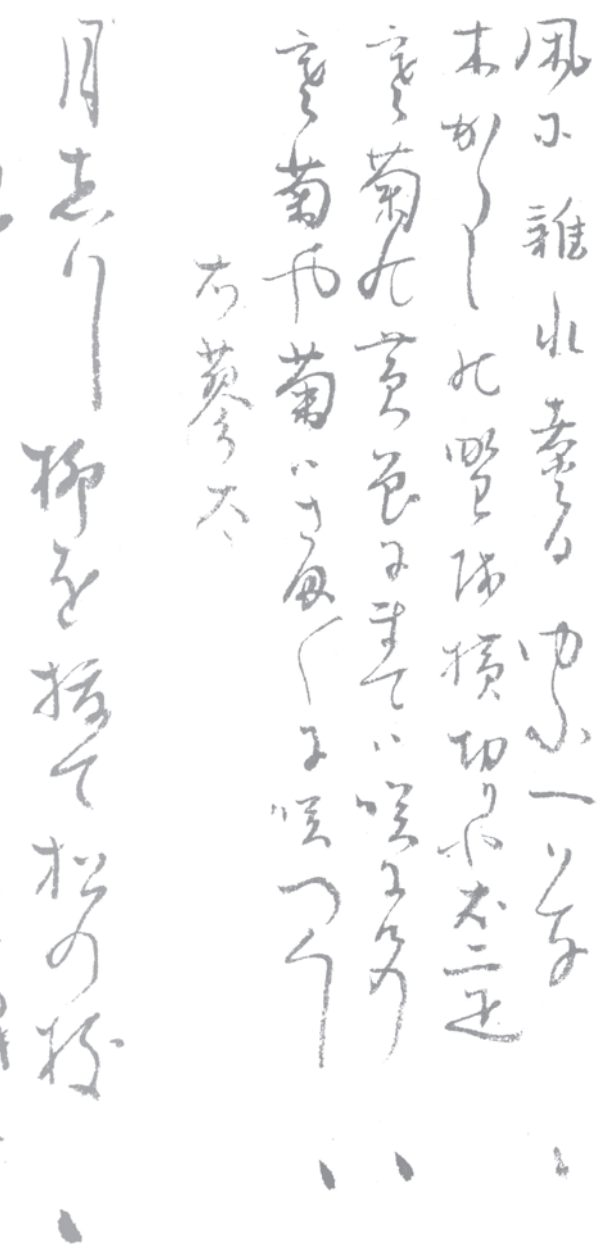
編・著　立命館大学（非）講師　竹内　千代子

印　刷　株式会社　昭　英　社

〒六〇〇―八一一九

京都市下京区五条通河原町西入本塩竈町五五八

電話　〇七五―三五一―一八一一



「はたをくさ」天明三年より